逆　説

１９９０年新年聖会記録

〈講師〉基督伝道隊戸畑教会牧師　伊規須太郎

基督伝道隊 戸畑教会

一九九〇年標語

㊨ 心をつくし　精神をつくし　思いをつくして
主なるあなたの神を愛せよ
（マタイ二二の三七）

㊥ だれでもわたしについてきたいと思うなら　自分を捨て
自分の十字架を負うて　わたしに従ってきなさい
（マタイ一六の二四）

㊧ 受けるよりは与える方が　さいわいである
（使徒　二〇の三五）

１９９０年新年聖会記録
目　　次

第０回・準備（89年末礼拝）（サムエル上3:10）　　　ページ
主よお話し下さい／幼な子に秘密を表される神…………７
イスラエルの喧かわしい状況／サムエルの誕生・献身／エリの功罪／幼な子に心を打明けられた主／エリ家の滅亡／主の声を聞く秘訣／主が行おうとされるわざ／視力も聴力も受け手の意志による／一人の為に力を表される神／あくまで聞かなければ／行く間に清められたライ患者／踏んで行くと開かれる／新年聖会の部分像／宅配便トラック／パウロの伝道旅行／激動の時代だからこそ語っておられる／聞いた者自身が立てられる

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

１　９　９　０　年

第１回（マタイ22:37/40）
私は心を尽くした／応えてほしい……………………２３
最後の週における論争／神はすべてを尽くす事を求められる／言葉の意味から／万物の創造者の求め／たちまち捨てられて当然のものを／早くからみ心に秘められた救い／限りない御愛に感じなければ／お言葉を心にいだいて守る／人間創造の目的

第２回（マタイ22:37/38）
互いを嗣業とする関係……………………………３５
何かに傾注しなければ生きられない／相手は２でもなく０でもない／神様に頼らぬと二重の罪／神様が私たちを嗣業とされる／互を嗣業とする関係／神様の求められるいけにえ／目に見えないものの価値／互に食べ合う？！／いずれの国民にこのように近い神が／神様の目に映っている私の道は？／桁の数が桁外れ！／機会は再び得られない？

第３回（マタイ22:37/40）
神様から愛されたように……………………………４７
二つの戒めの関係／「ように」という意味／許されたように許せばよいのに／与えられたのもあがなわれたのも／主の祈りについて特に言われているのは／百分の一を半分と思う！／一つの体の分肢／最も小さい者の一人ーーー即ち私

第４回（マタイ16:24 ）
自分の十字架を負うて従ってきなさい…………５５
弟子たちの信仰告白／天国から地獄へ／服従の五道①②／③自分を捨てる／④自分の十字架を負う／④-2十字架の力／私に従って来なさい／自分の命を救おうとすれば／神様の為に命を失うと／至聖所の垂れ幕が裂かれた／親展書状〈ペテロ〉〈アハブ〉〈ダビデ〉〈エステル〉／指さしを除け／神の山の海抜高／天使たちの羨望／倣う為に必要・十分な福音書

第５回（ピリピ2:5）　ページ
私に倣う者となってほしい……………………７１
救いの達成に向かって／自分を捨て自分の十字架を負うて／罪と重荷を取り去って下さる／模範を残された主キリスト／神様から取り扱われたように／救は神様が保証して下さるもの／裁き主に委ねられたキリスト／弟子の足を洗われたキリスト／模範に倣えば同じようにされる／やるから分かって来る／始めた方は遂げられる／報いを与える神は生きたもう／路線の変更は上に向かって／お言葉に従う時は自分の事はおく

第６回（イザヤ45:22）
十字架の前でどこに立つか……………………８５
簡単だから低級とは言えない／人間は謙虚にならねばならない／慈愛に満ちたすみか／神様のわざを真似ようとすれば／物があって動いていると言うことは／尋ねるなら私を開く／義なる神、救い主／十字架の現場でどこに立つか／十字架を負うと従う事がやさしくなる／従順になると神様に用いられる／勇士の手に握られたろばの顎骨／十字架の言は神の力／主権者の約束を待つ／不撓不屈まことの富豪／救いは溢れ流れて行く

第７回（マタイ16:24）
選択と報い……………………………………１０１
主に従う道とは？／選択すると堅くされる／聖徒たちの望んだ報い／栄光の報いを望むと今が変る／報いの受け方について／寡欲は大損失／己が日を数える知恵の心／命の代価は払いきれない／踏み出すと顧み助けて下さる

第８回（黙示録3:18）
神に対して富む為に…………………………１１７
最悪の教会に恵みを与えようと／裸の恥／すべては神の賜物／無代価で最も良きものを／乾いた一片のパンも／飲み飽けよ食い飽けよ／餅と油のもてなし／天国銀行の利子／預かった資産を増やす／天国の礎石に証印

第９回（1テモテ6:11/12）
エゴを避けよ／永遠の悔いを残さぬように…………１２９
最悪の誘惑者／８分の６拍子１小節／全員を合格させようと／金銭の性格／全世界を得て命を失う悲惨／縄梯子に手を触れて沈む／後悔が追い付かなかった金持ち／糧にならぬものを求めて突進／永遠の命には見えるもの見えぬものすべてを含む／心の目を凝らして

第１０回（マタイ22:37/40）
神がまず愛して下さった……………………１３９
最後の週の論争／辞書を引く（心・精神・思・力・尽くす）／審判の言葉の間に無限愛／愛されるという負債／神様を愛するとは／事実がある事と感謝する事は別／自分の事だけ考えると行き詰まる／神様が力を発揮される確かな恵み／使命ある限り支えられる／帰天者の足を引っ張らないで／最早心配は無用

第１１回（マタイ16:24 ）　ページ
個人的に招かれている……………………１５１
戸惑うことはない私に従ってきなさい／常に新しい事を行われる神／命の営みの素晴らしさ／イエス様はいらないと言っていた者が／十字架を負えば服従はやさしい／今私を呼ばれている／死は勝利に飲まれてしまった／眠った者が先に引上げられる／自分を切り裂いて謙虚に従う／先頭に立たれるご熱心の神

第１２回（使徒行伝20:35 ）
まず主にあたえる……………………１６５
主とその恵みの言に委ねる／主に信頼しているから安心／与える生涯を歩んだイエス様／主にあって施し散らして富む／投げ掛ける生涯の確かさ／年を取ったから従えない？／家族の救のキッカケ／最後の一日が全生涯にまさる！／孫から土産を貰ったら／地球が角砂糖ぐらい！？／だから進化と言うか／どれ程でも恵みに感じてお仕え出来るように／かつて尊んだものを汚いもののように／情報の価値を決めるのは誰？／まず自分を主にささげる

第１３回（ロマ1:16/17 ）
信仰に始まり信仰に至らせる………１８１
聖書の中でもむつかしい？／そうとしか言えない／福音とは御子イエス・キリスト／ユダヤ人？ギリシャ人／義を啓示する福音／神様の報いの窮極／影絵を裏側から見るように／神の恵みに入れと言われるからには／イエスの肉体という幕を裂いて／良心までも清める神の子の血／罪の土壌までも取り去って神に近付けられる／死を賭して濁流に踏み込むと／信じます不信仰な私をお助け下さい／望み得ないのに望みつつ信じたアブラハム／神様に自分を投げ出す幸い

第１４回（サムエル上12:23 ）
執り成し祈りのもとにある者………１９７
祈る事をやめて罪を犯すまじ／御霊の執り成しのもとにある身分／私は妬む神だが／背く者を忍び呻く神／祈りの母子／大きな望みと責任／この祈りが人の命に直結／柘植先生が自覚された使命／おのが救を全うせよ／大火も一本のマッチから／最初の一歩を踏み込む人が義人／命を惜しんでは祈れない／十字架による新生／知らない所で祈が積まれていた！

第１５回（詩篇50:5)
私と契約を結んだわが聖徒…………２１３
砕けた心の感謝を喜ばれる／神の救とは命の恵み／神は感謝の上に座られる／霊肉の危険から守られる／小羊の血とあかしの言／／／あかし会

※戸畑教会について ……………………２２４

準備〈1989年12月31日午前10時／日曜礼拝〉

主よお話し下さい（幼な子に秘密を表される神）

（聖書＝サムエル記上第3章10節）

【イスラエルの嘆かわしい状況】	9
【サムエルの誕生・献身】	10
【エリの功罪】	10
【幼な子に心を打ち明けられた主】	11
【エリ家の滅亡】	12
【主の声を聞く秘訣】	12
【主が行おうとされる業】	13
【視力も聴力も受け手の意志による】	14
【一人の為に力を現される神】	15
【あくまで聞かなければ】	17
【行く間に清められたライ患者】	18
【踏んで行くと開かれる】	19
【新年聖会の部分像】	20
【宅配便トラック】	20
【パウロの伝道旅行】	21
【激動の時代だからこそ語っておられる】	21
【聞いた者自身が立てられる】	22

「そしてエリはサムエルに言った、『行って寝なさい。もしあなたを呼ばれたら、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と言いなさい』。サムエルは行って自分の所で寝た。主はきて立ち、前のように、『サムエルよ、サムエルよ』と呼ばれたので、サムエルは言った、『しもべは聞きます。お話しください』」

（サムエル上3:9/10）

◆これは預言者サムエルの幼い頃の出来事です。彼は最後のさばき司とも最初の預言者とも言われ、イスラエルの歴史において非常に大きな働きをした人です。

その頃の状況については１節に、「わらべサムエルは、エリの前で、主に仕えていた」とあります。サムエルはこのとき12歳ぐらいではないかと言われています。エリ先生は一つの推測によりますと80歳ぐらい、あるいは、亡くなる日（98歳）にもっと近かったかも知れません。これらによって、神様と指導者エリと指導されるサムエルの関係がよく分かります。

その頃のイスラエルの状況は三つの記述から推測する事が出来ます。

※主の言葉はまれであった（1節）

※黙示は常ではなかった（1節）

※エリは、しだいに目がかすんで、見ることができなくなり、自分の部屋で寝ていた（2節）

神様のお言葉を聞くことができないのは大変不幸な事でした。時に御旨が開かれましたが、常ではなかった訳です。その理由は指導者であるエリ先生が、大変年を取って目がかすんでいた――こんにちで言うと白内障のような曇りだったかも知れません。それは、霊の目が曇って、神様のお言葉を聞く事ができないことを象徴するものでした。

神様が隠したり惜しんだりされた訳でもなく、疲れてお休みになった訳でもなく、人間の側に進んで求める姿勢がなくなった為であると思われます。それは丁度、乳児が母親の乳を吸うことによって、次々に乳が分泌され、吸わなくなれば、乳腺が渇くのと同じです。

その時もエリ先生は自分の部屋で寝ていました。しかし少年サムエルは神様のともしびを守って、契約の箱の側で寝ていました。それはたまたまそこに寝たと

いう事ではないのであって、神のともしびを守らなければならなかったからです。ともしび皿で灯芯が燃えている訳ですから、絶えず芯を切って滓を取り除かなければなりません。出エジプト記27章21節に、「絶えずこれをともさなければならない」と記してあります。

これらを見ると、エリ先生が次第に衰え、サムエルが次第に神様に目覚めて行く様子が分かります。

【サムエルの誕生・献身】

◆どうしてこんなに幼いサムエルが神殿に仕えていたか——この事については1章のほうに書いてあります。エフライムの子孫であるエルカナには子供がありませんでした。妻のハンナは泣いて神様に祈り、「もし、はしためめの悩みをかえりみ、わたしを覚え、わたしを忘れずに、わたしに男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげます」と誓いました。彼女の悩みとは、もう一人の妻ペニンナから、「あなたに子供が生れないのは、神様から呪われているからだ」と謗られることでした。

神様は彼女の祈りに答え、憐れんで男の子を与えられました。ハンナはサムエルと名付けました。サムエルとは「主に聞かれる」という意味です。

その子が乳離れすると、すぐエリ先生の所に献身させました。エリ先生はおそらく70歳を越えていますから大変だったでしょう。教育どころか先ず養育しなければなりません。しかしさすがにエリは神様の導きと信じ、託された魂としてこれを養育し、やがて教育を始めました。この当時は、献身からすでに10年ぐらい経過して、神殿における主の御用がかなり出来るようになっていた訳です。

【エリの功罪】

◆エリがイスラエルを裁いたのは40年間であったと記されています（サムエル上4:18）。彼は晩年衰えて霊的な知呆状態になり、実子ホフニとピネハスの不信仰と乱行を戒めることが出来ず、神様の厳かな時が刻々と迫っていました。

しかし一方では、預言者サムエルを幼い時から受け入れて、これを献身者として教育し、神様を知らなかった彼に、聞くことを教え、神様に直接結び付けるという大変な功績があった訳です。

サムエルはそれまで約10年間訓練を受けて、神様に仕える事には励んで来ましたが、神様との交りを知りませんでした。その秘訣を知らなかったからです。

神様がエリをお立てになった目的は、サムエルを育てる事にあったと言えるのではないかと思います。

◆老いたエリ先生は疲れて部屋で寝ていました。サムエルは神殿で神のともしびを整えて、その傍らで仮眠をしていました。すると「サムエルよ」と呼ばれる声がしましたが、彼はまだ神様との交りの経験がありませんから、「先生が呼ばれたに違いない」と思い、走って行って、「先生、お呼びになりましたか。わたしは、ここにおります」と言いました。エリは「いや、わたしは呼んでいない。帰って寝なさい」と言われました。帰って寝ているとまた主はお呼びになりました。そこでまた先生の所に走って行きました。「今度はお呼びになったでしょう」「いや、呼んでいない。だからもう一度帰って寝なさい」と言われました。

３度目に呼ばれて、エリの所に行った時、エリは「神様がこの子供を呼ばれたに違いない」と悟りました。まだそこまで霊呆ではなかったと見えます。「そうか、それでは今度もし呼ばれたら、『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言いなさい」と教えてくれました。

休んでいますと、４回目に呼ばれました。「サムエルよ、サムエルよ」―――そこでサムエルはエリの所には走らないで、その場で跪き、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と神様に目を向け、耳を傾けました。そのとき神様はサムエルに向かって大変なことを打ち明けられました。

「見よ、わたしはイスラエルのうちに一つの事をする。それを聞く者はみな、耳が二つとも鳴るであろう。その日には、かつてエリの家について言った事を、ことごとく実行する。彼の子供たちが、神様を汚しているのに、彼がそれをとめなかったからである。この罪は、どのような犠牲や供え物をもってしても、ゆるされない。（最後通告の時は過ぎた）」と宣告された訳です。

「かつてエリの家について言ったこと」というのは、この前、サムエル記上第２章にありますが、エリの子供たちが供え物を横取りし、神殿に仕える婦人たちに淫らな事をしましたから、神様は厳しくこれを責められましたが、エリはこれを正すことが出来ず、子たちもまた父の言うことに耳を傾けませんでした。

そこで神様は、神のしもべをエリのもとに遣わして最後通告を発せられました。

それが２章 27/36節までです。「わたしを尊ぶ者を、わたしは尊び、わたしを卑しめる者は、軽んぜられるであろう」———これは、神様の大原則でした。主はエリの家の力を絶ち、年老いた者をなくすると言われました。「あなたのふたりの子ホフニとピネハスは同じ日に死ぬであろう。あなたの家で生き残っている人は、忠実な祭司のもとに来て、一枚の銀と一個のパンを請い求め、『どうぞ、わたしを祭司の職の一つに任じ、一口のパンでも食べることができるようにしてください』と言うようになる」と預言されたのです。

12歳のサムエルにも、事の重大性は分かりましたから、先生に告げるのを恐れました。朝になって神殿の戸を開けて、「先生、お早うございます」とは言いましたが、何も告げる事が出来ません。しかしエリが問い詰めて、「主が何をおっしゃったか隠さずに話しなさい」と命じましたので、サムエルはことごとく話しました。エリは「それは主である。主が御旨を行われるように」と神様の御旨に服従した訳です。

【エリ家の滅亡】

◆こうして間もなくペリシテとの戦争が起りました。イスラエル軍は敗れて各々その家に逃げ帰りました。たくさんの戦死者が出た中で、エリの二人の子ホフニとピネハスも殺されました。また神の契約の箱は奪われてしまいました。戦場の様子を案じて、道の傍らの高い所に登っていたエリは、戦場から逃れて知らせをもたらした人が、「イスラエルびとはペリシテびとの前から逃げ、民のうちには多くの戦死者があり、あなたのふたりの子ホフニとピネハスも死に、神の箱は奪われました」———エリは、神の箱のことを言った時、あおむけに落ち、首を折って死にました。彼のうちにまだ良心の火が残っていた訳です。

エリの嫁、つまりピネハスの妻は、身籠もって出産の時が近付いていましたが、神の箱が奪われ、舅と夫が死んだという報せを聞いた時、陣痛が起って子供を産みました。しかしお産の経過が悪く、子供にイカボデ（栄光はイスラエルを去った）と命名して亡くなりました。このようにして彼の家族は一日のうちに滅び、神様のおっしゃった通りになりました。

【主の声を聞く秘訣】

◆サムエルが神様のお言葉を聞く事が出来たのは、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」という姿勢をとった為でした。何度も呼び掛けられたというこ

とは、神様の側では溢れておられた訳ですが、サムエルは姿勢が出来るまで聞くことが出来ませんでした。

私たちが、神様のお言葉をなぜ進んで聞こうとしないかと言うと、自分があまりにも駄目な人間であると思うからではないでしょうか。サムエルの場合も、「先生は大変老練だが、自分は若く未熟だから―――」、あるいは「私は神様を知りません。今まで神様と交った事がありませんから―――」と思ったのでしょうか、神様はそのような彼に直接呼び掛けられた訳です。

マタイによる福音書13章に、「耳のある者は聞くがよい」とあります。神様が「聞きなさい」とおっしゃっているのに、こちらが聞こうとしなければ聞くことは出来ません。私たちはしばしば耳を澄ますという事をします。耳の（受信機としての）能力は同じでも、こちらの意識が何かに集中して聞こうとすると、聞くことができます。ただ漠然と音声が自分の耳に届いているという状態では、聞き分けることが出来ません。神様は「耳のある者は聞くがよい―――わたしの声を聞く耳のある者は、耳を澄ませなさい」―――と呼び掛けられている訳です。

私たちはこんにち、「自分はこんな未熟者です。あの大先輩は良いかも知れないが、私は駄目です」と思いますが、神様はむしろ、「幼な子、乳飲み子に秘密を現す」と言われています。純真な幼な子に向かって、「霊のまことの乳を慕い求めなさい」と、ご自分を開こうとしておられるのです。

神様の側においては何も問題はなく、幾らでも開こうとしておられる訳で、こちらが、「ああ、そうですか」と求める姿勢があれば語られる訳です。ホセア書には、「今は主を求むべき時である」と書いてあります。

ですから求めれば与えられる訳で、こちらがダイヤルを合わせると聞くことが出来るのです。ですから私たちは、「私は未熟だ、未経験だ」と言わないで、主を求むべきであります。

◆もし、私たちが幼な子であることをひとまず置いて、神様を求めるならば、どんな新しい事を行われるか―――これについてはイザヤ書に書いてあります。

イザヤ書43章 18/20節、「あなたがたは、さきの事を思いだしてはならない、また、いにしえのことを考えてはならない。見よ、わたしは新しい事をなす。や

がてそれは起る、あなたがたはそれを知らないのか。わたしは荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる。野の獣はわたしをあがめ、山犬および、だちょうもわたしをあがめる。わたしが荒野に水をいだし、さばくに川を流れさせて、わたしの選んだ民に飲ませるからだ」

神様は上から人間の常識を越えた事をなさる方です。人間はまことに小さなことしか考えませんが、神様は全く次元の異なったことをなさることができます。昨日ですか、ある学者が宇宙の話をしていましたが、人間の考える事がいかに小さいものかしみじみと感じました。

人間は一つの空間があって、その中にこういうものが配置してあると思いますが、神様は、無から有を造り、時間をもお造りになりました。ですから、私たちが小さな考えをもって、「神様のことが分からない」などと言うことは、まことに愚かなことだと思ったのです。

イザヤ書64章 3/4節、「あなたは、われわれが期待しなかった恐るべき事をなされた時に下られたので、山々は震い動いた。いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない」

神様は、待ち望む者に対して天を裂くような事をなさいます。あるいは、火が柴を燃やし、水を沸かすときのように、まことに恐るべき事を行われます。人間は、一つの物差しの上で、自分が10センチぐらいの事を考え、神様は40センチか50センチのことをなさる———と考えますが、そうではありません。物差しそのものが全く変ってしまうのであります。

【視力も聴力も受け手の意志による】

◆神様がそのような事をなそうとされても、私たちに聞く姿勢がなければ決して聞くことが出来ません、神様もまた語ることが出来ません。

ある眼科のお医者さんの話によると、目の構造そのものには何も異常がないのに、先天的にちょとした事で目が見えない人があって、あるとき手術によって目が開きましたが、(普通の人のように)物を見る事が出来なかったといいます。物が物であることがどうしても見えず、形が分からなかったそうです。

人間は、眼球の構造が完全に出来ていれば見えるというものではなくて、見よ

うとする意志があり、ある程度の訓練を経てはじめて見えるようになると言うことでした。先刻の耳を傾けるのも同じです。

そのように、私たちは神様のお言葉が分かる分からないではなく、神様はどんな事をなさっていらっしゃるか、何を呼び掛けていらっしゃるか、「行ってみよう」「聞いてみよう」との姿勢がある時にすべての御旨を開かれるのです。

もう一つイザヤ書65章 1/2節に、「わたしはわたしを求めなかった者に問われることを喜び、わたしを尋ねなかった者に見いだされることを喜んだ。わたしはわが名を呼ばなかった国民に言った、『わたしはここにいる、わたしはここにいる』と。よからぬ道に歩み、自分の思いに従うそむける民に、わたしはひねもす手を伸べて招いた」とあります。

神様は「自分を求めなかった者に問われたい。今まで尋ねなかった者に見いだされたい」とおっしゃるのです。「わたしはここにいるぞ、わたしは生ける神であるぞ」と絶えず宣言しておられます。「わたしに聞き従わないでそむく民、うしろを向いている民に向かって、ひねもす手を伸べて招いた」と書いてあります。

私たちが神様のみ心を知ることが出来ないのは、神様が語られないからではありません。エリの時代、黙示が常でなかったのは、神様が語られなかったからではありませんでした。こちらが、「あ、招かれている」と気が付きさえすれば、神様のみ心は私たちに対して迸るように届けられるのです。

私たちは、「私はこんな未熟な者ですから」「まだ、こんなに幼い者ですから」と言ってはならないと思います。新約聖書には、「これらの事を知恵のある者や賢い者に隠して、幼な子にあらわしてくださいました。父よ、これはまことにみこころにかなった事でした」(マタイ11章)とあります。また「幼な子らをそのままにしておきなさい。わたしのところに来るのをとめてはならない。天国はこのような者の国である」(マタイ19章)と言われ、幼な子に向かってご自分を開こうとしておられるのです。

◆歴代下16章9節、「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心を全うする者のために力をあらわされる。今度の事では、あなたは愚かな事をした。ゆえにこの後、あなたに戦争が臨むであろう」

これはアサ王がイスラエル（北王国）の攻撃に対抗するために、スリヤの王ベネハダデに贈り物を贈って、側面から攻撃をしてもらった時のことです。ベネハダデはアサの言う事を聞いて、軍勢をつかわしてイスラエルの町々を攻撃しましたから、イスラエルは戦をやめて国に帰りました。

この事は外交的には成功だったかも知れませんが、神様は先見者ハナニを遣わしてアサに向かって、「20年前のエジプト戦であれ程一筋に神様に頼り、勝利を体験していながら、今度のことでなぜ人の力に頼ったか、スリヤ軍もまた滅ぼさなければならなかったのに、彼らに寄り頼んだから、彼らはあなたの手から逃れる事になったではないか。このような姑息な手段を取るならば、かえってあなたに戦争が臨むであろう」と警告されました。しかしこの時アサはすでに霊的に衰えていましたから、その預言者を怒って投獄したと書いてあります。名君と言われたアサの生涯は急速に傾いて行きました。

その中で神様は一つの重要な原則をお示しになりました。「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心を全うする者のために力をあらわされる」という事です。

神様は多くの人を望まれているのではないのです。たくさんの人が連続祈祷会をしたとか、あるいは、大きなグラウンドで何万人の集会が行われた、決心者が何百人出来たという伝道方式もあるでしょうが、神様が力をあらわされるのは、（自分に向かって心を全うする）一人のためであるとおっしゃいます。神様に一筋に信頼して、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と聞く人、「神様はどんな事でもなし得る方です」と信頼する人、その一人に向かって力をあらわされるとおっしゃるのです。

どんなに大きな火も、火元はマッチ一本であって、それが燃え広がって大きな火になります。神様が私たちに力をあらわされる時、神様の側では何も問題はないのです。ただ火を付ける人がいない、神様の手を動かす人がないとおっしゃるのです。

マッチをすり、或いは（点火）スイッチを押すのは特別老練な人である必要はありません。小さな子供で十分です。その一人の為に大きな事を行われるのです。

私たちの先輩である聖徒たちの姿を見ても、たとえば、パウロ一人が神様から救われたことによって、どんなに大きな働きが行われたか分かりません。

あるいは、モーセ一人が神様から救われて、執り成し祈った事によって、イスラエルがことごとく憐れまれました。

またアブラハム一人が神様から召されて、「行くところを知らずしていで行けり」と従順に従ったことによって、こんにちの私たちまでがどんなに大きな祝福を受けるようになったか――考えて見ると元はみな一人なのです。

イエス様もまたただお一人、神様に従い尽くされ、その従順によって多くの人が義とされました。これも一人です。

神様がなさることはそういう事です。人間の世界ではたくさんの人がワーッと来て、声の大きな者の言うことは聞こう、小さなものは無視してしまおうと言うことかも知れませんが、神様の目は逆に、「あまねく全地を行きめぐり――自分に向かって心を全うする一人」を求めて力をあらわされるのです。

そのとおりに、シロの神の宮で仮眠をして、ともびしを守っていた小さなサムエルの上に、神様は恐るべきことを告げられたのです。

神様は彼に、エリ家の滅亡を告げられましたが、これは、一聖職者の処置にとどまらず、新しい時代の為にサムエルを預言者として立て、王国時代を開き、やがてダビデの子孫として約束のイエス様がお生れになる――神様の救の業にとって重要な鎖を一つ繋ぐ尊い御用でした。

【あくまで聞かなければ】

◆私たちは、自分が小さいと思って退いてはならない訳です。神様は「知恵のある者、賢い者に隠して幼な子にあらわす――幼いからこそあなたに語る」とおっしゃるのですから。繰返して呼び掛け、ひねもす手を伸べ続けておられるのに、こちらがあくまで聞かなければどうなるでしょうか。

神様は忍耐強い方ですから、あくまでも忍んでくださいます。しかしいつまでもという訳ではありません。エステル記４章に、「あなたがもし、このような時に黙っているならば、ほかの所から、助けと救がユダヤ人のために起るでしょう。しかし、あなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう」とあります。神様は他の方面から新しいことをなさる事が出来ます。そして、繰返し呼び掛けられながら、

「いいえ、私はとても聞けません」と言っていた者は、捨てられるかも知れません。ですから私たちはそういう事にならないように、自らの小さいことを顧みず、お声に従いたいと思います。

特に明日からの新年聖会を待ち望む時、神様は小さな者の信頼と祈りに答えて、新しい事を行われると信ずるのです。

◆ルカ17章 11/19節、朗読。この14節に、「イエスは彼らをごらんになって、『祭司たちのところに行って、からだを見せなさい』と言われた。そして、行く途中で彼らはきよめられた」とあります。

イエス様はサマリヤとガリラヤの間のある所で、10人の癩病人に出会われました。彼らがなぜそんなに集まっていたかと言いますと、隔離されて、「一般の人と一緒に住んではならない」と定められていたからです。彼らは自分の口に手を当てて、「私は汚れた者です」と言わなければならないことになっていました。ですから、「遠くの方で立ちとどまり、声を張りあげて、『イエスさま、わたしたちをあわれんでください』と言った」と記されています。

イエス様はそれを御覧になって、「よし、病気が治るようにお祈りしてあげよう」とは言われず、次の段階をおっしゃいました。「あなたがたは治ったから、祭司の所に行って体を見せなさい」―――旧約においては癩病の定めがあり、発病、あるいは全治の認定は祭司が行うようになっていました。ですから、「祭司のところに行って、からだを見せなさい」と言われた訳です。つまり、「あなたがたはわたしに呼び求めたから、わたしはあなたがたに答える―――あなたがたの病気は癒されたから、行って全治の認定をして貰いなさい」と言われた訳です。

そこで彼らは、祭司の町に向かってどんどん歩いて行く途中で皆きよめられました。しかし、イエス様の所に感謝に帰って来たのはたった一人、しかも異邦人であるサマリヤ人でした。彼がイエス様の前にひれ伏して感謝した時、イエス様は彼の信仰を堅くして下さいました。「立って行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」と、彼は再び病まない者となりました。

ここで私が教えられたことは、「彼らは行く途中できよめられた」という事です。「行ってからだを見せなさい」と言われた時には、まだ何も変っていなかっ

た訳です。相変らず体は腐って、膿が出ていたかも知れません。しかしイエス様のお言葉に従って進んで行くうちに、体は急速に癒されてすっかりきれいになった訳です。

このことについて私はいつも教えられますが、私たちが、「主よ、どうぞお話しください」と求めても、「何を語られているかさっぱり分からない？」と言っていると、それっきりです。しかし私たちが、語られている者として進んで行くと、期待した通りにして下さるのです。

それを、「行けと言われても、まだ治っていないから行けません」と言っていれば行く事が出来ません。したがって癒されませんし、認定も受けられない訳です。しかしお言葉に従って踏んで行った彼らは、（途中で）ことごとく清められ、そのうち一人はイエス様に感謝して、信仰を堅くされた訳です。

【踏んで行くと開かれる】

◆私たちがこんにち、自分の小さい事も未熟なことも顧みないで、とにかく歩き出す———神様が語るとおっしゃるから、「どうぞ、主よ、お語りください」と進んで行くと、行く間に語って下さるのです。自分では分からないと思っても、踏んで行くと次が語られます。丁度、自動扉のように、その前に行って立つとスイッチが入って扉が開きます。もし、「この扉は取っ手がどこにもない。どうやって開けるのか分からないから入れない」と待っていても開きません。そこまで行って踏むと開かれる———そのように私たちが神様のお言葉に従って進んで行くと、神様は内に秘めておられた事をことごとく開いて下さる———神様は開かなければやまない方であります。神様のお心はグツグツと沸騰しておりますから、迸るように語って下さいます。

このことはダニエル書にも例があります。ダニエルたちは、王様の夢を解くように求められました。彼らが神様に祈っているうちに、神様は深妙、秘密の事をあらわされる方であるとの信仰を与えられましたから、すぐに王様の所に向かいました。進んで行くうちに次々にその像がはっきり見えて来ました。ピントが合うように、はっきりして来ました。非常に大きく光り輝いた外観の像で、頭は純金、胸と両腕が銀で腹と腿が青銅、脛は鉄、足の一部は鉄、一部は粘土でした。

やがて一つの石が山から切り出されて、その巨像の鉄と粘土の足を撃って砕き

ました。こうして鉄と粘土、青銅は皆砕けて打ち場のもみ殻のようになり、風に吹き払われて跡形がなくなりました。その像を撃った石は大きくなって全地に満ちた―――こういう夢だったのです。これは王様自身も説明の出来なかったものであり、神様が王国の将来を示されたものであった訳です。

もしダニエルが、「全部はっきり見えてからでなければ、王様の前に行っても話すことが出来ない」と言っていれば、彼らは無用の学者として殺されるところでした。しかし神様が、開き始めて下さったことを知って、どんどん進んで行きましたから、次々に開かれて遂には全部を見ることが出来ました。

私たちが神様のお言葉に従う時も同じで、分からないと思っても、前進すると、神様が生き働いて下さるのです。すっかり出来上がったものを、「さあ、入って来て見なさい」と言うことではない訳です。生ける神様に対して、こちらも生きた信仰をもって行く時に、次々に新しい事を行って下さるのです。信仰は静的でなく動的なものですし、平面的ではなく立体的なものであり、更に高次の領域である訳です。

【新年聖会の部分像】

◆私が新年聖会の為に祈っている時に、同様な体験をします。ダニエルが王様の夢を次第に開かれたように、進んで行くと、少しづつ見えて来るのです。しかしまだその全体像は分かりません。

私は自分が幼い者であり、未熟な者であることを知っていますし、また5日間15回の集会は随分大変なものであると分かりますが、神様は、「事を行い、事を成してこれを遂げる主」とおっしゃいますから、「わたしはあなたのお言葉に従って行きます。どうぞ主よ、お語りください、お示しください」と進んで行きます。それによって私は次々に進む事ができ、一層はっきりと神様に信頼することが出来る訳です。

【宅配便トラック】

◆最近は宅配便がよく利用されています。その業界トップの会社は、情報処理について随分先進的なことをしているそうです。地域に応じた色々な形のトラックが荷物を配達して回っていますが、運転席の横に小型のコンピューターが置いてあって、走行中にジージーと作業指示を打ち出す―――「次はどこそこに行って、こういう荷物を受け取って来なさい」とか、「次はこれを配達しなさい。そ

のコースはこれこれの家をこういう順序で回れば一番よい」と言う訳で、みなコンピューターが指示するという話しです。

それと同じように、私たちが神様のお言葉に従って進みますと、行く間に、「次はこうしなさい」と出て来ます。また次を行くと、「今度はこれをあなたに預けよう」、あるいは「ここに行ってこういう事をして来なさい」と指示をして下さいます。神様のオンラインシステムは単なる機械的連絡ではなく、御愛に満ちた深い命の交わりです。

【パウロの伝道旅行】

◆パウロたちは、3次にわたる伝道旅行をしました。ある時にムシヤ（こんにちのトルコ西部地方）のあたりで、ビテニヤ（黒海沿岸地方）に進もうとした時、イエスの御霊がこれを許さず、エーゲ海に向かって西進したことが記されています（使徒行伝16:7/8）。

またその地（トロアス）で夜、パウロが、幻の中にマケドニヤ人が立って、「マケドニヤに渡って来て私たちを助けて下さい」と懇願するのを見て、神様が福音を伝える為に、私たちをお招きになっていると確信して、ただちにマケドニヤ（ギリシャ）に渡ったと記されています。

パウロの伝道旅行図に記されているあのコースは、決して人間的計画によるものではなくて、聖霊に導かれた使徒たちの歩みが、結果として「行伝」を生み出したものであり、「使徒行伝」は、「聖霊行伝」であった訳です。

【激動の時代だからこそ語っておられる】

◆サムエル上3章9節にかえる。私たちはこんにち、サムエルと同じような立場であるかも知れないと思います。世の中はまさに激動し、すべてのものは崩壊しつつあります。体制のいかんに係わらず、すべての人々が、「一体、どうしたらよいのだろうか、さっぱり分からない」と言っている時代ではないでしょうか。

神様の真理の前には、人間が少し分かったとか分からないとか、或いは、力が有るとか無いとか言っても、50歩 100歩でしょう。神様はそのような中にあって、時代を越え、国々を越えてご自分のみこころを行おうと、自分に向かって心を全うする一人を求めておられると思います。

「サムエルよ、サムエルよ」と幼いサムエルを呼ばれたように、私たちはいま神様から呼ばれているのではないでしょうか。ここで私たちがもし、「しもべは

聞きます。主よ、お話しください」と耳を傾けるならば、どんなに大きな事を開かれるか分かりません。

◆秘密を知った者が、「それだから私は偉いんだ」「私は何でも知っている。教えてやろうか」と言うことは出来ません。先を読んでお金儲けをしようという事もできません。

神様の御心を聞いた者自身が、大きな期待を持って立てられることになります。私たちがどこかの大統領や総理大臣になる訳ではありませんが、神様に向かって手を挙げて、神様の力を発動して頂くことは、どんな総理大臣や大統領よりも偉大な働きです。国境を越え、時代を動かし、のちの時代にまで神様のみ心を行って頂く事は、何と大きなことでしょうか。神様は私たちに、そのように大きな期待をかけておられるのではないでしょうか。

当面、私たちは、明日から新年聖会を迎えますが、この聖会において、神様は新しい事を行おうとしておられると思います。ご熱心をもって、私たちのうちにみこころを行おうとされているのですから、私たちは、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と待ち望み、「どうか神様のみこころが行われますように」と神様の手を動かす者になりたいと願います。

「サムエルはまだ主を知らなかった」「主の言葉がまだ彼に現されなかった」とあります。彼は幼なかったとはいえ10年も神様に仕えていながら、まだ神様の事を知らなかった訳です。

私たちはこの神様を知らせて頂きたいと願います。神様のお言葉が私たちの内に届き、私たちがそれにお答えしながら、次々に進むならば、神様はどんな恐るべき事をなさるか分かりません。それはただ私たち個人にとどまらず、多くの人々のうちに及ぶものです。

今日、もう一度サムエルのように、姿勢を整え、耳を傾けたいと思います。最後に、サムエル上３章９節を読んでお祈りしましょう。

「そしてエリはサムエルに言った、『行って寝なさい。もしあなたを呼ばれたら、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と言いなさい』」

では、ご一緒にお祈りしましょう。　　　　(1989.12.31　戸畑教会礼拝)

第１回〈1990年1月1日、午前10時〉

私は心を尽くした　応えてほしい

（聖書＝マタイによる福音書第２２章３７／４０節）

【最後の週における論争】　２５

【神はすべてを尽くす事を求められる】　２６

【言葉の意味から】　２７

【万物の創造者の求め】　２８

【たちまち捨てられて当然のものを】　２９

【早くからみ心に秘められた救い】　３０

【限りない御愛に感じなければ】　３０

【お言葉を心にいだいて守る】　３１

【人間創造の目的】　３２

「『先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか』。イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである」（マタイ22:36/38）

◆イエス様が「一番大切な、第一のいましめである」と言われ、また「律法全体と預言者とがかかっている」と言われているのですから、私たちにとって大変重要なお言葉です。

イエス様は、ご自身にとって最後の週の日曜日にエルサレムに入城されました。翌日は宮清めをされました。神殿の中で売り買いしたり、両替をしたりしている人たちを追い出し、厳しく叱られました。「わたしの家は祈りの家と唱えられるべきである。それをあなたがたは強盗の巣にしているではないか」と、縄の鞭をもって彼らを追い払い、商売人の腰掛けや台を倒されました。

それを見て、祭司長や律法学者たちは、「なぜそんな事をするのか」と色々な質問をあびせて来た訳です。

※イエス様が宮に入られた時、祭司長たちや民の長老たちは、その教えておられる所に来て、「何の権威によってこれらの事をするのか」と言ってきました。イエス様は逆襲されました。

※二人の息子の譬をもって、ユダヤ教指導者たちのかたくなを責められました。

※悪い農夫たちの譬をもって、ご自分が十字架にかけられ甦る事によって、教会の土台となられる事を示されました。

※王子の婚宴の譬をもって、神様の恵みが豊かに提供されているのに、人間の心のかたくなによって拒絶されることを示されました。

※カイザルに対する納税は是か非かという、パリサイ人らの陰険な質問に対して、神様中心に生きるゆえ、国家への誠実を尽くすべき事を教えられました。

※復活は無いと主張しているサドカイ人たちが、「義理の兄弟の結婚」に関するおきてに引っ掛けて、架空の巧妙な質問を持って来ました。兄弟が一緒に住んでいてそのうちの一人が子供を残さずに死んだので、その兄弟が未亡人と結婚したとする。もし７人の兄弟が次々に同じ婦人と結婚していずれも子供が無くて死んだ場合、復活の時にその女は誰の妻になるのか――というものです。

イエス様は、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」「復活の時には、娶ったり嫁いだりする事はなく、個人々々が神様の前に立つのである―――あなたがたは聖書も神の力も知らない為に、思い違いをしている」と彼らを退けられました。

◆次は本日の聖書の箇所である律法問題ですが、これは一連の論争の最後のものです。パリサイ人たちは、また一緒に集まって来て、イエス様に対して、意地の悪い質問をしようとしました。「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」と言って来ました。

モーセの十戒は10項目―――神様に対するものが４項目と、人間関係について６項目ですが、そのあと、「あなたがたは石で祭壇を築く時には、のみを当ててはならない。自然石を積み上げなければならない」、あるいは「階段から上ってはならない」というようなおきてが始まります。ある人はこれを数えて 600幾つあると言いました。次第に、「その中でこれこれが大事である。これくらいを守ったらよろしい―――もう少し少なくてもよい」というような論争があったようです。しかしイエス様はそれに対して冒頭のようにお答えになりました。

イエス様は十字架にかけられる前、祭司長たちや律法学者たちから意地悪い質問をされた時、「一言もお答えにならなかった」と書いてあります。

また、激しい言葉をもって罵られ、鞭打たれ、嘲られ、唾をかけられる中で、イエス様はののしり返さず、激しい言葉を出されませんでした。

しかし真理は語られました。ヘロデから、「あなたはどこから来たのか」と問われても黙っておられましたが、「わたしがあなたの罪を許すことも、定める事も出来ることが分からないのか」と言うと、「神様から与えられなければ、誰も人を裁く権威はないのだ」とお答えになって、また沈黙されました。

この律法論争は、最後の憐れみの機会でした。と言うのは、23章からは、パリサイ人たちに対する非難になります。24章／25章は終末の預言で、26章／27章は受難（十字架）の記事です。28章は復活になります。

イエス様が、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである」と言われたの

は、申命記６章の、「あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない」から引かれたものです。私はこれを読んだ時に、神様がどんなに私たちに「つくすこと」を求めておられるかを知りました。

◆マタイによる福音書には、「心、精神、思い」となっていますが、申命記には、「心、精神、力」となっています。マルコによる福音書12章およびルカによる福音書10章では、申命記と同じ、「心、精神、思い、力」となっています。

〈マタイ〉	心	精神	思い	―	尽くす
〈申命記〉	心	精神	――	力	尽くす
〈マルコ〉	心	精神	思い	力	尽くす
〈ル　カ〉	心	精神	思い	力	尽くす

私はこれらの言葉の意味を辞書から引いて見ました。

※「心」―――「精神作用のもと」とか、「知、情、意の総体」とか、「自分の気持」とか書いてあります。

※「精神」―――「心、魂」、或いは「能動的心の働き」等と書いてあります。

※「思い」―――「自分の思う心の働き」、あるいは「何かに賭ける気持」とあります。

※「力」―――「気力、精神力」（勿論、腕力もあります）と書いてあります。

※「つくす」―――「ある限りを出す」、あるいは「無くしてしまう」とあります。

要するにその動機において、神様を愛するためと言うところから出発すること、神様に対して努めて愛そうとする事です。思想・信条ということで言うならば、進んで神様を第一とする訳ですから、他のものを排するという事になります。あるいは、自分の全気力、ある限りを出す、自分の気持を向ける―――「つくす」には、自分の働きかけという意味があります。自分はじっとしていて、「心が熱くなって来たら、聖書を読もうか、教会に行こうか、お祈りでもしようか」と言うのではない訳です。

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、あるいは、力をつくし」と言う

のは、自分の全部を上げてそちらに向ける、自分がそうなろうとする、あるいは、ならせて下さいと求める、それが神様の要求である訳です。これが律法全体と預言者の語る所の、最も重要な事項であると言われるのです。

◆ある人々は、「人間にそんな要求をするのは身勝手ではないだろうか」と言われますが、神様は人間ではありません。

神様は私たちの造り主であります。もし神様がおられなかったら、私たちの全存在は有り得ないのです。また、もし神様が私たちの罪を咎めて、「お前は駄目だ」と言われたならば、私たちは生きる事が出来ません。対等の関係でもなく　、大小関係でもなく、全く次元の違った方であります。

神様は「光あれ」とおっしゃって光を造り、続いて宇宙とその中のすべてのものをお造りになりました。最後に造られた人間も勿論、神様のお言葉によって造られ、命の息によって生かされました。ですから人間は、神様の憐れみによっていま生かされているということを、第一に自覚しなければならないと教えられました。

神様は私たちに求められる以上に、私たちの為に心をつくされた方であり、精神をつくされ、思いをつくされ、力をつくされ、知恵をつくされた方であります。

「いつの間にかこんなものが出来たから、まあ何とか生きて行きなさい」と言うのではありません。進化論者は原生動物がゴソゴソと進化して来て、その頂点にヒトというのが出来たのではないかと言いますが、それはあくまで人間の「論」であって、真理の言は、神様が使命のために御自分に象って完全な者としてお造りになったと語っています。神様は私たちの為に、住みかとして地球を造り、その上に人間をおかれました。

今朝は分厚い新聞が届いて、その中に「銀河系の中に何か高等な生物や社会があるかどうか」などという特集がありましたが、神様が「地球を人の住みかとしてお造りになり、いたずらにこれを創造されなかった」（イザヤ45章）と書いてありますから、他に我々の住む所は無い訳です。すべては神様の大きなご意志によって遂げられたことです。

いつでしたか、私は全宇宙の元素の比率と、地球を形造っている元素の比率を

比べてみた事がありますが、非常に異なったものでした。それを見た時に、私は、神様が私たちの為に地球をお造りになる時、どれ程の知恵と力と御愛とを注いで下さったかと言う事をはっきりと悟りました。

宇宙飛行士たちが、月の表面に立って、青白く輝く巨大な地球が月平線から昇るのを見て、大変感動したという話しがあり、またその時の写真がありますが、それを見た時に、神様が慈愛に満ちたわざをもって、私たちのために地球を備えて下さったことを知りました。

もっと驚くべきことに、太陽系と同程度のものは、我々の銀河系だけで２千億ぐらいあるそうで、その中核になる恒星が大き過ぎても、小さ過ぎてもいけないと言うことでした。丁度太陽の大きさは適当であり、その年齢も最適であったと言われています。ある人々は、地球が太陽にもっと近かかったら水は液体で存在出来ないし、もっと離れたら氷になってしまう―――丁度良い所で地球はうまい事をやったなどと言いますが、やったのではなくて、そのように造られたのです。

◆エゼキエル書16章1/22節、朗読。エゼキエル書の鍵になるお言葉は、「わたしが主であることを知るようになる」というものです。いま読みました部分では、エルサレムを一人の婦人になぞらえております。彼女は異教的な生れ、つまり神様を抜きにした人たちの中で生れ育ったものであり、汚れたもので、捨てられていた存在であった。血の中に転がり回っていたもの―――放って置けば冷たくなってしまうものを、取り上げて、「生きなさい、野の木のようにたくましく育て」と育てた。成長した彼女の裸をおおい、飾り物で飾り、様々なものを与えたところ、その事は忘れて、自分の美しさをたのみ他のものと姦淫を行った、というのです。

【たちまち捨てられて当然のものを】

私たちはいま金や銀の偶像を拝む（姦淫する）ことはないと思いますが、実は様々なものを偶像にします。お金を偶像にするかも知れませんし、健康もするかも知れない、この世の常識や人並みという事を頼りにするかも知れません。しかしそれがどんなに神様に対する反逆であり、姦淫であるか―――自分が真実を尽くしている相手が、他のものに向かって行くほど大きな痛みはありません。

限りある感情と真実しか持っていない人間でもそうであるならば、それよりも

遥かに大きな真実と御愛と力と思いと知恵とを尽くして、私たちを創造して下さっている神様はどうでしょうか。神様から「よかれ」と与えられたものを用いて、他の人に尽くして行くなら、神様はそれを耐える事が出来るでしょうか、私はそう思います。

しかしそんな私たちに対して、なお最後の憐れみをかけて下さったのがイエス・キリストの十字架であった訳です。もし神様の憐れみがなかったら、私たちは大騒ぎをする間もなく滅び失せるところでした。

私はコンピューターやワープロを使っている時に、いつも感じることですが、削除命令を実行する時には、頭がキュッと痛くなるほど緊張します。なぜなら、どんなに大量のデーターであっても、一瞬にして消え失せてしまうからです。

私たちの体は 50-60兆もの細胞から成り、それぞれの中には２メートル近い遺伝子の二重螺旋（情報）が入っていると言われますが、どんなに膨大な情報が入っていても、神様が一度、「これ程にされてはたまらない。もはやこれまでだ」とポンと実行されたならば、瞬間にしてあとかたなく消滅するのです。

◆ところが神様はそれを乗り越えて、「決して捨てない、離れない」とおっしゃって下さいました。ノアの洪水のあと、空に虹をかけられ、「わたしはこの虹を見て、あなたがたに対して立てた契約（再び地を水で滅ぼさない）を思い起そう」とご自分のためにしるしを立てられました。

すぐ前の章には、「人が心に思い図ることは、幼い時から悪いからである」と言われており、一方で「滅ぼさない、罰しない」と言われているのですから、このときすでに罪の無い方が、罪人として死んで下さる事を約束されている訳です。

◆このように偉大な神様の御愛を思う時、もしこれに感ぜず答えないならば、人間ではないと思います。霊感賦 149番に、「かくまでゆかしき神の愛に、なお感ぜぬものは人にあらじ」と言う歌詞がありますが、本当にそうだと思うのです。神様の狂うばかり、妬ましいばかりの御愛です。

自分にとって何でもない人の為に死ぬことはありませんが、イエス様は自分に向かって罪を犯す者のために死んで下さいました。「誰かが死ななければならないなら、死刑囚をやっておけ」ということではなかったのです。全く罪のない神

の子を、罪人のために十字架につけるという事は、神様の狂気のような御愛ではないでしょうか。

エレミヤ書31章には、「わたしは限りない愛をもってあなたを愛している」とあります。私たちは言葉として軽く考えやすいのですが、「限りない」という言葉の中に、どれ程偉大なものが隠されているか分かりません。

またヨハネ福音書３章には、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」とありますが、この「ほどに」という言葉も、それ以上に言う言葉がないために、こう言われているのであって、人間の常識を遥かに越えた大きな御愛をもって、私たちを愛して下さったのです。ですから、私たちがそれにお答えするのは当然のことではないかと思うのです。

【お言葉を心にいだいて守る】

◆それにはどうしたらよいかと言う事ですが、ヨハネによる福音書14章21/24節をお読みしましょう。

「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう―――もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう」とあります。

神様を愛するとは、何かの働きのために飛び回ることでしょうか。ここには、「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である」と言われています。主のお言葉を心にお受けして、必ずその通りになると信じて、守り続ける人は、「父から愛され、わたしもその人に自分をあらわす」と言われるのです。

人間関係でもそうですが、愛し合う間柄になれば、自分の一切を打ち明けます。そのようにイエス様が私たちにご自分をあらわして下さいます。

人間が神様を知ることはなかなか大変なことです。科学の法則一つ見付けようとしても、仮説を立てては実験を繰返しますが、これはそもそも方向が逆であっ

て、人間が調べれば調べるほど、分からないことが増える訳で、真理からはむしろ遠ざかって行くのではないかと思います。

ところが神様が私たちにご自分を開いて下さるのですから、人間の探求とは方向が違います。教えられることを受け入れると、神様の全体がどんどん注がれて来るのです。ご自分をあらわされるだけではなくて、「一緒に住む」と言われます。これは実に驚いたことであります。

この世の中で冗談に、「あいつは神様みたいだ」とか、「俺は神様じゃないから」などと言いますが、神様が私たちと共に住んで下さると言われるのは、冗談ではありません。私たちは神様の御旨を知り、神様と共に生き、神様と同じ立場に立たせて下さいます。それは「愛によって一致」し、あるいは「溶け合ってしまう」ような間柄であって、人間の言葉で説明し尽くす事が出来ません。しかし神様が人間をお造りになった目的は、実はそこにあったのです。

【人間創造の目的】

◆創世記を読みますと、人間は「土の塵をもって造られ、命の息を吹き入れられて生きる者となった」と記されています。土の塵を集めてご自分の形に尊く造り、これより先に造られたすべてのものを治めさせようとされました。「治める」とは、人間が勝手に殺したり、破壊　する意味ではなくて、神様の前に手を上げて祈り、それぞれのものに所を得させ、神様を崇めるようにする———そのような祈り手として私たちを立たせて下さる訳です。

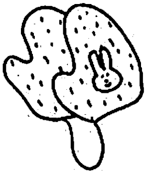
人間が神様と共にあり、神様の愛のうちにいて、共に住み交っている状態——これはエデンの園に象徴されていますが、そのような生涯を送らせようとして下さったのです。したがって私たちが神様のいましめを心にいだいて守り、神様から愛され、共に住むならば、神様もそれを喜んで下さいます。もちろん私たちも喜びます。今年、神様は私たちに対してそのような期待をかけて下さっているのです。

神様は、「わたしは尽くした。あなたにも期待する」とおっしゃっているのではないでしょうか。強制される訳ではありません。あくまで自発を求められています。しかしそれは強い強い期待をもって、「わたしは尽くしたのだよ」とご自分を開いておられると教えられました。

マタイ22章にかえる、37/38 節、「イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである」ーーー神様は私たちに対して、ご自分をつくして下さいました。私たちがどれほど考えても及ばないようにつくされて、私たちが答えるように期待をされています。私たちはこの神様が、どんなに偉大なことをして下さったかを心にとめて、小さな一足でもこの方に向けて踏み出すならば、神様は助けて下さいます。

「心をつくさせて頂きとうございます。精神をつくし、思いをつくして、あなたの御愛にお答えしたいと願います」と、自分の気持をそちらに変えて行くならば、神様は私たちをすぐに助けて下さる方です。今、小さな一歩でも踏み出して、５日間の新年聖会を待ち望んで行きたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1990.1.1.10:00　新年礼拝、聖会１)



第２回〈１９９０年1月1日、午後2時〉

互いを嗣業とする関係

（聖書＝マタイによる福音書第２２章３７／３８節）

【何かに傾注しなければ生きられない】　３７

【相手は２でもなく０でもない】　３７

【神様に頼らぬと二重の罪】　３８

【神様が私たちを嗣業とされる】　３９

【互を嗣業とする関係】　４０

【神様の求められるいけにえ】　４１

【目に見えないものの価値】　４２

【互に食べ合う?!】　４３

【いずれの国民にこのように近い神が】　４３

【神様の目に映っている私の道は？】　４４

【桁の数が桁外れ！】　４４

【機会は再び得られない？】　４６

「イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである」

（マタイ22:37/38）

【何かに傾注しなければ生きられない】

◆イエス様はパリサイ人たちの、「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」という質問に対して、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、神様を愛する事が一番大切ないましめである」とおっしゃいました。私たちは「つくせ」と言われると、自分が何かを失って損をするように考えやすいのですが、決してそうではないと言う事を教えられました。人間は何かに傾け尽くして行かなければ生きられない存在であると言うことです。

「何もしないでよいから、ゆっくり好きなようにしなさい」と言われると、人間は身を持て余してしまいます。高齢化社会になって、色々な趣味やスポーツに打ち込む――絵を描くとか、手芸をするとか――何かに打ち込んで生き甲斐を感じられるようにしよう、その為に早目に準備をしなければなどと言います。そういう何かを持っていないと生きられないと言う訳です。これは仕事をやめてからだけではなく、現役で仕事をしている時でも、仕事とは別に、人生を賭けるものが何かなければ生きて行く事が出来ないものです。忙しく仕事をしている時にはあまり意識しなくても、仕事から離れると良く分かります。

【相手は2でもなく0でもない】

◆マタイ6章 19/24節、朗読。これは「天に宝を積みなさい」というお勧めです。こういうお話を聞きますと、「それでは、地上の銀行に預金をしてはいけないのだろうか」と思いますが、そういう事ではありません。「自分の心をどこに置くか」ということです。私たちは一番大切なものには、いつも気を付けています。人ごみの中でスリが仕事をしようと思うと、何人かが組になってワッと人を押す――押された人はアッと貴重品を押さえますから、「あそこにお金が入っているな」とすぐ分かるそうです。

私たちは普段はそれほど意識していなくても、いざとなった時には、「あれが有るから」と心に頼ります。その望みを地上のものにではなく、天に置きなさいと言われるのです。目が澄んでいる、つまり、天に目がとまっていれば、その生涯が清く明るくなるが、地上のものに止まっているならば、生涯が利己的なもの

になると言われるのです。

結局、人間は、「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできず、必ず一方を憎み他方を愛する、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるようになる」と言われています。それはちょうど両手に鉛筆を持って、片手で円を、片手で三角形を描くことが出来ないようなものです。

ふたりの主人に同時に真実を尽くすことが出来ないように、神と富とに兼ね仕えることは出来ないと言われるのです。富とは、必ずしも金銭や物質ではなく、この世の（神様以外の）すべてを指します。

だから、はっきりと神様だけに望みを置くように、それがあなたがたにとって最も尊いことであり、最も明るいことであり、また最も報いが大きいと言われるのです。天国銀行の利子は物凄いもので、僅かな相場の変動に驚く人たちから見れば、桁外れに大きなものです。（私の体験について———省略）。私たちがこの方に生涯を賭けて行くことは、どんなに素晴らしいことか分かりません。

私がここで思ったのは、私たちが何かに真実であろうとするとき、相手が二つ以上であってはならないし、また０であってもならないと言うことです。何も賭けるものがなくても生きられませんが、少し有り過ぎると、「もういやになった」とか、「こんなには出来ない」という事になります。

◆エレミヤ２章 11/13節、「『その神を神でないものに取り替えた国があろうか。ところが、わたしの民はその栄光を益なきものと取り替えた。天よ、この事を知って驚け、おののけ、いたく恐れよ』と主は言われる。それは、わたしの民が二つの悪しき事を行ったからである。すなわち生ける水の源であるわたしを捨てて、自分で水ためを掘った。それは、こわれた水ためで、水を入れておくことのできないものだ」———これはイスラエルの民が、神様に対して背いて行くさまを言われているものです。

「神を神でないものに取り替えた」とあります。「新型の洗濯機が発売されたから、古いものはまだ使えるが、大型ごみに出して、新しいものを買おう」と言うようなことです。そもそも神様が私たちを造って下さったのであって、人間が神様を造ったのではありませんから、取り替えるなどとはとんでもない事です。

ですから、「天よ、この事を知って驚け、おののけ、いたく恐れよ」と言われています。

人間は何もしないでいられないと申しましたが、神様に信頼する事をやめた人は、そのままでいる事が出来ず、何か他のものを頼る訳です。それによって二重に罪を犯します。つまり神様を捨てることが第１ーーーこれが最も重大なことですが、その上に自分で水ためを掘るというのです。神様の水は泉であって、小さくてもこんこんと清い水が沸き出て来ますが、水ために溜めた水は腐り、あるいは蒸発し、あるいは地中に滲み込んでしまいます。「こういうものを掘るのは二重に悪いことではないか」と言われています。

◆私たちがただお一人の神様に、一切を尽くして信頼することは、損失でも何でもありません。それは最も安全な道であり、またそれによって真に生きることが出来る道であります。このことは私たちにとってそうであるように、神様にとってもそうなのです。神様も多くのものをあれこれと愛されるのではなくて、ご自分の民を選び、これに自分の生涯を賭けておられる（というのはおかしな言い方ですが）方であります。-

申命記32章9/12節、朗読。９節に「主の分はその民であって、ヤコブはその定められた嗣業である」とあります。神様はイスラエルの民をご自分の民として選ばれ、これをエジプトの地から導き出されました。「主の分はその民」とありますが、「分」とは「嗣業」の意味です。「これは私の親から受け継いだ土地である」というのが「分」ですが、「神様の分」とは一体何でしょうか。神様はすべてのものをお造りになった方であって、誰かから分け前を貰うような方ではありませんが、お選びになったイスラエル（ヤコブの別名）の民を「私の嗣業」であると言われるのです。

これは話が逆であります。人が祖先から嗣業を受け継ぐように、神様を嗣業とするという事はあります。ある人は、「私は子孫に何も残すものはないが、この尊い信仰を子孫に残そう」と言います。ところが、造り主が、造られた人間である私たちを嗣業とされるとは驚いたことです。

ある若いお父さんは、子供が生れて嬉しくてたまりません。会社から急いで帰

って来ると、玄関で飛び付いて来る子供を抱き上げて頬ずりして喜ぶ―――「お前が私の生き甲斐だ。お前がいたらもう何もいらない」という訳で、仕事の疲れもすっかり吹き飛んでニコニコすると言います。

子供は親から生れ、親から育てられ、やがて親から財産をもらうかも知れません。しかし親にとってみればその子供が生き甲斐で、「私はお前がいたら何もいらない。お前を生かすためには私の肝臓を切ってやってもよい」と言うことになります。「私は今まで生きて来たから、もうこれでよい。それより子供を何とかして生かしたい」と言う訳です。神様はそのように私たちを「分」とし、「生き甲斐」とされると言うのですから、驚いたことではないでしょうか。

【互を嗣業とする関係】

◆先程、お祈りしていて教えられたことですが、神様は私たちに対して実際にそうなさって下さったと思うのです。

第一は、私たちが神様を嗣業とする関係、それも何かを頂戴するのではなく、イエス様自身を食物として食べるように、体内にお受けする関係です。イエス様はご自分の肉と血を、「わたしはまことの食物であり、飲み物である」と言われました。

ヨハネ6章 52/59節、朗読。この6章には、「イエス様が命のパンである」ことが記されています。昔イスラエルの民はエジプトから出て、荒野でマナを頂きました。朝露がおりて乾く時に、地上にキラキラと小さな鱗のようなものが見えそれを拾い集めて臼でついたり、窯で煮たりすると、蜜を入れたせんべいのような味がしたと言われます。これが「マナ」ですが、砂漠でイスラエルの民を長年にわたって養いました。こんにちの「命のパン」の雛形です。

いま私たちは、天から降って来るパンを食べている訳ではありません。パン屋さんが作ったパンを食べ、あるいはうどんや御飯を食べますが、イエス様は私たちに対してご自分の肉を食らわせて下さいます。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。わたしの肉と血はまことの食物、飲み物である」と言われました。それは私たちの為にイエス様が十字架にかかって、血を流し、肉を裂いて下さった事を言われているのです。それをお受けすることによって、私たちは日毎に養われ生かされる―――私たちはそう

いう者になった訳です。

私たちがイエス様を嗣業とすると言うのも、「昔、父が教会に行っていたから、私も教会に行く」というのではなくて、「わたしは毎日々々イエス様の血によって罪を許され、命の恵みを与えられて生かされています」―――というものです。

神様が私たちを「嗣業とされる」というのもよく似ていると思うのです。私たちが心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、神様に身をささげる―――私たちの肉も血も全部を神様にささげる―――神様はそれを飲食して腹を満たされる訳ではありませんが、その心を見てこれを喜び受けて下さいます。

ヨハネ福音書19章には、イエス様が十字架の上で「わたしは渇く」と言われたことが記されています。これは手足を釘で打ち抜かれて、頭に茨の冠をかぶせられ、出血多量でのどが渇いたというよりも、私たちの魂を渇き求められたのです。「わたしはこんなにしてあなたがたの為に尽くした。あなたがたも尽くしてほしい―――心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくしてほしい―――その心がほしい」と渇き求められている訳です。

◆詩篇50篇8/15節、朗読。これは感謝のささげものについての詩ですが、神様が私たちを責めて、「お前は献金が足りない、もう少し教会の奉仕に加わりなさい」と言われている訳ではありません。むしろ神様は「そういうものなら、いつでもたくさん私の前にある―――あなたはたくさんの献金をし、たくさんの奉仕もしている―――」と良く知っておられます。決して、雄牛や雄山羊、あるいは獣、あるいは空の鳥、野に動くすべてのものが足りなくて空腹だと言われているのではありません。

「感謝のいけにえを神にささげよ」―――砕けた悔いた心、自分のためにそんなに尽くして下さった神様に対して、「私もお答えしとうございます。どうぞ助けて下さい。お受け入れ下さい」と言う感謝のいけにえ、これが神様の求められるところであると言われているのです。23節に、「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる。自分のおこないを慎む者にはわたしは神の救を示す」とあります。神様はお金や物や奉仕や、熱心・努力、修養、そういう目に見える形を求めておられるのでは決してない訳です。

ある時、教会の先生が一軒の家を訪問されました。「聖書を読みましょう」と言って開かれたのがここだったそうです。そこでその信者さんは、「これは私がしばらく教会に行かなかったので、献金が滞っていると催促に来られたのだろうと思ったそうです。神様は決してそういう方ではありません。神様は人から何か物を貰わなければ乏しくなる方ではなく、むしろ逆に人に物を豊かに満たして下さる方です。

たとえば私たちがもし酸素を買って吸入するならば、どれぐらいお金を払ったらよいか分かりません。30年ぐらい前のことですが、ある方が病院で酸素吸入をしておりました。小さなボンベから酸素を吸っておりました。私は「これ、幾らですか」と聞きますと、「９千円です」と言っていました。今頃どれぐらいか分かりませんが、大変なものだろうと思います。私たちはそれを無代価で昼も夜も吸い続けている―――そのこと一つ考えてみても、神様の恵みは莫大なものです

ですから「神様、私はこんなに献げます」と言って、たくさんのお金をささげたとしても、恵みの代価としては足りないでしょう。しかし神様はそんなことはおっしゃらないで、その恵みに感じる心を喜び、たとえレプタ二つであっても喜んで受けられます。そして「いけにえをもって契約を結んだわが聖徒」（50篇５節）と呼ばれます。また「自分のおこないを慎み、わたしに誓いを果す者に対して、わたしは神の救を示す」と喜んで救って下さるのです。

【目に見えないものの価値】

◆只今、酸素の話をしましたが、この頃は目に見えないものの価値が見直されています。たとえば、私たちの体の中では絶妙なコントロールが行われていますが、この技術料を神様に支払うとするなら、幾ら払わなければならないか分かりません。

私はコンピューターの雑誌を時々見ますが、個人用の小さなコンピュータープログラムであっても、数十万円などと言うものはざらにあります。それぐらい目に見えないものの価値は大きなものです。

アメリカでの話ですが、ある人が友人の医者に電話をかけて、「風邪をひいたがどうしたらよいだろうか」と聞きますと、「暖かくして寝ておけばいいよ」と言われました。翌日、その医者から20ドルの請求書が来たので、びっくりして今

度は弁護士の友人に、「あいつは暖かくして寝ておけと言っただけで20ドル請求して来た。どうしたらよいだろう」と尋ねますと、「そういう事情なら払わなければいけない。僕のほうの請求も行くから、よろしく頼む」と言う訳で、翌日弁護士から20ドルの請求書が来たそうです。

わが国でも次第にそういう評価がされるようになりましたが、神様に対して技術料や管理料、あるいは相談料を支払うとすれば、どれほど払ったらよいか分かりません。しかし、神様は決してそれを私たちに要求される方ではありません。むしろ私たちに全部を注いで、生きるようにして下さっているのであり、私たちから求められるのは、ただ感謝のいけにえ、砕けた悔いた心（詩篇51篇、参照）であります。神様は砕けた悔いた心を決して軽しめられず、尊んで受け入れて下さいます。

私たちは、「全生涯をささげて神様に仕える」というような話を聞きますと、「そんなにまでしなくてもいいんではなかろうか。伝道者になろうというんではないんだから」と思いますが、神様はそのことが欲しいのではなくて、柔らかい心を求められるのです。

◆神様が私たちに対してご自分の肉を食らわせ、血を飲ませて下さる―――私たちがまた自らの一切を、肉も血もささげるという事になりますと、お互に肉を食べ合い血を飲み合うという事になります。これはまるで地獄のようでありますが、最も清く、最も高い愛とはそういうものではないでしょうか。

「妬み」と言うと、人間のいやらしい性質のようですが、神様はご自分を「妬む神である」とおっしゃっています。カマキリの雄は結婚したあと雌から食べられてしまうと言います。神様が私たちにご自分を食らわせ、私たちがまた神様に対して自分をささげてしまうという間柄―――互を嗣業とする間柄は最も素晴らしいものではないだろうかと教えられました。

◆神様が私たちに対してどれ程かけがえの無い方であるかという事について、別の方面から読んでみたいと思います。

申命記４章 7/8節。これは十戒を与えられる（申命記５章）直前の記事であます。ここには神様が私たちを嗣業の民、宝の民として下さったことが書いてあり

ます。

「いずれの大いなる国民に、このように近くおる民があるであろうか。また、いずれの大いなる国民に、きょう、わたしがあなたがたの前に立てるこのすべての律法のような正しい定めと、おきてとがあるであろうか」とあります。イスラエルの民は決して大きく強く役に立つ民だから、ご自分の民としたのではありませんでした。むしろ小さなもの、弱いもの、数の少ないものであったにもかかわらず、それを神様は召して自分の民とし、しかも近く住まわれると言うのです。

人間は少しでも広い所に住みたいと家を建て替えますが、神様はむしろ小さい民に近くいて下さる———これはまことに驚いたことです。人間は高ぶりやすい者であって、自分が少しでも低くなる事は耐えられません。実際に下がらなくても、そのように見えるというだけで、「いやだ」と反発しますが、神様はご自分がいと高く、いと清い方であるにも係わらず、最も低い所に住んで下さる———その象徴としてイエス様は神の子の位を捨て、馬小屋の藁の中に生れて下さいました———それは、神様のご性質を現されたのでした。

【神様の目に映っている私の道は？】

◆もう一つ読みましょう。イザヤ書57章 14/19節。神様は私たちのすべてを知り尽くしておられる方です。18節に、「わたしは彼の道を見た」とおっしゃいます。私たちは「つくせ、つくせ」と言われ、「今は恵みの時」と言われても、将来のことが見えないものですから、のほほんとして、「まあ、当分どうにかなるわい。みんなこうやっているのだから、このくらいでよかろう。平均寿命が幾らだからまだまだ大丈夫」———などと考える訳ですが、本当の事は分かりません

神様が一生懸命に、「いま尽くせよ。今は恵みの時だから」と言われているのは、種を明かせば、「明日の晩でお前は終りなんだよ。今晩ここで私の前に立ってはっきりしておかなければ、死ぬに死なれない。天国に行かれないよ。だから今こんなに言っているのだ」と言うことかも知れません。神様は私たちの将来を見通して、「だから今のうちに———今のうちに———」と焼けるような思いをもって私たちに語っておられるのです。

【桁の数が桁外れ！】

◆神様は、いと高く、いと聖なる方であり、私たちとは桁違いの方、0が50ついても 100ついても足らない程の方であります。ある人が原始宇宙に満ちていた

ヘリウムガスから、人間のような高等な生物が生れ出る確率を計算したそうですが、0が4万個ついたという話です。

それはたとえば「夢の島」（東京都の巨大なゴミ集積所）に、ハリケーンが襲って来て、何もかも巻き上げた時に、その中からジェット機が一つポコッと生れて出るぐらいの確率だそうです。

（量子宇宙の話―――省略）

私たちがそんな高く聖なる方と共に住む事は有り得ないことですが、神様のほうが私たちに対して、「心砕けてへりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊を生かし、砕けた者の心を生かす」とおっしゃって下さいました。ですから、「イエス様はこんな者のために死んで下さいました。有り難うございました」と私たちが心砕けて、神様の喜ばれるささげものを献げるならば、神様が私たちと共に住んで下さるとおっしゃるのです。そして私たちを導き、慰めをもって報い、打ちしおれて悲しむ者のために感謝・賛美の実を与えるとおっしゃいます。そして平安を与え、癒しを与えて下さる―――そのような慰めの神であるとおっしゃいます。

これは私たちにとって、まことに有り得ない、驚くべき事です。一筋に神様に信頼して私たちの生涯を傾けて行きますと、そのようなことをして下さいます。神様のほうが先に私たちを嗣業として下さいました。私たちがその方を嗣業として行くならば、そのような間柄として下さるのです。これは何と素晴らしいことでしょうか。

今年、私たちは「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして」と言われると、何か自分の持っているものをはぎ取られて行くような、「ちょっと惜しいなあ、そんなにまでしたら私はきつい―――そうまでは出来ない」と思いやすいのですが、そうではないのです。ちょっと私たちの心を神様に向けて行くと、このような驚くべき恵みをもって満たし、私たちを生かして下さるとおっしゃる―――そこに本当の生き方、神様との繋がりを持って互に嗣業とする生涯を与えようとしておられるのです。私はその事を教えられて、今年の標語を味わい深く読ませて頂きました。

◆マタイ22章 37/38節、「イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである」――私たちに対して、「心をつくせ」と求められる方は、私たちの将来の事を知っておられます。

今、私たちが機会を逃すならば、再び取り返す事は出来ないかも知れません。神様は憐れみの方ですから、彗星の軌道が再び巡って来るように、また、何年か（何十年か？）して機会が与えられるかも知れませんが、それは望外の望みであって、一度機会を失えば、「それまで」と覚悟しなければなりません。

神様は私たちに対して、「今こそ私に心を向けてほしい。力を尽くしてほしい」と求めておられます。それによって神様も喜び、私たちも喜び、神様も生きる――生ける神は死ぬ事がないので、生きるとはおかしな言い方ですが、私たちを生かす事によって神様も生きる方であります。私たちが神様を嗣業とする事によって、神様もまた私たちを嗣業として生き甲斐を持って下さる――このような生涯に私たちを導いて下さるのがお約束であります。

どうか今年は、私たちのために一筋に尽くして下さった方に対して、私たちも尽くし、共に生きる生涯を全うさせて頂きたいと願う者であります。では、ご一緒にお祈りしましょう。　　　　　　　　（1990.1.1.14:00　聖会２）

第３回〈１９９０年１月１日、午後７時〉

神様から愛されたように

（聖書＝マタイによる福音書第２２章３７／４０節）

【二つの戒めの関係】　４９

【「ように」という意味】　４９

【許されたように許せばよいのに】　４９

【与えられたのもあがなわれたのも】　５１

【主の祈りについて特に言われているのは】　５１

【百分の一を半分と思う！】　５２

【一つの体の分肢】　５３

【最も小さい者の一人ーーー即ち私】　５３

「第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これら二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」

（マタイ22:39/40）

【二つの戒めの関係】

◆イエス様は、律法学者たちの問いに対して、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」を第一の戒めとし、頭書の39節を第二の戒めとしてお答えになりました。これらの関係は、何かの条文を読むようなものとは違います。なぜなら「第二もこれと同様である」と言われているからです。「同様」と言っても、全く同じものならば二つ目を言う必要はないのですが、そうでもありません。二つをあげる事が必要であり、その順序もある訳ですが、なお同じであると言われます。

第一の戒めを守ると、第二の戒めを守る事が出来るようになる———あるいは、第一の戒めから始まって、第二の戒めに帰結するという事も出来ます。また、第二の戒めは、第一の戒めの別の形であるという事も出来ます。あるいは、物事の表裏という事も出来るかも知れません。色々なことが可能ですが、とにかく、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」というのが、イエス様の第二番目におっしゃった戒めであります。

【「ように」という意味】

◆私はここで「ように」というお言葉を深く味わわせて頂きました。これは、

※一つには「自分と同じように」という事であり、他人をイエス様という同じ幹に連なる枝と見る———体に手、足など枝がありますが、同じ体の部分であるように、イエス・キリストを信ずる者は、同じ幹に繋がれた者であるという一体感を持って、隣り人を愛するということ、

【許されたように許せばよいのに】

※もう一つは、神様が私たちを許して下さったように隣り人を許し、神様が愛して下さったように愛すること、

という二つの点を教えられた訳です。

◆まず神様が私たちに対して、どんな許しを与えて下さったか、具体例を読んでみましょう。

マタイ18章 21/35節、朗読。これは憐れみがない僕のたとえです。ペテロは先に、イエス様がお話しになった、兄弟に対する罪の許しのお話を聞いた為か、そ

れとも、何か余程腹に据えかねた事があったのか、イエス様に対して、「先生、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさなければならないでしょうか。7たびでしょうか」とお尋ねしました。するとイエス様は、「わたしは7たびまでとは言わない。7たびを70倍するまでにしなさい」と言われました。これは 490回までと言う意味ではありません。「7」はユダヤ人にとって完全数であって、その2乗の10倍というのですから、限りなく許すということです。

イエス様はこう言われたあと、憐れみのない僕のたとえをお話しになりました1万タラントの負債とありますが、1タラントは、労働者の1日の賃金の6千倍に相当します。労賃がたとえば1万円とすると、1万タラントは6千億円という途方もない金額になります。これだけのお金を借金するほうもする方ですが、貸す方も大したものであって、しかもそれを憐れんで全部許してしまうと言うのですから、王様の富は大したものです。これは私たちの罪の大きさと、神様の許しの大きさを示しているものです。

ある時、王様が僕たちと決算を始めました。1万タラントを借りている人がやって来たので、「お前は1万タラントだったな、返しなさい」「どうしても返せません」「自分自身も、妻子も持物も全部売りなさい———それでも足りないのだが、とにかく裸になって返せ」と言いますと、「どうぞ憐れんで、もう暫くお待ち下さい。少しづつでも必ず返しますから」と言います。それでは、何十年、何百年かかるか分かりません。王様は、憐れに思ってその負債を全部許してやりました。

許された僕は、大喜びで外へ出て行くと、たまたまお金を貸している友人に出会いました。「お前には 100デナリ貸してあるぞ。あれを返して貰わないと都合が悪い。お前はいつもそういうふうなんだから!」と言って、首を締め上げました(100デナリは1万タラントの60万分の1です)。彼は自分が王様から借りた分については、大いに弁解の余地があると思った訳でしょう。しかしこの相手に対しては大いに責めなければならないと思い、「待ってくれ」と言う友人を引っ張って行って、借金を返すまで投獄してしまいました。

それを聞いた王様は大変怒りました。「お前は何という悪い人間か。お前が憐

れみを請うたから、私は１万タラントをゆるしてやったのだ。私が憐れんでやったように、あの仲間を憐れんでやるべきではなかったか」と許しは取り消し、負債を返し終るまでは許さないと、彼を獄吏に引き渡したというのです。

このたとえを通して、「もしあなたがたが、心から兄弟をゆるさないならば、天の父もまたそのようになさる」とお話しになったのです。これは罪の許しに関するたとえです。

【与えられたのもあがなわれたのも】

◆神様は私たちにすべてのものを与えて下さいましたが、それは全く無代価でありました。物にしても、環境にしてもそうです。神様は「料金を払え」と言われた事はありません。大きな度量をもって、私たちにすべてのものを豊かに与えて下さいました。人間が無駄使いしたり、環境を汚したりして、神様の尊い賜物を踏みにじるような事をしても、神様は大きな憐れみをもって忍んで下さっています。

私たちのあがないについてもそうです。罪の許しを得るために私たちは何もした訳ではありません。全く一方的に、神様のほうからイエス様を十字架につけて、その血によって私たちをあがなって下さいました。この事はヘブル９章、あるいはイザヤ書53章に書いてあります。

神様が私たちにして下さったようにとは、そういうことですが、主は「隣り人に対してそのようにせよ」と命じられるのです。

【主の祈りについて特に言われているのは】

◆私たちがそのように隣り人を許すならば、それによって私たちが許されるのです。私たちは、日毎に主の祈りをしますが、私はあるとき、「これは少しおかしい」と思った事がありました。「私が友人を許すと、私が許される———とあるが、罪はイエス様を信じる事によって許されるのであって、自分の熱心や行いや、罪滅ぼしによるのではない。それなのに、どうしてこう言われているのだろうか」と考えたのです。しかし、私の考えた事は間違いであって、神様のおっしゃる事が正しかった訳です。そのことについて読みましょう。

マタイ６章9/15節、朗読。これはイエス様が弟子たちに「主の祈り」を教えられた所です。12節の「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」とあるのは、「我らに罪を犯す者を、我らが

許すごとく、我らの罪をも許し給え」と祈っているものです。そのあと、イエス様は 14/15節にひとこと加えられました。「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう」とあります。

◆私たちにとって、人を許すことがどれ程むつかしいものかということです。人を許せないのは、自分のことが分からないからです。同じことであっても、人に対しては大変厳しい非難の材料になりますが、自分から見れば大いに弁解の余地があると思う訳です。

この事はマタイ７章の初めにも、「なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。自分の目には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えようか」とありますがその認識の違いは少々のことではありません。例えば、相手と自分の間に何事かがあって、「ここからこちらは私が悪い、そちらはあなたが悪い」と決めたとします。片方の人が、どのあたりが真ん中だろうと思って何かを置きますと、 100対１に分けるくらい相手に近い所に置く訳です。つまり自分は相手より 100倍ぐらい悪くても弁解の余地があるが、相手は 100分の１ぐらい何かをしても、大いに非難の余地があると思う―――人間の目はそれ程歪んでいるものであります。

人間の目は自分の体に付いていますから、自分を見ることは出来ません。鏡に写して見る姿は虚像であり、左右が反対です。そのように人間は、他人の事ははっきり見えて、自分のことは全く見えないものです。

「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父もあなたがたをゆるして下さる」という意味は、神様から許されたという事を自覚するならば、人を許すに違いない―――したがってその現れた行いによって神様は私たちの許しを確認して下さる訳です。

イエス様の血によって、私たちが許されたことは大前提であって、何も条件はありません。しかし私たちがその事をはっきり自覚しているならば、人々を許します。もし許さないならば、自分が神様から許されているという事が徹底してい

ない訳ですから、神様は「あなたがたのあやまちを許して下さらない」ということになります。

したがって私たちが、神様から許されたように隣り人を許し、神様から愛されたように隣り人を愛し、無代価で受けたように無代価で与えて行くという事は、神様から救を確認して頂く為にどうしても必要なことであると教えられたのです。

◆もう一つは、「己を愛するように」ということ――自分と相手の一体感について読みたいと思います。

【一つの体の分肢】

１コリント12章 12/26節、朗読。ここには、体に様々の部分があるように、私たちは神様の前において、イエス様という一つの体の枝として連なっているものである事を言われています。「主にあって」とは、神様を主人公とし、神様から罪を許され、神様に仕える者となり、神様から愛されている――各自がその様な状態にある時、私たちは一つの幹に連なる枝であると言われているのです。しかし、一つの体ではありますが、各部分はそれぞれ使命を異にしています。

生物学の話しを聞きますと、同じ「種」に属するものはお互いに限りなく近いと言われます。これがトンボであるか蝶々であるかは誰が見てもすぐ分かります。しかしそれぞれの個体をよく見ると、あくまでも違っていると言われます。

それと同じように、私たちが神様に連なっているそれぞれの立場、持場はみな違います。同じイエス様という幹に連なる点は、一つですが、お互い同士はあくまで違うものであり、使命も違っています。

私たちが、「自分を愛するように、隣り人を愛する」のは、同じ幹に連なる枝として、主のお名前の故に、私たちが神様からされたようにして行く――これは博愛とか慈善を奨励されている意味ではありません。博愛・慈善によって人は救われるのではありません――自分自身が、神様の前に何者であるかをはっきりとして、その上で、隣り人であり、同じ幹に連なる枝である者に対して、あるいは許し、あるいは与え、あるいはあがなって行く――これが私たちに命じられているところです。

【最も小さい者の一人――即ち私】

◆マタイ25章 31/46節、朗読。これは最後の審判の有様です。ある人たちは、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わ

たしにしたのである」とほめられ、永遠の御国を受け継ぎました。また別の人々は、「これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである」と叱られ、永遠の刑罰を受けました。

私たちはこんにち、主の名の故に、つまりイエス様の弟子であるというお名前の故に、最も小さい者のひとりにみ心を行うならば、神様から正しい報いを受けるのです。それは決して善行、博愛・慈善を勧める意味ではなくて、自らが神様から罪を許され、憐れみのうちに包まれている自覚があるならば、当然こうした行動が出て来る筈であると言われているのです。

私たちは今年ここまで導かれて、私たち自身が何者であるか――神様の憐れみによって今ここに置かれ、支えられ、保たれているという事を知りました。したがって私たちは当然、神様からされたように、私たちの行為が（形をとって）出て来る訳であって、それを見て神様は私たちにあがないや罪の許しを確認してくださるのです。

マタイ22章にかえり、39/40節、「第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これら二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」――私たちは心をつくして神様を愛し、神様から愛される生涯ですから、当然、隣り人に対する行いが出て来ます。神様もまたそのように私たちを全うして下さる方であります。そうすることによって、神様の御旨が全うされるとおっしゃるのです。

今晩も、私たちはこの第一、そしてこれと同様と言われる第二の戒めを守らせて頂いて、神様の御旨にかなう者になりたいと願う者です。ご一緒にお祈りしましょう。

（1990.1.1.19:00　聖会３）

第４回〈1990年1月2日、午前10時〉

自分の十字架を負うて従ってきなさい

（聖書＝マタイによる福音書第１６章２４節）

【弟子たちの信仰告白】　５７
【天国から地獄へ】　５９
【服従の五道】〈悔い改め〉〈自発〉　６０
【自分を捨てる】　６１
【自分の十字架を負う】　６１
【十字架の力】　６２
【私に従って来なさい】　６３
【自分の命を救おうとすれば】　６４
【神様の為に命を失うと】　６４
【至聖所のたれ幕が裂かれた】　６５
【親展書状】　６５
〈ペテロ〉〈アハブ〉〈ダビデ〉　６６
〈エステル〉　６７
【指差しを除け】　６７
【神の山の海抜高】　６８
【天使たちの羨望】　６９
【倣う為に必要・十分な福音書】　６９

「それからイエスは弟子たちに言われた、『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」

（マタイ16:24）

◆この13節からは弟子たちの信仰告白の記事です。イエス様はご在世中、町々村々をお回りになって、各地で多くの人々に天国の福音を伝え、病める者を癒し、悲しむ者を慰め、その中で弟子たちの教育をなさいました。

ある時、ピリポ・カイザリヤ地方（パレスチナ北部のヘルモン山の麓に近い所）に行った時、「人々はわたしのことを誰と言っているか」と弟子たちにお尋ねになりました。彼らは人々の言うところを聞いていましたから、それを報告しました。「ある人はバプテスマのヨハネだと言っています」―――暫く前に首を切られたバプテスマのヨハネ（マタイ14章）が生き返ったのではないかと言う説です。

「また、ほかの人たちはエリヤだと言っています」――― 800年以上も昔の大預言者であったエリヤは、エリシャと共に歩むうちに火の車と火の馬によって隔てられ、つむじ風に乗って天に昇ったと記されています（列王下２章）。あのエリヤがいま私たちの所に来たのではないかと言う説です。旧約聖書の最後（マラキ3:5)には、約束のメシヤ（救主）が来られる前に預言者エリヤが遣わされると記されています。

「また、ある人々は預言エレミヤの再来ではないかと言っています」―――泣き預言者と言われて大変大きな苦難の中を通った預言者ですが、苦難の僕イエス様によく似ていると言われます。

「いや、その他の預言者の一人に違いない」―――他の預言者の一人が、特別な使命の為に甦ったのであろうと言う意見です。

イエス様はそれらを聞かれた上で、「それでは、あなたがたはわたしをだれと考えているか」と問われた時に、弟子たちはグッと詰ったのだろうと思います。やがてペテロが「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と申し上げると、イエス様は、彼を大変おほめになって、「あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉（人が教えたとか、自分が考えたとか）ではなく、天におられる父なる神様である」と言われました。

ドアを蝶番の向きと反対にこじ開けようとしても開かないように、神様の奥義を人間的知恵によって理解しようとしても分かりません。

聖書の中に、神の人を捕らえようとして、家を囲んだ悪者たちが、入り口が分からずにグルグル回ったという話がありますが、人間の努力はそのようなものであります。

しかし、ペテロは幸いなことに、父なる神様の側からこのことを開かれました.彼が信頼しようとしたから開かれ、それによって告白が出来た訳です。「信仰から信仰に進む」とある通りでした。

そこでイエス様は、「わたしもあなたに言おう。あなたはペテロ（岩）である.わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう」と言われました。カトリック教会では、この事からペテロが教会の土台であって、その後継者であるローマ法王（正式名称は教皇）が教会の最高首長であるとしていますが、ここを見ると、ペテロ個人が岩ではなく、すぐそのあとペテロは「悪魔よ！」と厳しく叱られています。したがってこの岩は、そのときペテロが告白した信仰、つまり「キリストこそ生ける神の子、救主である」という信仰の上に、「わたしの教会を建てる」と言われた訳です。

教会は決して建物ではありませんし、人間が組織するクラブでもなく、「汝はキリスト、生ける神の子」との信仰を告白する者の集いであり、その頭としてイエス・キリストが生きておられる所です。そこは決して黄泉の力（この世の力）が侵入して来ることは出来ません。教会はこの世の力に服従するものではありません。

またイエス様は、「わたしはあなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」と言われました。神様の権威を委ねられる訳です。

もし私たちが地上で信仰をもって繋ぐ———「あなたはそんな事をしていたら神様から罪に定められます。滅びますよ」と宣告するならば、天国においてそれが定まってしまうと言われるのです。最高裁判所において、最終的な判断が示されると、すべてのことが決まってしまうように、神様が物事を定められます。

会社の組織などで、書類を回して次々に印鑑を捺して行く、しかし上の方に行くと実際に内容は知らないけれども、自分の信頼する部下が詳しく検討したのを確かめて、「君、見たんだねーーーじゃ僕も捺しておこう」ということが行われます。

神様は会社の上役とは違って隅々まで知り尽くしていらっしゃる方ですが、私たちに委ねられますから、私たちが信仰を持って決定したことは、神様もその通りに決定をされます。

逆に地上で解くーーー「あなたはいまイエス様を信じたから罪が許されました」と宣告すると、神様もそれを許して下さいます。これは大変な権威であります。神様の権威（名）をそのまま用いる事が出来るのですから、まことに震えおののくような思いがいたします。

ペテロは、そう言われたのですから、大変ほめられた訳です。

◆ところがすぐそのあと、イエス様は、ご自分がやがてエルサレムに上り、長老、祭司長、律法学者たちから捕らえられ、多くの苦しみを受け殺され、そして３日目に甦ると話し始められました。

弟子たちは、「イエスは神の子、キリストである」と告白はしましたが、どういうキリストであられるのか、また、どんな道をもって私たちを救われるのか、まだはっきり分からなかった訳です。

このことについて、イエス様はその前にも時々お話しになっていましたが、彼らの耳がまだ開かれていませんでした。しかし彼らがはっきりと信仰告白をしたので、イエス様もご自分がどういう道を歩かれるかをはっきりとお話しになった訳です。

「殺される」と言われたので、ペテロは「先生、ちょっと待って下さい。そんなことがあっては大変です。そんな事はあってはなりません」と言って、イエス様を諌めたつもりだったのですが、イエス様は振り向いて、「サタン（悪魔）よ、引きさがれ。わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことだけを考えている」ーーーつまり、神様のみ心が第１なのに、「慕わしい先生が殺されては困ります。私たちは寂しいです。悲しいです」というのは神様のみ

心に逆らう者だとペテロをお叱りになりました。

ですから、ペテロは天国から地獄に落とされたようなものです。「天の父があなたにこの奥義を啓示された――この信仰こそ教会の土台である」とほめられたかと思うと、たちまち「悪魔よ、退け」と言われたのですから、弟子たちも戸惑ったに違いありません。

ペテロが叱られるということは、他の弟子たちも叱られている訳で、彼らは「一体、私たちはどんなふうに従ったらよいのだろうか」と考えたと思います。

【服従の五道】

◆そこでイエス様は弟子たちに従うべき道を教えられました。それが 24/25節です。先程、ペテロ個人に対する戒めは、ほかの弟子たちに対する戒めであると申しましたが、弟子たちに対してお語りになった事は、こんにちの私たちに対するご命令でもあります。私たちがこれに従って行くとき、神様が報い、あるいは助けて下さるのです。

私はここを何度も味わわせて頂きましたが、イエス様に従うために、先ず求められたことは、

〈悔い改め〉

①人間中心で、神様のことを思わない考え方を、悔い改めなければならないということです。

〈自発〉

②自発の意志を持ってほしいということです。「わたしについて来たいと思うなら」と言われるのですから、「そう思ってほしい」というご期待はありますが強制すると反発します。しかし黙っていては分かりませんし踏み出さないので、招かなければなりません。しかし何とか自発的にその意志を持ってほしいと期待されている訳です。

「だれでも」と言われるのですから、男でも女でも、信仰年限が長くても短くても、また今の今まで闇の中にいた人でも、あるいは罪を犯して顔を上げられなかった人であっても、イエス様から招かれている事を知って、「ああそうですかと自分で踏み出そうとする者は、誰でも従うことが出来るのです。

そのあと、更に三つのことがあります。「自分を捨てること」、「十字架を負うこと」、「わたしに従いなさい」という三つです。

◆③自分を捨てる――「自分を捨てる」と言っても、みな自我を持って生き

ています。お人形ではありません。最初の生物が発生した時、細胞膜となるべきある繊維のようなものが丸くなってその口が閉じた時、「わたしは周辺の環境とは違う個である」という主張をし始める———これが生物の始まりであると言われます。

人間もその通りであって自分が生きているという事は、他のものと違う「わたし」であるというものを持っている訳で、それが無ければ生きられない訳です。しかし神様の前には「わたしが」「おれが」というものを捨てなければ従うことは出来ないとおっしゃるのです。主はそれを捨てさせて下さる方であります。

私はこの点が分からないために、「どうしても私は従う事が出来ない、どうしたらよいのだろうか」と苦しんだ事があります。しかし「捨てなさい」と言われる方は、捨てさせて下さる方であります。その為に十字架を立てて下さいました。

◆④自分の十字架を負う———「自分の十字架」と言うと、ある人々は、自分の宿命———自分ではどうする事も出来ないものを我慢して生きて行く———これが十字架だというように考えます。

例えば、自分の体に障害があるとか、家族の具合が悪いとか、私はこういう体質に生れたと言うようなものです。それは十字架ではありません。イエス様は私たちの為に十字架にかかって下さったから、一切から解放されました。

十字架の現場を見ると、バラバという大罪人が３本の十字架の真ん中に掛けられる事になっていました。両側は他の盗賊たちです。そして大きな釘で手足を打ち抜かれ出血がひどくて、やがて衰えて死んで行く———まことにむごたらしい刑ですが、そのバラバが許されて———その代りにイエス様が十字架に付けられました。

日曜学校の教材に、バラバの紙芝居がありますが、彼が牢獄に繋がれて、「今日はいよいよ処刑の日か」と毎日待っていると、ある朝すぐ隣の牢獄で人のざわめきが起って、誰かが引かれて行き十字架に掛けられ、自分は釈放されました。「一体、誰だろうか」と見ると、それはイエスという人だった、というものです。

私たちは、「バラバのような悪人ではない」と思いますが、バラバは私たちの雛形であって、もし私たちが自分のした事についてふさわしい報いを受けるなら

ば、十字架でも足りないのではないかと思います。

「私は人を殺した事はない」とか、「泥棒したこともない」と思います。運転免許証の裏面に、何も記載事項がないと誇るように、私は何の処分も受けた事はないと誇りますが、神様は上辺の形や、人間の約束事を守ったか守らなかったかではなくて、私たちの心の奥底の動きまでも見ておられる方です。

もしこの世の中に心の動きまでも記録するビデオテープがあって、今までのすべてが写し出されるとすれば、私たちはどんなに恥ずかしく恐ろしく、いたたまれないだろうかと思います。もし一つ一つの場面を止められて、神様から「ちょっと止めなさい。これは何だ。こんな事をしたではないか。行動はしなかったがこんな事を考えているではないか――誰も咎める者がなければ、この通りに実行したかも知れないのだぞ」と一つひとつ指摘されたら、私たちは誰一人立っている事は出来ないでしょう。すると、バラバよりももっと酷い、むごたらしい刑罰を加えられても当然だと思うのです。

しかし、そんな私たちの為に、神の子イエス・キリストは、罪のない身でありながら、私たちの罪を背負って死んで下さいました。ですから、それによって神様は私たちの一切を新しく造り変えて下さったのです。

聖書に重症のライ病人が、神様の力で癒され、幼な子の肉にように美しくなったと記されていますが、これは決してまじないや架空の話ではなくて、神様は私たちの肉体も魂も新しく造る事が出来る方であり、その代償として、無垢の神の子が、むごたらしい刑罰を受けた訳です。

◆④－2 十字架の力――神様はそれによって、私たちの一切を新しくしたとおっしゃいます。一つ読んでみましょう。

２コリント５章 16/19節、朗読。この 17/18節に、「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。しかし、すべてこれらの事は、神から出ている」とあります。

「キリストにある」とは、イエス・キリストを信じてお受けすることであってその人は新しく造られた者であるとおっしゃいます。自分が力んで「よし、俺は

新しくなって、死んだつもりでやるぞ」とやっても、人間の決心はすぐに鈍れてしまいます。どんなに人間が真実にやろうと思っても、涙を流して誓ったとしても、それは出来ないと歌われています。

しかし神様のお救いは、人間が頑張ってそのつもりになることではなくて、神様が新しく造り代えて下さるのです。無から有を造った方であり、土の塵をもって私たちの形を造って命の息を吹き入れられた方ですから、造り代える事がお出来になります。そして「古いものは過ぎ去った」———つまり置き換えられた訳です。

私たちが十字架に掛かるところを、代りにイエス様が掛かって下さったと言う事は、神様の前でどんなに大きな決定であるかと思います。ある所には、「神様がそのお口で直接語られた事である」と書いてあります。それ程はっきり私たちに宣言して下さっているのです。私はそのことを聞いた時に、それまで自分の内につかえていたものが、すっかり取り除かれました。何十ぺん、何百ぺん御言葉を唱えても、お祈りしても、どうにもならなかった事が、上からサッととけて行く思いがしました。

絡まった紐を無理に解こうとして筋違いの部分を引っ張ると、いよいよキツクしまって、大変な事になりますが、大元をフッと引っ張るとバラバラととけてしまうようなものです。

「自分でも10のうち8か9まで頑張った。神様がちょっと助けて下さったから10まで行きました」という事ではないのです。全くどうにもならない、0であったものが、完全に変えられ、神様に向かって顔を上げ、お言葉に従うことが出来るようになりました。

◆⑤わたしに従って来なさい———もう一つがこれです。「イエス様の十字架で罪が許されて、こんなに晴れ晴れしたから、今度は神様から喜ばれる模範的なクリスチャンになろう。こうもしよう、ああもしよう」と今度は自分の義を立てようとする———これは捨てたはずの自己の甦りです。亡霊が甦って来たようなものであって、神様のみ心にかなわない事をやり出します。神様のみ思いは、「人間の思いよりも高く、人間の道よりも高い」とおっしゃるのですが、自分が

一生懸命に考えてやって行くと、神様の道にはかないません。

確率の考え方でいくと、たくさんやっていれば、たまには当る事もある筈ですが、神様のみ心に従うべき時に、自分の義を立てようとすると、「愚かなる者はこの道に迷い入ることがない」と書いてあります。その道は「シオンの大路」という大きな道ですけれども、間違ってもその道を歩くことは出来ないとイザヤ35章に預言されています。それは神様が閉ざされるのであって、不思議と言わなければなりません。

そこで「わたしに従ってきなさい」とおっしゃいます。イエス様のお言葉である聖書のお言葉に、無条件に従ってまいりますと、神様の前に喜ばれる生涯を全うする事が出来る訳です。

【自分の命を救おうとすれば】

◆そこでマタイ16章25節に、「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう」とあります。「自分の命を救う」と言うのは、要するに、自分の命を捨てることを拒む事です。「神様に従うのはよいけれども、私のこの部分はやっぱり手放す訳にはいきません。これを捨てたら生きて行かれません」と言う訳です。

しかしそこが問題なのです。神様は「捨てなさい」とおっしゃいます。それを惜しんで自分の命を救おうと思っていると、むしろそれを失ってしまう———神様からの命を失うと言われるのです。

【神様の為に命を失うと】

◆「わたしのために自分の命を失う」と言うのは、「私は神様を第一として従います。私はこれを離れ、捨てます。私はもともと神様によって新しく造り変えられて生かされている者、神様に従うように召された者ですから」と自分の命を捨てて行くと、「それを見いだす」———神様が下さる恵みの富を知って驚くようになるのです。

私の体験ですが、からまった糸が縺れに縺れて、どうしても神様の前に立つ事が出来ないと思っている時に、神様は上からスッと一切をほどいて下さいました。「人がキリストにあるならば、新しく造られた者である」と言われた時、神様からの命の力の素晴らしさに大変感謝しました。「ああ、神様と言う方は、何と素晴らしい方であろうか」と思いました。人間がどんなにもがいてもどうにもなら

ないところを、神様が上からスパッと切り裂いて下さいました。

◆それは丁度、エルサレムの神殿の幕が上から裂かれたようでした。イエス様が十字架に掛かられて、最後に「事終りぬ」とおっしゃって首を垂れられた時に、大きな地震が起り、神殿の幕が上から裂かれたと書いてあります。この幕は、昔、イスラエルの民がエジプトから出て、荒野において会見の幕屋を作った時に、神様のご指示に従って、聖所と至聖所の間に、へだての幕として掛けられていたものです。

【至聖所のたれ幕が裂かれた】

至聖所には、契約の箱が置いてあり、大祭司が年に一度だけ、自分と民とのあがないの血を携えて入る事が出来ました。平常はこの幕によって厳重に仕切られており、誰もそこにズカズカと入る事は許されませんでした。

ところが、イエス様が十字架に掛けられ息を引き取られた時に、その幕が上から裂けたと書いてあります。垂らされた丈の高い幕ですから、人間が裂くならば下を持って両側から裂く一一一つまり下から裂ける筈ですが、そのとき上から裂けたとあるのは、神様が裂いて下さったのです。

その意味は、ヘルブ人への手紙に、「イエス・キリストの肉体が裂かれたことによって、わたしたちのために新しい生きた道が開かれた」と書いてあります。神様が開かれ、保証されているものですから、「この道を通ってはばからずに聖所に入ろう」と勧められています。

私たちが「神様の命を見いだす」とはそういう事であります。上から与えられる命の恵みは素晴らしいものです。これらは現代に生きる私たちに対するお言葉であります。

◆これは人ごとではなくて、私たちに個人的に呼び掛けられているものです。最近はあまり「親展」と書くことはありませんが、宛先の本人だけに読んで貰いたいという意味です。

【親展書状】

神様は私たちに対して親展書として聖書を与えて下さいました。なるほど、聖書は世界中のあらゆる国語に訳されてベストセラーとなっておりますが、これを「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と求めて読み、「いま私に呼び掛けて下さっている」と受け止めるならば、神様は私たち個人に呼び掛けて下さる

のです。

ですから、それに対して、「私のことですか！」と言う驚きが必要だと思います。聖書にそういう招きが色々記されていますが、弟子たちが召された時がそうでした。シモン（ペテロ）・アンデレの兄弟、ヤコブ・ヨハネの兄弟は、イエス様から招かれた時、「あ、私を呼んでおられる！」と網を捨て、舟も家族も置いて従いました。

〈ペテロ〉

ヨハネ21章によると、ペテロは「汝は我に従え」と言われて、イエス様に従う者となりました。

〈アハブ〉

アハブが戦争に出る時、「だれから戦争に出しましょうか」と神の人に問うと「それはあなたです」と言われました。「あ、そうですか。私のことですか！」と、彼は立ち上がって行った時に、神様は彼に勝利を与えられました。彼は総合評価としては大変悪い王ですが、そういうひとこまもあった訳です。

「私のことですか！」と言う驚きをもって立ち上がると、そこに生きた事が行われます。人ごとと思っていると、何も起りません。込み合った電車の中などで知人に呼び掛けられた場合、予期していないものですから、なかなか自分の事と思わないようなものです。それでは神様は何事もすることが出来ません。ですから「あなたです」と呼び掛けられていることに気付いたならば、「はい、私ですか！」とお答えすると、そこに新しい事が起る訳です。

〈ダビデ〉

この事は良きにつけ悪しきにつけそうであって、ダビデは婦人問題で大きな罪を犯した時に、神様から警告を受けました。神の人が来て、譬話を始めましたが彼は人ごとと思っていました。「ある所に大金持がいました。隣に貧乏な人がいて、１匹の羊しか持っていませんでした。王様の所にお客が来たとき、王様は自分の持っているたくさんの羊を殺す事を惜しんで、隣の１匹の羊を取ってこれを料理しました」と、そこまで言った時にダビデ王は、「何とけしからん奴だ。わが国にそんな非情な奴がいるなら、ただでは置かない、死刑だ。またその羊は4倍にして償いなさい」と言いました。

すると神の人は、「王様、それはあなたの事です！」と言った時に、ダビデは震え上がってしまいました。そして彼は「ああ、私は誰も知らないと思っていた

けれども、神様はすべてをご存知でいらしゃいました。私はただあなたの前に罪を犯しました」と人の事を何も言いませんでした。（たとえば、バテシバが、人から見える所で、慎みの無いことをしたなどと言いませんでした）。「全く私が悪うございました」と彼は悔い改めた時に、神様は即座に神の人を通して、「あなたの罪は許された」と宣言されました。天国の鍵を預かっていた神の人の宣言によって、神様から許され、ダビデは滅びる事はありませんでした。この場合も、「ああ、そうですか。私のことですか！」と気が付いて、まっすぐお言葉を受け止めた時に、神様は驚くべき事を行われました。

〈エステル〉

またエステル記によると、ペルシャに移されたユダヤ人の中から王妃として選ばれたエステルは、国内に在留しているユダヤ人同胞の命乞いをするように求められた時、「自分は王宮の中にいるのだから、一般のユダヤ人のように俄かに殺される事は無いだろう」と思っていたかも知れません。

しかし従兄弟のモルデカイから、「あなたが王宮にいるのは、この時のためでなかったと誰が知るでしょうか」と言われた時に、彼女は「ああ、そうだった。私はこの時に為に、今ここにあるのだ！」と自覚し、命を惜しまず王に命乞いをして、ユダヤ人皆殺しの陰謀は大逆転して、その首謀者が滅ぼされるという事件がありました。これはユダヤ人が滅びて捕囚になっていた時代の大きな出来事でした。

【指差しを除け】

◆そのような事を一つ一つ見ると、神様は私たちに対して個人的に呼び掛け、働こうとしておられる事が分かります。もし私たちがそれを曖昧にして、「いや、私の事じゃないだろう。もし私のことだったとしても、ここは一つ知らん顔をしておいて、あとからまた何とかしよう」と言っていますと、神様はご自分のみ心を行うことが出来ません。そして、「自分はまあ、これで当分安泰だ」と思っている、その平安が失われてしまうのです。

先程「良きにつけ悪しきにつけ」と申しましたが、ある所には、「あなたのうちから指差しを除け」と書いてあります「指差し」というのは、指を差す―――黙ってこうやる訳です。お客さんが来ている時に、子供が騒ぐので叱る時、指差したり、目で合図をしたりしますが、神様が私たちに対して「指差し」をされる

事があります。私たちがそれを感じながら、「いや、まあそんな事おっしゃらなくても、ちょっと―――」とやっていますと、スカッとした喜びと力はわいて来ません。

しかし、「あ、私のことだ。確かにこれは神様が私に指差しをしていらっしゃる！。そうだ、この事について曖昧は許されない。神様、どうぞ許して下さい――『自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい』とおっしゃるから、私は従わせて頂きます。主よ、十字架の血の故に罪を許して、新しく出発させて下さい」と、もし私たちがはっきりすると、その時はつらいようですが、そこからすべてが解けてまいります。すべてが暖かくなって、神様の命が満たされるようになります。これは私たちに対する重大な恵みの機会となります。

もし拒めば、同じ指差しが、いつまでも私たちの棘になります。「こればかりは捨てられません」と言っていたものを捨てて、「私に与えられているすべてのものは、使命の為にあなたから預かったものです。自分のものは一つもありません。神様どうぞ、私の一切をいま十字架の血の故に新しく造り替えて下さい。『人キリストにある時は新たに造られたるなり』とありますから、どうぞ、お言葉通り再出発させて下さい」と踏み出して行くと、神様は実に豊かに祝福して下さいます。すると何事も無かった人がスッと行くよりも素晴らしい事をして下さる訳です。

【神の山の海抜高】

◆人間は、失敗をし、あるいは様々な苦しみに会うと謙虚になります。また神様の恵みを100%知ることが出来ます。私は久住登山を何度かした事がありますが登山口はかなり高い所にあります。恐らく1000㍍とか1200㍍あると思います。それから歩いて頂上に着きますとそこは1790㍍だったと思います。したがってその標高差は 6-700㍍しかありません。しかし海抜高は1790㍍丸々ある訳です。

それと同じように、私たちが順調にスッと成長して、「私は大体良い人間でかなりの事をやって来ました。神様も少し助けて下さった、有り難うございます」というぐらいの事ではないのです。私たちは失敗をし、全く0で、どうにもならないという所から、神様が命の恵みという頂上まで満たして下さるならば、神様の恵みを100%知って感謝をすることが出来ます。これは底辺を体験した者の恵み

です。

◆昔、天使たちが福音について調べた時に、後世（つまり現代）の私たちを羨んだと書いてあります(1ペテロ１章）。それは

①救が与えられる時代が、彼らの時代ではなくて、こんにちの私たちの時代であること

②天使たちは罪を犯した事がないために、イエス・キリストのあがないの恵みが分からないこと

このような２点があるために、彼らは私たちを羨んだ訳です。

私たちは幸いなことに、今という時代に置かれ、また多くの罪を犯し、あるいは苦しみ悲しみ、その中から神様の命の恵みを100%感謝することが出来る訳です。私たちはいま大変感謝な時代、感謝な立場にいることを教えられました。

【天使たちの羨望】

◆もう一度、マタイ16章24節をお読みしたいと思います。「それからイエスは弟子たちに言われた、『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい』」ーーーイエス様に従うという事は、そのお言葉に従うことであり、またそのなさった行動、生き方を模範とすることです。それは新約聖書の４つの福音書にはっきり記され、それによって私たちは「イエスは救主、神の子である」と信ずることが出来ます。神様はその者に命を与えるとおっしゃるのです。福音書を贈られた目的はそこにあります。

【倣う為に必要・十分な福音書】

神様が私たちを招かれるのは、何か特別な生涯ーーー伝道者や特別な使命を持った人のような生涯に入れようとされるのではありません。「すべて疲れた者、重荷を負う者はわたしにきなさい。わたしはあなたがたを休ませてあげよう」とおっしゃいます。神様は柔和で謙虚な方であって、「何とかしてわたしに聞き従ってほしいーーーそうすれば、わたしはあなたがたに休みを与えよう」と言われる方です（マタイ11章）。

詩篇81篇には、「イスラエルよ、わたしに聞き従うことを望むーーーわたしはわが民のわたしに聞き従い、イスラエルのわが道に歩むことを欲する」とあります。造り主が私たちに対して、「聞き従って下さいーーー歩いて欲しい」と言う有り得ないようなお言葉が記されています。

神様は決して私たちを苦しめて、窮屈な思いをさせようと、招かれているのではありません。大きな恵みに招き入れるために、私たち個人々々に呼び掛けられているのです。そのような自覚を持って、ここから一歩を踏み出して行きたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　　　　(1990.1.2.10:00　聖会４)

第５回〈1990年1月2日、午後2時〉

私に倣う者となってほしい

（聖書＝ピリピ人への手紙第２章５節）

【救の達成に向かって】　73

【自分を捨て、自分の十字架を負うて】　73

【罪と重荷を取り去って下さる】　74

【模範を残された主キリスト】　75

【神様から取り扱われたように】　77

【救は神様が保証して下さるもの】　77

【裁き主に委ねられたキリスト】　78

【弟子の足を洗われたキリスト】　79

【模範に倣えば同じようにされる】　80

【やるから分かって来る】　81

【始めた方は遂げられる】　81

【報いを与える神は生きたもう】　82

【路線の変更は上に向かって】　83

【お言葉に従う時は自分の事はおく】　84

「わたしの愛する者たちよ。そういうわけだから、あなたがたがいつも従順であったように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いない今は、いっそう従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」(ピリピ2:12/13)

◆ここに「いっそう従順で恐れおののいて、自分の救の達成に努めなさい」と書いてあります。私たちの救の達成とは一体どういうものでしょうか。それは人間の自己免許ではなくて、神様の救の達成でなければならない訳です。

今年、標語として三つのものを与えられました。神様は先ず、

※「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」(マタイ22:37)とおっしゃいました。

しかしそれは私たちに犠牲を強いて、「お前たちだけしっかり頑張りなさい」と言われるのではありません。私たちの出来る熱心などは大した事はないのです。それよりも神様のほうがどれ程熱心を尽くし、心を、精神を、思いを尽くして下さったか分かりません。その方が私たちに対して、「幾らかでも自分に答えて欲しい——あなたがたなりに心を尽くして、神を愛して欲しい」と願って、聖会を始めて下さいました。

私たちは、神様に仕えることを特別な負担のように感じますが、実はそうではありません。人間は自分を傾けるものがなければ、生きて行かれないものです。くらげのようにフワフワしているのではなくて、一つのことに集中しなければ——二つ三つでは力がちぐはぐになりますが——生きられないものであって、ただお一人の神様に一切を傾けて行くことは、私たちにとって非常に幸いなものであります。

◆私たちが心を尽くして従うには一体どうしたらよいか——中央の標語には、

※「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」(マタイ16:24)とあります。

自分から進んで、「よし、私は神様に従おう。神様は昔ではなく、今、私を求めておられる。やっぱり神様に従わなければ駄目だ——」という気持があるな

【救の達成に向かって】

【自分を捨て、自分の十字架を負うて】

ら、立ち上がって私について来て欲しいと言われるのです。それには自分の考えを堅く持っていると従えません。「神様、そんなことを言われても、私はこう思います。世の中の人も皆こうしているのですから、私もそのほうが心強いです」と言う訳です。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」という式でやっていると、何となく安心するかも知れませんが、みな間違っていることもある訳です。

神様に対して自分を捨てることです。人間中心で、神様抜きの考え方にいつまでも馴染んでいると従うことは出来ません。「従ったらよいのだけれども、世の中ともうまくやらねば———（喧嘩をする訳ではないのですが）———どちらともうまくやりたい」と言っても、それは無理です。仕事を止めてしまうとか、世の中と一切縁を切ると言う意味ではありませんが、神様を第一にした上での仕事なり生涯でなければなりません。自分中心を堅く守ったままでは従う事が出来ませんから、それを置いてきなさいと言われます。

もう一つは、「自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と言うことです。ところが自分を見ると、今までがどうにもならなかったし、今も気持がグジグジしていてさっぱり元気が出ない———どうしたものかと思って、人は色々と思い惑う訳です。

しかし幸いなことに、「自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」とおっしゃいます。これは素晴らしいことなのです。「自分の十字架」とは、体がどうかあるとか、家族に事情があるとか、とにかく我慢して忍ばなければならない宿命を十字架と思う人がありますが、そうではありません。私たちにとって、「自分の十字架」とは、私たちが掛かるべき十字架であり、それにイエス様が掛かって下さったから、私たちは許されました。それが「自分の十字架」です。

◆今朝、教えられたのですが、そのような自分の十字架が立てられて、神様が「この故に、お前の罪を許した」とおっしゃって下さいました。その十字架の血は絶えず私たちの上に働いて下さいます。私たちの心は絶えず鈍れたり、汚れたり、倒れたりしますが、神様は絶えず十字架の血で私たちの罪を許し、新しく造り変えて下さいます。そして従うことが出来るように整えて下さるのです。

マラソンの選手などは最小限の衣服しか着けません。私たちが神様から、「従

いなさい」と言われた時に、もしたくさんの重荷を背負って、がんじがらめに罪に絡まれていては従うことが出来ません。「従えばよいということは分かっているのだけれども、私は何と駄目な人間だろう」と思っているのは、そういう状態です。

ところが神様はそれをすっかり断ち切って、新しく造り変えて軽快なパンツを穿かせ、「さあ、走りなさい」と励まし、その上で、「わたしに従ってきなさい」とおっしゃるのですから、これは非常に幸いなことなのです。自分で何もかもしなければならないなら大変ですが、神様が「ついてきなさい。自発的に立って来なさい」「自分を捨てなさい———お前はすでに死んだ人間であり、今は自分で生きているのではない。イエス・キリストによって造り変えられ、生かされている人間なのだ」と私たちを導いて下さるのですから、「はい」と従って行けばよいのです。

◆私たちに対して、「従ってきなさい」と言われるからには、必ず何らかのお手本があって、「さあ、こっちだ、このように———」と教えて下さる訳です。その具体的な形がイエス様のご生涯です。

私たちは（４つの）福音書を読んで、イエス様がなさったこと、おっしゃったことを知ることが出来ます。そのご生涯を一言で語られているのは、ピリピ２章6/8節、「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」です。

「あなたがたはこの模範を見、イエス様の心を心として、同じように従ってきなさい」と言われているのです。

ピリピ２章 1/5節、「そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御霊の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。何事も党派心や虚栄からするのでなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者としなさい。おのおの、自分のことばかりでなく、

他人のことも考えなさい。キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい」

神様を敬うならば、自分については神様が責任を持ち、愛をもって包んで下さるのですから、人と争うことはいらない訳です。キリストと同じ愛の心を持ち、心を合わせ、兄弟姉妹と一つ思いになる――それは神様のお喜びになるところです。人間はどうしても自分のことばかり考えます。出来るだけ公明にしているつもりでも、人の事にはなかなか届くことは出来ず、自分中心になりがちですから、「イエス様の心を心としなさい」と言われます。

イエス様はどうなさったかと言うと、父なる神様に従って、私たちの為に命を捨てて下さいました。その姿――７重の謙遜と言われるものがここに書いてあります。キリストは神の子であり、神の形であられます。子と言うより、むしろ神の本質の真の姿であると言われています。子供の顔が、お父さんの顔立ちを彷彿させるように、私たちはイエス様を見ることによって、神様を知ることが出来ます。子供ですから、父よりも一段劣った何ものかであるように思いますが、むしろ神の本質であられた訳です。ところがその方が

※神と等しくあることを固守すべき事と思われませんでした。

※かえって、自分をむなしくされました。

※僕のかたちをとられました。

※全く人間の姿になられました。

※自らを低くされました。

※死に至るまで（父なる神様に）従順であられました。

※（無実でありながら）十字架の死に至るまで従順であられました。

これは謙遜の極致です。そこまで従い尽くされると、従わせた方は放っておく訳にいきません。神様はイエス様を墓の中から甦らせて、ご自分の右に引上げ、すべての名にまさる名をお与えになりました。それによってイエス様は、今すべてのものの支配者である救主として、私たちの前に、右に左に、あるいは内にも生ける方として臨んでおられる訳です。

◆「そのようなイエス様のご生涯を思い、イエス様と同じ思いを、あなたがた

の間でも互に生かしなさい」と言われるのです。これには色々な解釈があります。たとえば、「キリストにあるこのような態度を、あなたがたの間でも生かしなさい」という解釈もありますし、文語訳では、「キリスト・イエスの心を心とせよ」となっていました。イエス様がそれ程、私たちに対して謙遜に、おのれを捨てて下さって、それによって私たちが生かされている事を思うならば、今度は私たちが多くの人に対して、「党派心や虚栄からではなくて、お互に人を自分よりまさった者として、他人の事も考えてあげなさい」と言われているのです。

その基礎となるものは、神様が私たちのために、ご自分の全部を注いで私たちを生かして下さったことです。ですから、「神様から愛されたように、人々を愛し、また神様から許されたように、人々を許し、神様から取り扱われたように、人々を取り扱ってあげる」というのが模範に従う道です。

◆ピリピ2章 12/13節、「———いっそう従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい———」。救の達成と言っても、私たちがイエス様の心を心として、絶えず従順に聞き従って行くと、神様のほうが私たちを完成して下さいます。それを「自分は長いこと教会に行っているので、これだけ信仰のことが分かった。これでもう卒業してもよいのではないか」と考えるのはとんでもない事であって、「救の達成」は、神様が保証して下さるものでなければなりません。

それに至らせるのは、「あなたがたに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神である」とあるように、全く神様のわざである訳です。神様は私たちのうちに良い願いを起させ、それを実現させるように助けて下さいます。私たちがなすべき事は、絶えず耳を傾けて、「イエス様は私の為にどういう模範を示して下さっただろうか」と聞き従って行くことです。

「従う」とは、非常に幸いなものであって、経験者が体験したことを教えて下さるのですから、その通りに習って行けば、最も速やかに目的地に達することが出来る訳です。私たちが従順に従って行くと、神様が私たちのうちに救を達成し、イエス様に倣う者とし、多くの人を生かす器として完成して下さるのです。自分の保証は当てになりませんが、神様が「よし」とされるならば、私たちのうちに大きな喜びを与えて下さいます。

◆１ペテロ２章 18/25節、朗読。「僕たる者よ。心からのおそれをもって、主人に仕えなさい。善良で寛容な主人だけにでなく、気むずかしい主人にも、そうしなさい。もしだれかが、不当な苦しみを受けても、神を仰いでその苦痛を忍ぶなら、それはよみせられることである。悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたにいっさいをゆだねておられた。さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた」

これはイエス様の模範です。イエス様は無実でした。人々の妬みや不信によって十字架に追いやられましたが、少しも偽りや言い訳をされませんでした。ののしられてもののしり返しませんでした。「なぜこんな事をするか」とも言われません。むしろ「父よ彼らを許したまえ。彼らはそのなすことろを知らざればなりと執り成しておられました。これはイエス様が歯を食いしばって我慢されていたのではありません。「すべてを裁かれる神様が全部知っておられるから、わたしはその方に委ねます」―――という従順です。その信頼に答えて、イエス様は死人の中から甦らされ、父なる神様の右に引き上げられ、すべての名にまさる名を与えられました。

イエス様の従順は、ゲッセマネの園でお祈りをなさった時によく現れています「この苦しみの杯を、もし飲まなくてすむのでしたら、取り除いて頂きたい」と３度繰返し、血の汗が滴るように熱心に祈られました。しかしその最後には、「―――このようにして頂きたいのです。しかしわたしの思いのままを遂げようというのでなく、あなたのみ心のままになさって下さい」と祈られました。そしてその答えは「沈黙」でした。

私たちがお祈りした時に、「沈黙」は立派な答えです。「そのまま行きなさい

という答えです。間もなくユダに導かれた兵士たちが捕らえに来ました。暗闇ですから逃げ隠れようと思えば出来たでしょうが、そうされませんでした。むしろイエス様は、「だれを尋ねているのか」と尋ねられました。「ナザレのイエスを」と言うと、「わたしがそれだ」と前に出られましたから、捕まえに来た人は後ろに倒れて尻餅をついたと書いてあります。そんな態度がどうして出来たのでしょうか。それは神様の御心が十字架に向かって進むことであると確信しておられたからです。

ですから十字架の上で人々の為に執り成しの祈りをされ、有名な７つの言葉を語られました。

隣の犯罪人を救い、弟子たちにあとを託し――決してののしられても、ののしり返すことはされませんでした。そのようにイエス様は従い尽くされましたから、父である神様から天の高みに引上げられました。私たちに「従ってきなさい」と言われる方は、私たちがイエス様と同じように従うと、その通りに引上げて下さるのです。イエス様の心を心とする――自分中心ではなくて、他人のことも考え、自らが救われたように、人々の為にも祈ります。もし必要なら自分の命をささげても惜しくない、という気持でいますと、神様はむざむざと犬死にさせるようなことはなさいません。必ずご自分のわざを行われ、私たちにも大きな誉れを報いて下さいます。

◆ヨハネ13章 12/15節、「こうして彼らの足を洗ってから、上着をつけ、ふたたび席にもどって、彼らに言われた、『わたしがあなたがたにしたことがわかるか。あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである。しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ』」

これは最後の晩餐の席でイエス様が弟子たちの足を洗われた時のことです。イエス様は多くの人々の為に自分の命を与えられました。しかし弟子たちは、「だれが一番偉いか」と言い争っていました。イエス様が間もなくこの世を去ろうと

されている時に、弟子たちが争っているのを御覧になって、イエス様は弟子たちの足を洗われました。弟子たちが、「どうしてこんな事をなさるのですか」とお尋ねすると、「わたしはあなたがに模範を示したのだ。あなたがたは互に足を洗い合うべきである」とおっしゃいました。昔のことですから、裸足あるいは草鞋のようなものを履いて歩いていましたので、足は汚れます。お客さんを持て成す時には、水を用意して足を洗ってあげるということをしました。イエス様はそのようにしてご自分の弟子たちの足を洗われ、手本を示された訳です。

これはイエス様のご生涯全部が、私たちの汚い部分（罪）を洗って下さるものであったことを象徴するものです。

【模範に倣えば同じようにされる】

◆それに対して神様はどういう報いをなさったか。ヨハネ14章 1/3節、朗読。「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」

イエス様は神様から引き上げられました。イエス様が謙遜の限りを尽くして、神様に従われたように、私たちも倣って行くと、イエス様が天の高みに引き上げられたと同じように、私たちも引き上げられます。それは「わたしのおる所にあなたがたもおらせる」と言われている通りです。

ですから、信仰は特別むつかしい事ではないのであって、神様から言われたように「はい」と従うと、その通りになると言うことです。模範を示されたら、その通りに倣って行くと、自分もその通りにされます。数学の公式に、色々な数を当て嵌めると常にその通りに成り立つというようなものです。これは私たちに対する神様のみ心です。

昨年の新年標語に、「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」(2テモテ2:11) とありましたが、イエス様は私たちの模範ですから、彼が死なれた所で私たちも死ぬならば、彼が甦らされた所で私たちも甦らせられ、彼が天に引上げられたように私たちも引上げられるのです。そういう約

束を神様が与えて下さったのです。

◆こんにちイエス様に倣うのはむつかしいことのようですが、実はやさしいのです。その通りにしたらよいのです。なぜそうなのか、そこにどんな意味があるか、むつかしい事をはじめから説明されなくても、やっていると分かってくるのです。

【やるから分かって来る】

私たちがこの世の物事を習う時でもそうだと思います。深い原理原則を聞かなくても、とにかくまず、「これをこっちに持って来て、こうやれ」と見習っているうちに、だんだんそれが分かって来ます。そのうちに新しい技術を自分で工夫するようになります。更に伝統や歴史を知るようになります。広く業界の状況についても通じてくるでしょう。

信仰も理屈ではありません。神様が私たちに、「あなたに呼び掛けているのだから、いま一歩従って欲しい」と求めておられるのですから、まず一歩踏んで行くと、次が出来る訳です。腕組みしていて、ズーッと道が開けたら、「じゃあ行こうか」というものではありません。就職でもそうですが、自分の理想とする職がそこにあって、「さあ、あなた来て下さい」という事はそれほどないでしょう。よほど特殊な技術を持っている人ならともかく、最初は雇うほうも試す訳ですから、わざわざ汚くて苦しいいやな仕事をさせるかも知れません。しかしその中で忍耐していると、認められて新しい仕事を任せられるかも知れません。そのようにして次々に進む訳です。

神様の前でも同じことであって、私たちがまず従順に模範に倣って行くと、神様が次々に道を開いて下さるのです。その結果、私たちはどんな高い所に導かれるか分かりません。

◆ピリピ2章 12/13節にかえる。神様は真実な方でいらっしゃいます。「いっそう従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」とあります。神様は真実な方でいらっしゃいます。やりかけた事を放り出すような方ではありません。先ず私たちのうちに良いわざを始められる、つまり自発的な願いを起させて下さいます。自発と

【始めた方は遂げられる】

いうことはなかなか難しいものであって、全く黙っていれば出来ませんし、かと言って無理をすればかえって反発しますから、最初にちょっと切っ掛けを与えて招く、あるいは「このようにしなさい」と勧める———そうしているうちに、自分から「よし、やろう」と言う気持になって来ます。すると集中するようになります。

神様はすぐれた教育者のように、私たちの中からやる気を引き出して下さる———そして私たちが従順に従うと、神様が引き上げ、完成して下さるのです。

ピリピ１章６節に、「そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している」とあります。これも神様の真実です。良いわざを始められたかたが、必ずそれを完成される———「お前のような人間は、どうしようもないから、もうやめた」ということは決してないのであって、駄目な者であることを承知の上でそれを引上げて、神様らしいことを行われるのが、神様のみ心であります。人間の世界では、良いものを選んで磨きをかけ、「こんなものが出来た」というのが常ですが、神様はそうではありません。むしろ無きに等しい者、駄目な者、小さい者、弱い者を選んで引上げ、「なるほどこれはあの人のやったことではない。神様がやられたのだ」と襟を正すような事をなさるのです。

◆今年、私たちは神様に従いたいとの願いを起して頂きました。いま私たちはいっそう従順でいて、主のお声に従います。すると、死人のうちから甦られたイエス様は、いま神様の右にあって、祈りに答えて私たちを導き、完成して下さいます。聖書を読んで、「どうしたらよろしいでしょうか」と祈って行くと、確かに教えて下さるのです。これは嘘ではありません。気の持ちようでもありません実際にそうなるのです。

私たちが罪を犯して、神様から責められた時もそのようでした。良心を通して働いて下さるので、どうしても心が晴れません。いつもチクチクと痛んで、何とも言えない気持がします。教会に行っても、どうも皆さんの顔を見ることが出来ないという事になります。それは間違いなく神様が指差しておられるからです。

それと同じように、神様が私たちのうちにご自分のみ心を教え、「そうだ、そ

れで良い！」と教えて下さる時には、確かに分かるのです。神様は大きな喜びを与えて下さいます。そこを従順に従って行くと、神様の救が達成されるのです。「よろしい」とは、神様が保証して下さることであり、その人を神様がお用いになるのです。

自分の良い所を見せて、「私を見なさい。あなたも教会に行きなさい」と言っても、人は案外違ったところを見ているかも知れないので、これでは駄目です。

しかし神様が「よし」とされて、神様がお用いになる時には、誰も知らないと思う所でコツコツやってきた事を、後ろから見て、「なるほどあの人は違う。私も教会に行きたい。連れて行ってほしい」ということになるかも知れないのです。神様が救を達成される時にはそのような事が行われるのです。

ご熱心をもって私たちのために一切を尽くして下さった方は、自分の足跡に倣ってほしいと願っておられます。むつかしいことをしなくても、ただ従順に従いさえすれば、神様のほうが完成して下さって、左の標語

※「受けるよりは与えるほうが、さいわいである」という生涯に導いて下さるのです。私たちはかつて自分自身を持て余すような者でしたが、神様に救われると、自分が救われるだけではなく、多くの人々に救を与えるような生涯になります。「完成」とはそういうものです。

◆神様は今日、「いっそう従順でいて、救の達成に努めなさい」とおっしゃいます。この方のお声に従順に従って、神様から新しいことを行って頂く者でありたいと思います。自分の努力は限界があります。何をどのようにやって行ったらよいのか、なかなか分からない時代ですが、神様の基準ははっきりしており、世のすべてを越えたものです。しかし世間離れしたものでもありません。古臭いものでもありません。すべてのものの上にある神様の真理は、すべての人が結局ここに立ち返るべきものです。

いま、世界は激しく変動して、右に左にと動いています。ある人は90年代に希望が持てると言い、ある人は持てないと言います。ただ変動するだけではいくら繰返しても同じことで、そこに本当の幸いはありません。人間とはそのようにいつまでも振り続けるものかも知れませんが、私は左右の振りではなくて、上下に

振ることが必要であると思いました。人間中心、あるいは神様抜きの生涯から、神様に向かって、「私のためにこんなに尽くして下さった方があるのだから、私もまた尽くしていきたい」と上に向かって姿勢を切り換えると、人間が新しくなります。

◆私たちは先に選ばれて、神様の偉大な真理に従わせて頂いていたのですから世のすべての人が、「やはり神様に従わなければ駄目だ」と立ち返るように、祈りをもって助けてあげられたら、どんなに素晴らしいでしょうか。

「わたしは駄目な人間です」とか、「わたしのような者は———」と言うことは神様の前には通用しないのです。神様が私たちを用いようとして、「あなた！と呼ばれたら、遠慮することはかえって失礼でしょう。「自分のことを棚に上げる」とは悪い意味ですが、神様が「こうだ」と言われた時には、自分のことは、どんなに言いたくても棚に上げておかなければなりません。そして、「神様、わたしですか！」と従って行く、すると神様は、「よし、お前の罪も汚れも全部十字架によって処分して、新しいものと造り替えた。今からわたしに従ってきなさい。これが人間の道である」と私たちを完成して下さいます。これは最も素晴らしい道です。

ですから神様に従うならば、90年代も21世紀も暗くはないのです。神様を抜きにして、人間の様々な争いや我が儘勝手をやっていく事を考えますと、暗くなり望みがありません。私たちはこのような時代にあって、多くの人に模範を示す者として下さるのですから、素晴らしいことではありませんか。

ピリピ２章 12/13節、朗読。「わたしの愛する者たちよ。そういうわけだからあなたがたがいつも従順であったように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いない今は、いっそう従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」

神様の「よし」とされる所をこの身に行って頂く者になりたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。　　　　　　　　（1990.1.2.14:00　聖会５）

第６回〈1990年1月2日、午後7時〉

十字架の前でどこに立つか

（聖書＝イザヤ書第４５章２２節）

【簡単だから低級とは言えない】　８７
【人間は謙虚にならねばならない】　８７
【慈愛に満ちたすみか】　８８
【神様のわざを真似ようとすれば】　８９
【物があって動いているということは】　９０
【尋ねるなら私を開く】　９０
【義なる神、救主】　９１
【十字架の現場でどこに立つか】　９２
【十字架を負うと従う事がやさしくなる】　９４
【従順になると神様に用いられる】　９４
【勇士の手に握られたろばの顎骨】　９５
【十字架の言は神の力】　９６
【主権者の約束を待つ】　９７
【不撓不屈、まことの富豪】　９８
【救は溢れ流れて行く】　９８

「地の果なるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。わたしは神であって、ほかに神はないからだ」（イザヤ45:22）

◆これは非常に簡単・明瞭な救の法則です。「わたしのほかに神はない」、「わたしを仰ぎ望めば救われる」―――あまり簡単なものですから、ある人はこの世の偶像に頭を下げるのと同じように思います。「キリスト教とはもう少し上等かと思っていたが、そんなことなのか。おまじないとちっとも変らないじゃないか」と思う方があります。しかし簡単ということは、低級であることとは違います。

【簡単だから低級とは言えない】

自動車などにしてもそうです。簡単に動かす事が出来るように工夫されていますから、構造の詳しいことは知らなくても運転が出来ますし、どんな違った車種であっても、すぐに動かす事ができます。それでは自動車は玩具のような大したものではないかと言うと、逆であって、非常に素晴らしいものであるからこそ、使いやすく安全なように設計されているのです。

アメリカのあるコンピューター（ソフト）は、なかなか操作が簡単で、極限まで使う人の身になって設計がなされていると言われますが、神様の救は、コンピューターや自動車どころではありません。私たちの生涯をすっかり新しく造り替えてしまうものです。腐れ果ててどうする事も出来なかった者を、神の子と変え、栄光の姿にかたどらせて―――神様はそんな驚いたことをなさる方です。それも決してむつかしいこと―――熱心・努力、修養・鍛練をして、高いお金を払い、あるいは長い講習を受けてやっと出来るというものではありません。

ここに、「地の果なるもろもろの人」とあるように、どんな地の果の、どんな極端な状態の者であっても、神様から救われる為に多くのことを必要としません。まことの神様がお立てになったイエス・キリストの十字架を、仰ぎ望んで信じさえすれば、瞬間に変えられるのです。

【人間は謙虚にならねばならない】

◆私たちは人間の作った都会に住んで、毎日狭い小さな範囲で生活をしていますと、それがあたかも全部であるかのように考え違いをしやすいのですが、私たちはもっと神様の偉大さを知らなければならなず、従ってもっと謙虚にならなければならないと思います。

イザヤ書には、神様の偉大さについて各所に書いてありますが、ただいま読みました18節からもその事が書いてあります。18節、「天を創造された主、すなわち神であって、また地をも造り成し、これを堅くし、いたずらにこれを創造されず、これを人のすみかに造られた主」―――まことに偉大な話です。

日常生活の中で、こんな事を話題にしますと、「あの人は夢みたいなことを言って、少しおかしくなったのじゃないか」などと言われるかも知れませんが、神様の偉大さは、人間の思いから全く掛け離れたものです。

「天を創造された主」―――天というと、まことに広くて掴みどころがないようです。望遠鏡を覗いて見ると、天体がたくさん見えます。何千という星が見えますが、ごく近い所の星しか見えていないのであって、見えない所にはたくさんの星があります。

我々の太陽系では、太陽を中心に幾つかの惑星が、太陽の回りをまわっています。太陽は私たちから随分遠く、我々に比べて非常に大きいと思いますが、私たちの所属する銀河の中には、太陽と同じかそれ以上の恒星（自ら発光している天体）が２千億ぐらいあります。しかもそのような銀河は群れをなして何億、何十億あるか分からない。その果は 150億光年と言われますが、その先は無いのでなくて、分からないだけです。しかも宇宙は絶えず膨脹を続けていると言われますから、人間の頭ではとてもそれを考え尽くす事はできません。しかし神様はその全部をお造りになった方であります。

これはまるでおとぎ話のようでありますが、最近の天文学の知識によると、大きい方に向かっても、小さい方に向かっても、ある所以上は考える事がどうしても出来ない―――それ以上は神様がお造りになったとしか言えないのであります

私たちは現在、確かにこの地球の上に住んでいますが、神様はこの広い宇宙の中で、これを私たちの住居として特別なものに造って下さいました。決して偶然に出来たものではないと言われるのです。

◆かつて月の表面に下り立った宇宙飛行士たちが、月平線から昇る地球を見て「地球とは、何と慈愛に満ちた我々の住居であろうか。我々人類が広い宇宙の中でただ一つ住むことが出来る所である。神様は確かに人間のためにこれを創造さ

れたと分かった。神様がすぐ目の前に立っておられるように感じた」と報告しました。

（月と地球の大きさの比較その他について———省略）

宇宙飛行士のように特殊な体験をすると、驚いて神様の事を感じますが、毎日その中に置かれている私たちはそれに馴れてしまって、真実が見えなくなっている———そういう状況ではないでしょうか。

ですから、「あなたがたは、わたしがそういう偉大なものであることを忘れないで仰ぎ見なさい」とおっしゃっているのです。そして「わたしは主である。わたしのほかに神はない」と繰返し宣言しておられます。

◆ 1,2日前の事だったと思います。テレビの特集番組で、「人体の肝臓機能」というものを見ました。80万倍の電子顕微鏡写真と、コンピューターグラフィックによって、肝臓の働きを解説していました。人体の中で最も大きな臓器であって、重量にして１キロ半ぐらいあると言われます。動物や鳥のレバーと同じような茶色の臓器です。しかしその何の変哲もないように見える臓器が、実は物凄い働きをしていると言うことでした。

一つの肝臓が 100日働くほどの仕事を、もし人工的に行おうとすれば、どれくらいの工場を作ったらよいかと、ある人々が設計してみたそうです。

工場本体のほかにその10倍ほどもある付帯設備を作らなければなりませんから、工場敷地が 300平方㌔㍍ぐらいになったと言います。パイプラインが縦横に走り、奇妙な形の塔がたくさん建っている、あの化学工場が50㌔㍍四方に建つのですから大変なものです。

ところが、機能としては真似ることが出来ても、実際にその工場を動かす事は出来ないと言う話でした。なぜならば、どこにも捨てられない3000㌧の廃棄物が出来てしまうということです。

本来の肝臓はどうしているだろうかと調べて見ると、廃棄物を処理する仕組みがあって、その物質を化学的に処理して胆臓に送り、胆汁として十二指腸に分泌して消化を助けていると言うことでした。例の真っ黒い液体です。まことに人間の肝臓とは驚異的なものであります。

人間の体内には、まだまだたくさんの臓器があり、それらがみなこのような物凄い機能をもって働いています。しかも単独ではなく、お互に情報を交換しながら総合コントロールがされている訳です。肝臓は一部を切り取ってもかなり早く再生するそうです。実に驚いたことです。

そのような事を一つ見ても、神様が人の為に地球を造り、万物を造り、人間を造り、命を保って下さっている―――私たちは生まれれば生きているのが当り前と思い、平均寿命が何年だから、あと何年間は大丈夫だろうなどと簡単に考えますが、一口の食物が体に取り込まれるという簡単に見える事の為に、どれほど驚いたことが行われているか分かりません。「生物の体はそんなふうになっているものさ」などと言うことは決して出来ないと思います。

【物があって動いているということは】

◆この部屋の天井裏には数十級はありそうな冷暖房機が埋め込まれています。これを設置する為には、若松の暖房機屋さんが来て、本体を天井裏の梁に吊って配線をし配管をし、コントローラーをつけて、大変な工事をした訳です。それが完備していますから、私たちはスイッチを入れて簡単に使う事が出来る訳です。

ただ機械をここに置けばひとりでに動くというものではありません。機械そのものも、技術者が頭を捻って設計をした結果です。ですから、いま天井から暖かい風が出ているという事は、それ程の人間の意志が働き、知恵、力が用いられて原料が使われ、仕組みが考えられ、エネルギーが供給されているということです

まして私たちのこの驚くべき体が、ひとりでに動くという事があろう筈がありません。神様の明確な御意志とお支えがあるからこそ、私たちは今こうして保たれている訳です。

【尋ねるなら私を開く】

◆19節、「わたしは隠れたところ、地の暗い所で語らず」とあります。「神様なんて、居ると思えば居るが、無いと思えば無い」などと言う人がありますが、とんでもないことです。私たちの体一つ考えて見ても「隠れた神」どころか、「あらわな神」が、物凄いことをして下さっている―――決して否定することは出来ません。

ですから神様は私たちに対して、「わたしを尋ねるのは無駄だと言わない」と言われます。「私をもし尋ね求めるならば、決して隠れたり逃げたりしない」―

ーーあまり何もかも人間に打明けたら、権威がなくなるなどとはおっしゃいません。「わたしは正しいことを語り、真っ直ぐなことを告げる」ーーー「私はことごとく自分を開くから求めなさい」と言われているのです。

◆こういう事を読むだけでも、神様の偉大さ、また私たちに対してどれ程関心を持って下さっているかが分かります。春になると蟻が動き始めますが、私たちは蟻のことなど考えないで歩きますから、知らない間に蟻を潰してしまうかも知れません。それと同じように、私たちは神様からどれほど踏み潰されても仕方がないのですが、神様は私たち小さい者、弱い者、駄目な者を顧みて、一つも見過ごしにされる事がありません。だからこうして生きていられるのです。

私は夜中にフト目覚めた時、心臓に手を当てて非常に厳かな気持が致します。「ああ、神様は私を憐れんで、いま保って下さっている。だから私は生きることが出来る」と感謝します。神様が、「こんな駄目な人間は、時々は心臓を動かさないでよかろう」と言われたら、誰も生きていることは出来ません。「神様なんかあるものか。人間は生れたから生きているのは当り前だ」と言う人の心臓をも、神様は憐れんで動かしていらっしゃるのですから、大変寛容な方であります。

人間は誰かから 2,3回いやなことを言われると、「もう、あんな奴のことは知らない」と放り出してしまいますが、神様は決してそうされません。かえって懇ろに語って下さるのです。

20/21節、「木像をにない、救うことのできない神に祈る者は無知である。あなたがたの言い分を持ってきて述べよ。また共に相談せよ。この事をだれがいにしえから示したのか。だれが昔から告げたのか。わたし、すなわち主ではなかったか。わたしのほかに神はない。わたしは義なる神、救主であって、わたしのほかに神はない」ーーー木片で神様を造って拝み、「これがわたしの神様だ」などと言っている人を、「馬鹿者！」と捨ててしまうのではなくて、「私の所にきなさい。お前の言い分を持って来て述べてごらん。そんなものを信ずると言うなら、話してごらん」と言われます。神様はそんなにして私たちに耳を傾けて下さる方です。

しかしご自分があくまでも造り主であり、神であることは、旧約聖書の始めか

ら、預言者を通し、あるいは様々な出来事を通して、語り続けておられます。一面は「義なる神」であり、もう一面は「愛の神、救主」であります。

人間は神様と言うと、恐ろしい方と思います。ちょっと悪いことをしたら、「こら！」とバチを当てるのが神様と思います。またこれとは逆に、ある人々は「キリスト教の神様は、愛の神様だから、少しぐらいは大目に見てくれてもいいじゃないか」と言いますが、それも間違いです。

まことの神様はその両面を持った方でいらっしゃいます。一面において「義なる神」であり、もう一面において「愛なる神」であって、その両立の為に、ご自分のひとり子イエス・キリストを十字架につけ、一面において、「罪を決して見過しにしない神」であることをあらわし、一面において、私たちを愛してその罪を許す為に、イエス・キリストを十字架に付けて下さいました。

ですから、罪が許され、私たちの人生が新しくされるという驚くべき事が、ただ仰ぎ見るだけで成し遂げられるのです。自動車メーカーの大変な苦労によってアクセルを踏むだけで自動車は走ります。それと同じように、神様の大きな力と知恵と、痛み―――ひとり子を十字架につけて、私たちの為に処刑して下さると言う痛みがあるから、私たちは「はい」と信ずれば罪が許され、人生が新しくされるのです。それが神様のお約束です。

22節、「地の果なるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。わたしは神であって、ほかに神はないからだ」―――神様はこのようにして私たちのすべての罪を許すと約束して下さいました。

◆十字架の現場について読みましょう。ルカ23章 26/49節、朗読。これはイエス様が十字架に引かれて行く所、またサレコウベと呼ばれる丘の上で、3本の十字架の真ん中におかかりになった、その時の記事です。ここにたくさんの人が登場しております。まわりで見ている人々、民衆、役人たち、兵卒ども（死刑執行隊長、及びその部下）、十字架の上には真ん中にイエス様、両側に犯罪人、そのほかに群衆、ガリラヤから従って来た女たち、イエス様を前から知っていた者、など色々な人がおります。

こんにち神様が、「わたしは十字架を立てた。この十字架をいかに見るか、仰

ぎのぞめ」とおっしゃっているのは、私たちがこの現場に立たされているようなものではないかと思います。遠巻きにして、「私とは関係がないが、まあ、聞いてみようか」と言うぐらいの聞き方もあるかも知れません。あるいは、直接イエス様に手をかけて、釘を打ち込もうという兵隊のような人、横で同じ十字架にかけられながら、イエス様を罵っている人、別の一人は、「イエス様、どうぞ、御国にいらっしゃった時に私を覚えて下さい」と言って救われました。あるいは遠くからやって来た女たちなど、色々な人がいます。

もう一人隠れた人がいます。それはイエス様が真ん中の十字架にかけられた事によって、そこに掛かることに決まっていた最大の罪人、バラバです。彼は許され、放免されました。これも隠れた登場者です。私たちは一体、どこにいるのだろうか、どのように十字架を見ているのだろうかと教えられたのです。

私は特に隠れた登場者であるバラバの立場を思うのです。彼は真ん中の十字架に掛けられる筈でした。しかし、そこを見ると罪の無い人が掛かっている――「私が許されてあの人が掛かった！」とバラバは見ていたのではないでしょうか。

私たちがその通りです。神様から、もし行いにふさわしい刑罰を受けるならば、どのようにされるべきでしょうか。私たちは神様の前に多くの罪を犯し、失敗を重ねて来たかも知れません。従うべき時に従わないで退いたために、捨てられるべきであったかも知れません。ごみ箱に捨てられてどこかに持って行かれて、焼かれてそれっきりになっても仕方がなかったでしょう。しかし、そんな私が無条件で許されて、その場所に神の子が十字架につけられ、両手両足を釘で打ち抜かれて血を流し、肉体が裂けている――その現場を見て私たちはどうすべきか、ということです。

私はここに立たされて、冷ややかに見ている訳にはいきません。ある人は、「あれは何か悪い事をしたから（十字架に）つけられたのだろう」と言います。しかしそうではありません。罪のない方が罪人、それも極悪罪人のために十字架にかかって、「父よ、彼らをお許し下さい。彼らは何をしているか分からずにいるのです――すべてを裁かれるその日に、彼らが神様の前に滅びる事がないように、どうぞ、悔い改めさせて下さい」と執り成されたのです。

私たちがこんにちあるのは、イエス様が十字架にかかって死んで下さったからである、と気付くならば、それを受け入れなさいとおっしゃいます。「はい、分かりました」と受け入れればその通りにして下さる———これは神様のなさることです。

【十字架を負うと従う事がやさしくなる】

◆マタイ16章に、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」とありました。「自分の十字架」とは、「自分は大体こんな体に生れ付いたから、一生我慢しなければならない」とか、「私にはこんな子供が生れたから、この子の為に一生我慢しなければならない」とか、こういうものが自分の十字架ではありません。

「自分の十字架」を考える前に、先ず自分自身が神様の前にどういう者であったか———罪の為に神様から永遠の刑罰を受けるべき者であり、不真実でしばしば背いた者でした。しかしそんな私のためにイエス様が十字架にかかって下さったから、私はいま生かされているのです。だから、「自分の十字架」とは、私のかかるべき十字架にイエス様がかかって下さっている———あの十字架です。神の子が十字架にかかって下さって、私たちが救われたのですから、「イエス様が私のかかるべき十字架にかかって下さって有り難うございます」といつもそれを肩に負い、心にとめて仰ぐ———それが「十字架を負う生涯」です。

そうすると、「わたしに従ってきなさい」と言われて従うのが、大変やさしくなります。自分が生きていて、「俺はそんなにたやすく神様の言う事なんか聞かないぞ。聖書なんて現実の世から遊離したようなものだ。そうそう従うことは出来ない」と言うから、なかなか従えないのです。ところが、「俺が俺が」と言うその「俺」は、すでに十字架に掛けられたのであって、イエス様によって生かされているのです。その事が分かると、生かして下さる方に従えるようになります。

【従順になると神様に用いられる】

◆諺に「水は方円の器に従う」とあります。本来の意味は、「水は四角の器に入れても、丸い器に入れても、形の通りになる」、つまり「人は誰かの影響を受けると、良くも悪くもなる」という意味でしょう。しかし私が思いますのは、「俺が生きているんだ」と言う人は方円の器に従えません。四角のものが丸い器に入っても突っ張っているから納まりません。

しかしゴツゴツした岩が潰れて細かい砂になると器の形に従えます。そのように、私たちが「神様から生かされている者です」と認めると従順になって、神様の置かれる所に素直に従って行くことが出来ます。たとえ丸い所に置かれても、「四角でなくてはいやだ」と言わなくなります。丸くても四角でも、どんな所であっても、（我慢するのではなく）喜んで仕えて行く生涯になります。

すると、神様がその人を用いることが出来るようになります。人間が何かを使う時には、自分の自由になるものでないと使うことは出来ません。自分がこうしようと思っても、道具が勝手に反対に突っ張るならば、「こんなものは使えない」とやめてしまうでしょう。

同じように、私たちの己が生きていて、「そんなこと――私は正しい人間ですから、イエス様のお世話にはなりません。許して貰わなくても、私は罪なんか犯したことはありません」とか、「俺が神様だから、俺を拝んでおけ」などと言っていると、神様は「これは手に負えないから、使うのをやめておこう」と用いられなくなります。逆に素直に主人に従う道具は愛用されます。叩くでも、切るでも、押すでも、とにかく色々の仕事に使うことが出来るから、大きな働きができます。

【勇士の手に握られたろばの顎骨】

◆士師記15章 14/17節、朗読。15節に、「彼はろばの新しいあご骨一つを見つけたので、手を伸べて取り、それをもって１千人を打ち殺した」とあります。これは大変な力持ちであった士師サムソンの記事です。サムソンはある時、自分を憎むペリシテ人から引き渡しを求められ、味方の手によって縛られました。いよいよ引き渡しの段階になって、ペリシテ人が声を上げて近付いて来たとき、彼が「ウーン」と力むと、綱がボロボロに切れてしまいました。火に焼けた亜麻糸のようでした。彼は手が自由になったので、足元に落ちていたろばの顎骨――ろばは馬よりも小さなものですから、その下顎骨も小さなものですが――を拾ってペリシテ人をガツガツと叩いて殺しました。そうして千人を打ち殺し、山また山を築くように大勝利をおさめました。

人を殺すことは悪いことと思われますが、聖書の記述は私たちに対する霊的な戦いの象徴であって、私たちが小さな顎骨のような存在であっても、神様から用

いられると、どんな大きな働きが出来るかという譬です。私たちが「俺は神様の言うことなんか、そうやすやすと聞かないぞ」と突っ張っていると、神様は用いることが出来ませんが、もし小さな弱いろばの顎骨であっても、従順になって用いられると大変な働きをする訳です。

ですから「自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」とおっしゃいます。「私は神様によって生かされている存在です」という従順な態度であれば、神様はそれを用いて素晴らしいことを行って下さいます。どうにもならなかった者が、「やっと救われました」というのも感謝ですが、神様はただそれだけではありません。「こんな者」と思っていた者を用いて、素晴らしいことをなさるのです。悪魔に引っ張られ、とじこめられている人を、その手から解放して下さるのです。

◆イザヤ45章にかえる。22節、「地の果なるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる」―――これは救の大原則です。非常に簡単ですが最も重要な原則です。新約聖書に登場する聖徒パウロの書簡を読んで見ますと、「わたしが最も大切なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであって、それはイエス・キリストがわたしたちのために十字架にかかって死んでよみがえって下さったということだ」と言っています。彼はあまりに同じ事ばかり言うので、「パウロは馬鹿の一つ覚えのように、あんなことばかり言っている」と言われても、パウロは「いや、これがかなめである。これが一番大事なことである」と彼は伝え続けました。

１コリントの手紙にも、「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である」と書いてあります。

ガラテヤの教会に対して、「十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか―――この一つの事を、忘れては駄目だ」と激しく叱られています。

コロサイの手紙には、「キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている―――十字架にかかったキリストこそは、わたしたちの救の源である」と言われています。これはみな、ここから来ている訳です。

◆「地の果なるもろもろの人」とありますから、どんな人であっても、今の今まで罪を犯して神様の前に汚れ果てた人であったとしても、イエス・キリストの十字架はスカッと清めて余りがあります。「そのようなことを行う神は、ほかにない。わたしだけである」と言われています。

「世の中にたくさんの宗教があるが、あれもこれも駄目、これだけが正しい」と言う意味ではありません。人間が考えた安心・立命とか、もろもろの神々は、彼らが「神とはこういう方ではなかろうか」と模索しているものであって、その実態である方はただお一人であります。

家の主人は一人であり、人間の頭は一つであり、国に政府は一つであります。ですから、まことのかしらはお一人だけです。神様はすべてのものの造り主であって、人間が宗教を造ったのではありません。神様はすべてのものの始めにおられた方であって、すべてのものをお造りになった方です。そういう方が私たちのために、救の道を立てて下さったのですから、私たちは最早ツベコベと考える余地はありません。「そんなことをして下さったのですか！有り難うございます！」と神様を仰ぎ望むならば、私たちの生涯は今ここで新しくされて、神様に仕えることが出来るようになります。

先刻、一人の兄弟が訪問して来ましたので、色々と話しをしました。彼は「長いこと神様を離れているとどうしても世の中の知識が妨げて、神様のことがおとぎ話のように思えて来ます。これはいけませんでした」と気が付いたということでした。

長いあいだ離れようと、不真実であろうと、神様は「そんな人は救わない」と言われません。そんな人であればある程、神様は新しいことをしてご自分の力を現される方です。ですから、私たちは決して失望したり、投げ出したりしてはならないと思います。問題は最後であって、私たちが神様の前に立ったその時に、「善かつ忠なる僕」と受け入れられれば、それが勝利です。「若い頃は一生懸命に教会に行っていました———今は行っていません」ということでは大変です。

私たちは今は駄目であっても、大丈夫、今までのことを離れてこの神様を仰ぎ見るならば、今晩ここから救われて従う事が出来ます。あるいは、「受けるより

は与えるほうが、さいわいである」との豊かに注ぐ生涯に入れて下さるのです。これは実に素晴らしいことです。

【不撓不屈、まことの富豪】

◆この世で、土地成金の人が何十億円、何百億円を手にしたとか、何千億円のホテルを買った、ビルを買ったと言いますが、たくさん持っていればいるほど汚くなると言います。「このお金を運用して、もっとふやそう」とそういう方向には働きますが、神様の祝福を人に与え、神様から報われることは、決して真似が出来ません。

しかし、私たちは乏しかろうと、貧しかろうと、神様が豊かにして下さるのですから、土地成金などは問題ではありません。神様は天地の創造者であって、私たちを満たして溢れさせて下さる方です。「父よ、彼らをゆるしたまえ」と神様の恵みをいっぱいに注いで行く素晴らしい生涯です。

「クリスチャンとは弱々しくて優しくて力がないものだろう」とある人々はイメージしていますが、決してそうではありません。クリスチャンは非常にしぶといものです。「倒されても滅びない。四方から患難を受けても窮しない。何も持っていないようで、すべてのものを持っている。貧しいようであってもすべての人を富ませる」と聖徒パウロは言っています。神様は私たちをそのように変えて下さるのです。

【救は溢れ流れて行く】

◆今年、神様はここまで私たちを導いて下さいました。更に残された３日間の集会があります。これらの集会を通して、この素晴らしい生涯に導いて頂きたいと願います。これはこの１年限りのことだけではなくて、一生涯のことであります。私たちが従って行くと、溢れ流れて、「受けるよりは与えて行く」のですから、自分自身だけでなく何百人、何千人の救にかかわる事になるかも知れません

昔から世界に伝道した多くの人がいますが、その生い立ち、あるいは若い時の状態を聞いて見ると、どうしようもない心貧しい惨めな人間でした。しかしその人が救われて神様からの恵みが溢れる人に変えられ、偉大な働きをしました。

そのように、神様は今私たちをお用いになろうとしていらっしゃるかも知れません。更に今の時代だけではなく、のちの時代――どんな時代が来るか分からないと思いますが、神様によって信仰を持つと、ずっとのちの時代まで祝福を及

ぼす事が出来るのです。

アブラハムやモーセなど、色々な先輩がありますが、そういう人たちは大きな射程で信仰を持って、今の時代にまで神様の祝福を祈ってくれたから、私たちは今ここにある事が出来るのです。ですから、私たちが今度はここで信仰を持って溢れ流れ与えて行くならば、神様は私たちを通して、彼らの上に大きな事をなさるのです。

先日、ある所で、6千年以上経過してから開く事を期待してタイムカプセルを埋めるという話がありました。神様は私たちに向かって、「あなた一人によって、多くの民が祝福を受ける」と言われます。「多く」とは、今の時代に広がる人々だけではなくて、のちの時代の人々まで祝福を与えると言われるのです。今、神様に従って、今、手をあげて祈って行くならば、神様はそういう事をなさって下さいます。

私たちは今日まで色々な問題を持っていたかも知れませんが、神様の恵みのお言葉によってみな吹き飛んでしまいました。今晩、「地の果なるもろもろの人よ」と言われます。色々な所にいて、色々な問題を抱えていた私たちでしたが、ズバリひとこと、「わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる！」とおっしゃいます。この素晴らしい、神の子の十字架によってあがなわれた恵みのおとずれを聞き、従って行く者でありたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1990.1.2.19:00　聖会6)

第７回〈１９９０年1月3日、午前１０時〉

選　択　と　報　い

（聖書＝マタイによる福音書第１６章２４節）

【主に従う道とは？】　１０３

【選択すると堅くされる】　１０４

【聖徒たちの望んだ報い】　１０５

【栄光の報いを望むと今が変る】　１０８

【報いの受け方について】　１１０

【寡欲は大損失】　１１２

【己が日を数える知恵の心】　１１２

【命の代価は払いきれない】　１１３

【踏み出すと助けて下さる】　１１４

「それからイエスは弟子たちに言われた、『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう』」（マタイ16:24/25）

◆弟子たちはピリポ・カイザリヤ地方で、「あなたがたはわたしをだれと言うか」とイエス様から問われ、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」という信仰告白をしました。その時に主は、「その信仰の上にわたしの教会を建てよう」「その信仰を持つ者に対して天国の鍵を授けよう」とおっしゃいました。つまり、ペテロは大変ほめられた訳です。個人がほめられたと言うよりも、神様がこんな者にも奥義を現して下さったと言う大きな恵みの事件であった訳です。

弟子の信仰がそこに至ったので、イエス様は次の段階をお示しになりました。弟子たちが告白した「生ける神の子キリスト」が、具体的にどういう形で救を与えて下さるものか、イエス様はどういう生涯を歩まれるのかをはっきりお話しになりました。イエス様もそれを決断された訳です。

「エルサレムにおいて長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、やがて殺され、そして三日目に甦る」とお話しになったところが、ペテロが、「先生、とんでもない。そんな事があっては困ります。私たちの愛する先生が殺されるなんて、そんなこと———私たちはどうしますか」ととどめた訳です。

すると、先程まで大変ほめられていたペテロに対して、たちまち、「サタンよ、引きさがれ———」と退けられました。「あなたは神様のことを思わないで、人間の事ばかり思っている。自分の小さな感情や、好き嫌い、困る、悲しいなどと考えているから、わたしの邪魔をする者である。わたしはあくまで神様のみ心に従って使命を果たす者である」と退けられました。

一転してそのように言われたものですから、弟子たちも戸惑ったことでしょう。そこに11人の弟子がいる訳で、他の弟子たちも、「これは一体どうしたことだろうか。イエス様に従うとはどうすることだろうか」と考えたに違いないのです。

イエス様はその心を見て、弟子たちに向かって、「従うべき道はどんなものであるか」をお教えになりました。それが24節、「わたしについてきたいと思うな

ら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」です。

◆これは今年の中央の標語です。私はこれを読んで、神様から選択を迫られていると思いました。

人間の生活は、みな選びの連続ではないかと思います。たとえば、教会に入って来て、「どこに座ろうか」と考えられることもあるでしょう。あるいは「どんな筆記具で、どのようにして書こうか」「どちらのページから書こうか」「どこから書こうか」「何を書こうか」など色々あると思います。お話を聞いて全文筆記する訳ではないのですから、「自分の頭に閃いた事だけ書こう」とか、「これは書かなくてもよい。前のページに書いたから」というようなことです。とにかく絶えず選択をします。

家庭生活でも、食事を何にしようか、何時頃にしようか、どの器で食べようか———などと選択をします。政治の世界でもそうであって、間もなく国政について国民が選択をする時が来ます。これも大きな選択でしょう。

神様は今年、私たちに対して、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なる神を愛せよ」と求められましたが、その前に神様は、私たちが東も西も分からない時に、尊いみ心に従って神の子を十字架につけて下さいました。その燃えるようなご熱心を私たちに注がれた上で、「さて、あなたがたはこれに対して、どう選択するのか」と言われている訳です。

※「だれでもわたしについてきたいと思うなら———そう思うのか、思わないのか」、これが第１の選択です。

※第２は、「自分を捨て」です。「捨てるのか、捨てないのか」これがまたひとつの選択です。

※次に「自分の十字架を負うて」です———「負うのか、負わないのか」

※「わたしに従ってきなさい」———「イエス様に従うのか、それともほかの誰かに従うのか」これもそうです。

※「もし自分の命を救おうと思うならば、それを失う」とあり、逆に「わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだす」とあります。これも大きな選択の機会です。

それに対して私たちがいかにお答えして行くかが問われています。申命記30章では、「わたしは命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならない」と言われています。それは神様の律法に対して、人がどう答えるのかが問われています。「こうしたら、こうなる。ああしたら、ああなる」と細かいことがあるかも知れませんが、基本的に神様第1を選ぶのか、それとも他のものを第1とするのかです。神様第1と言っても、「私はこれから離れられません。神様が第1だがこれも大事」と言うこともあります。「これも」と言う時は、そっちの方が重いのです。神様は、一体どちらを選ぶのか、イスラエルの民に問われました。この問いは私たちにも問われているものです。「わたしはただあなたがたとだけ、この契約と誓いとを結ぶのではない。きょう、ここで、われわれの神、主の前にわれわれと共に立っている者ならびに、きょう、ここにわれわれと共にいない者とも結ぶのである」(申命記29:14/15)と言われています。

先ず神様が大きな熱情を持って私たちに目をとめ、選んで下さったのですから、私たちはいかにお答えするかを選択しなければなりません。「有り難うございます」とお答えすると、神様はその選びと召しとを堅くして下さいます。これが神様のお取扱いであると教えられました。

◆ヘブル人への手紙には様々の大きな報いが記されていますので読んでみたいと思います。

ヘブル10章 35/39節、朗読。「だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。『もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。わが義人は信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない』。しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である」とあります。

これは私たちが神様から最も喜ばれる生き方、つまり「義人は信仰によって生きる」という原則に従う時、神様が大きな報いを必ず与えて下さるという事です。

「遅いと思うなら待っていなさい。必ず臨む。とどこおることはない」と言われています。この報いは多くの聖徒たちが命をかけて望んだものでした。

ヘブル11章23/29 節までは、モーセの記事です。たくさんの義人たちの列伝のうちモーセだけはかなり長く書いてあります。23節はモーセの両親のことですが、24節から、「信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。信仰によって、彼は王の憤りをも恐れず、エジプトを立ち去った。彼は、見えないかたを見ているようにして、忍びとおした。信仰によって、滅ぼす者が、長子らに手を下すことのないように、彼は過越を行い血を塗った。信仰によって、人々は紅海をかわいた土地をとおるように渡ったが、同じことを企てたエジプト人はおぼれ死んだ」とあります。

モーセの生涯は報いを望み続けた生涯であると思います。彼の 120年の生涯は、40年づつに区切られてはっきりとした相違があります。40年間は、エジプトの王朝で王子として育てられました。しかし40歳になった時に、彼は自分がイスラエル民族の出身である事を知り、イスラエル民族が奴隷として迫害を受けているのを見て、何とかしてこれを救おうと、王宮を抜け出し、腕力で救おうとした訳です。しかし王様から追われた為に、遠くミデアンの地に逃げて、40年間とどまりました。つまり、そこの祭司エテロの娘チッポラと結婚して、舅の羊を飼って過した訳です。

80歳の時に、彼はシナイの山の麓の草原で、潅木が火に燃えながら、燃え尽きないという不思議な現象を見て近付いた時、神様から召されて、イスラエル民族の救出のためにエジプトに遣わされることになりました。

エジプト脱出（過越）に至るまで、神様によって多くの奇跡（苦難）が加えられ、いよいよ過越の夜、エジプト中の初子が撃ち殺される中で、入口の鴨居と柱に子羊の血を塗ったイスラエルの民は、滅びを免れてことごとく引き出されました。やがて紅海を渡り、荒野を通り、40年のちにカナンの国にいよいよ入るという直前に、山の上からカナンを望みながら彼は召されました。そのとき 120歳で

したが、「目もかすまず気力も衰えなかった」と書いてあります。彼は老化して死んだのではなくて、神様のみ心によって、使命を終えて召されたのでした。そのあとに指導者としてヨシュアが立てられ、その指導の下にイスラエルはカナンの国に入ったのです。

モーセの生涯の原動力は何であったのか――何が彼をしてそのような生涯を送らせたのか。彼は生来柔和な人でした。実姉ミリアム、実兄アロンから逆らわれて、苦境に陥った事もありましたが、彼は決して激しい言葉を出しませんでした。あくまでも忍んで神様に従いました。

そのすべての原動力は、神様の報いを望み見ていたからでした。どんな報いであるかは、ここには具体的な形で書いてありませんが、私は、「神様からほめられること、覚えられること、忘れられないこと」であると思います。別の言い方をしますと、マタイによる福音書に、「良い忠実な僕よ、あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」とあるように、受け入れられることです。

同じ25章には、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」と迎えられた人の事が記されています。そのような、口で言い表す事のできない大きな報いであります。それを望んで彼は、すべてのものを糞土のように捨てました。

パウロも同じです。「イエス・キリストを知ることの素晴らしさの故に、わたしはいっさいのものを糞土のように捨て、前のものに向かって身を伸ばして走って行く。なぜなら、わたしが神様のもとに帰った時には、義の冠が備えられているのだから」と言って、彼は一生懸命に走りました。また彼は多くの人々に対して、「あなたがたもわたしに倣う者となってほしい」と勧めています。その原動力も神様の報いの望みです。

私たちは「報い」と言うと、ちょっと何か人にして上げると、何かが返ってくる。人を助けておいたら、またいつか助けてくれるかも知れない――そのぐらいの事を考えますが、神様はそれとは比較にならないほど大きな報いを備えておられます。具体的にどうこうと言う事は出来ないほど大きなものです。

旧約聖書にも色々な所に報いの大きさが書いてありますが、とにかく人間は一度、神様の前に立って必ず裁きを受け、その行いに応じた報いを受けるものです。

◆私たちがその報いを望むと、どんな苦難にも耐えさせ、どんな乏しさにも耐えさせる素晴らしい力を与えられます。それは空想ではありません。神様の栄光が備えられている事実を見ると、地上の生涯がどんなに変るかと言うことです。その例を１つ読みましょう。パウロの生涯です。

２コリント４章7/12節、朗読。「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うている」とあります。

これはパウロの不撓不屈の生涯です。どんなに四方から患難を受けても窮しない。途方にくれてどこにも道が無いと思っても、なお行き詰まらない。それは天に１つの窓があるからです。迫害に会って人から捨てられても、神様は見ていらっしゃいます。倒されても使命がある間は決して死ぬことはありません。神様が支えて下さるからです。

それは、彼が立派な、忍耐強い、あるいは人間的にも一流の知識人であったからではなくて、むしろ彼は、「自分は土の器である」と言っています。彼は神様に逆らっていたのですから、土の器どころではありません。まことに滅ぶべき者、罪人の頭でありました。しかし神様は、イエス・キリストの血によって彼の罪を許し、むしろこれを宝の器として用いて下さいました。ある数字の符号をマイナスからプラスに付け替えてしまったような大変な事であった訳です。

２コリント６章4/10節、朗読。「わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている」とあります。

これはパウロの逆説的な生き方です。「私たちは人を惑わしているようであるが、実は真実であり、人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっ

ているようであるが、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されることはない。人の手によって死ぬのではない、病気だから死ぬのではなくて、神様の使命がある間は生かされ、使命が終れば迎えられるのであって、自分が生きているのではなく、主が私のうちにあって生きて下さっているという訳です。悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、むしろ多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべてのものを持っている」と言うのです。

パウロの生涯は、人間的に言えば、これほど損な、分の悪い生涯はないと思いますが、彼はその中でむしろ喜びに輝いて、「何と素晴らしい生涯であろうか。イエス・キリストの御名の故に、辱められるに足る者とされた」と言っている訳です。誰からも歯牙にかけられず、無視されても仕方のない者を、イエス様の御名を負うが故に逆らわれるようになったとは、何と恐るべきことか——そういう感謝を持って生きて行きましたから、彼に当ることの出来るものは何もありませんでした。その感謝は悪魔の勢いをも消してしまうもので、こんにち私たちが聖霊による彼の書簡を通して、同じように生かされるのです。これは神様のお示しになったあかしであります。

あかし（手本）とは、私たちにとって、掛け離れたものではありません。「このように生きなさい」と言うことであり、また「そのように生かす」という神様のお約束であります。ですから、私たちはこんにち、大きな報いを望んだ聖徒たちのことを読み、私たちもまたそのように報いを望むのです。実は、彼ら以上のものを私たちのために備えられているのであります。イエス様は、「わたしを信ずる者は、わが成すわざをなさん。かつこれよりも大いなるわざをなすべし」と言われていますし、黙示録には、「これを受ける者のほかだれも知らない新しい名をしるした石を与える」と書いてあります。

「昔の人は素晴らしいものを体験したから、私もそれにあやかって、それに似た体験をさせて下さるのだろうか」という事ではないのです。私たちのほうがむしろ素晴らしい体験をさせて下さる——それは思い上がりではありません。イエス様自身が、「わたしの成すわざをなす。これよりも大いなるわざをなす」と

言われているのですから、確かなことです。昔の聖徒を越え、イエス様すらも越える生涯を私共に送らせて下さる——これが最も大きな報いです。

◆報いの受け方について色々なことを教えられました。まず ①私たちが誰から報いを受けようとしているか、ということです。②いつ報われようとしているか、ということ ③どれほどの報いを受けようとしているか、ということ ④どのような比率で受けようとしているか、ということです——そのようなことを考えさせられました。

〈誰から〉——誰から報いを受けるかという事です。ある人々、たとえば、社会主義国では、「イデオロギーのために尽くす」とか、「イデオロギーに殉ずる」などと言います。ところがイオデオロギーに殉じた人が、どこかの名誉ある壁に埋め込まれたり、掘り出されたりして大変です。名誉を回復されたり、剥脱されたりで、イデオロギーはなかなか真実に報いてくれません。「人民が知っている」と言っても、人からは忘れられてしまいます。しかし神様は真実な方であって、従う者を知り尽くし、豊かに報いて下さる方です。先程、「ほめられ、覚えられ、忘れられない」と言いましたが、神様は決して私たちを忘れられない方です。

〈いつ〉——いつ報われようとするのかという問題ですが、「先憂後楽」という言葉があります。「為政者たる者は、先ず自身が憂い、自分に厳しく政治を行って、民が豊かになってから楽しむ」と言う意味です。これはこんにちの政治家が大いに学ぶべきところだと思います。

私たちは一体どうでしょうか。神様が私たちに熱愛を注いで、「さあ、従ってきなさい。どう選ぶか」と言われる時に、「いえ、私はそれよりも、今ちょと食べていかなければなりません。神様は仕事をやめろとでもおっしゃるのですか」などと言います。神様は決して無理なことを求められる方ではありません。それをよい事に、「今ここで、当面儲かって、ある程度贅沢をして——」と考えて、神様を疎かにしていますと、あとから神様の前に立って悔いなければなりません。「しまった。もう少し早く切り替えて、神様第1にしておけばよかった——こんな筈ではなかった」と言っても、取り返しがつかないかも知れません。これは

「先楽後憂」です。

そうではなくて、やはり「先憂後楽」でなければなりません。今はたとえこの世的に乏しくあろうと、困難であろうと、神様の大きな報いがあそこにある——と望んで行くならば、神様はその人を受け入れて下さいます。「彼らの神と呼ばれることを恥とされない」とおっしゃっています。確かに彼らが望んだようにその実が私たちに及んでいる訳です。

信仰とは、考え方を変えて乏しくても困難でも、それに耐えて行くものだろうと考える方がありますが、そうではありません。神様の報いは決して架空のものではありません。望みだけ持たせて、あとでガタッと肩透かしを食わせられるようなものではありません。神様は必ず望んだように報いて下さいます。このことはヘブル11章の多くの義人たちの生涯を通してはっきりしております。

そのように私共は「今の報い」よりも、「神様の前に立つ、あの時に報われる」と最大の報いを望んで行くと、今も変って来る訳です。将来を望まなければ、今、求めて得たと思うものが、手の中から失われて行きます。これはまことに恐るべきことであり、悔いても追い付かないことです。

〈どれほど〉———次に「どれほどの報いを期待するのか」ということです。私共は「報い」について、あまりに小さな物差しを持っているのではないでしょうか。神様の報いは、私たちが口で表現の出来ないほど偉大なもので、一つ々々具体的な内容を持ったものですが、表現が出来ないほどのものである為に、ある人々はこれを架空のもののように軽んずる訳です。

〈内容の構成比率〉———もう一つは「容器の中身の比率」です。マタイ福音書6章に、「祈る時には、偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む」とあります。これはパリサイ人の話ですが、「彼らはすでに報いを受けてしまっている」と言われています。「あの人は立派な信者さんだ。成るほどお祈りが上手で大したものだ。行い正しく立派な人にちがいない」と人から感心される———すると、その人の報い（の容器）は一杯になってしまって、神様の報いを入れる余地が無いではないかと言われているのです。

「隠れたるに見たまう神」とあります。神様の前に立って受けるべき報いを望み、人の報いはむしろ排除して行くならば、神様が（報いを）たっぷりと注いで、パウロと同じような体験をさせて下さるでしょう。しかし人からの報いを望むならば、神様の報いを入れる余地はなくなります。入っているものの上に注げば無駄になりますから、神様はそれを控えられる訳です。もしそういう事になったら不幸ですから、何としても神様の報いを待ち望む者となりたいと、色々教えられた訳です。

【寡欲は大損失】

◆自分の受けるべき報いがいかに偉大なものであるか学んだならば、神様について寡欲である事は大きな損失であると思いました。人はこの世の僅かな利益は一生懸命に追及しますが、神様の報いは選ばず、「いや、これは心の問題で、幸福とは直接の関係がない。今は人並みにほどほどにやって行かなければ———」と今の事を求めて、神様の大きな報いを失ってしまいます。

神様はどんな大きな報いを与えられても、破産することはありません。「大いに飲み飽けよ、食い飽けよ」と言われています（雅歌５章）。神様は私たちに対して、何とかしてこの報いを望んで、これを一杯に受けてほしいと願っておられる訳です。それは個人の喜びであるだけでなくて、神様の栄光が現れるのですから、神様の喜びでもあります。

このことについてはイザヤ書に、「あなたがたはわたしの栄光のために創造した」と書いてあります。「あなたがたを恵み、あなたがたを生かすのは、個人の救の為であり、周辺の救、あるいは時代の救の為でもあるが、それは何よりもわたしの栄光の為である」「わたしの栄光のために、わたしの証人としてあなたがたを立てるのである」と言われています。

【己が日を数える知恵の心】

◆2,3 日前のことだったと思います。アメリカ(?) のタイムカプセル研究所が、６千数百年後の紀元８千何年とかに掘り出す事を期待して、タイムカプセルを埋め込んだという話でした。６千年後には今使われている言葉は恐らく通じないであろうから、その中に納められた資料を見聞きする為に、まず言葉の教育から始めるという話でした。

私はそれを聞いた時に、永遠の時間の流れの中で、人類の歴史も、私個人の歩

みもどんなに短いものであるか、またそれがただ一度流れ去って行くものであるかを感じたのです。大きな事を言うならば、太陽系も銀河系も宇宙も、ことごとく一過性のものであって、過ぎ去れば帰らないものです。造られたものは滅び、そののちに、「初めであり終りである」方が存在される。

そういう中にあって、自分が今ここに生かされている事は、どんなに大きな神様の使命があるのだろうかということです。そして、神様の前に喜ばれ、報いを受け、永遠に忘れられない為に、私たちにこのような恵みの機会が与えられているのですから、ここで私はパウロのように大いにこの機会を生かしたい、あるいは彼以上に、神様を待ち望んで大きな報いを受けたいと願った訳です。

まことに人の命は短いものであって、モーセが詩篇90篇で、「我らに己が日を数えることを教えて、知恵の心を得しめたまえ」と歌っている通りです。詩篇19篇に、「わたしの口の言葉と、心の思いが、あなたの前に喜ばれますように」とあります。「いま悪い事を言わないで神様から喜ばれるように———」と言うのも良いですが、もう少し大きなスケールで、全生涯をかけて、「わが口の言葉、わが心の思い」が神様に喜ばれて報いを受けられるように、永遠に神様から覚えられるように、み心にとめられるように———私はこれまでも願って来ましたし、今後もそのように選択して行きたいと強く教えられたのです。

【命の代価は払いきれない】

◆マタイ16章 24/26章にかえる。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」

もし「私はあとのことは良い。当面そこそこの生活をしなければ」と言って、神様のお言葉を捨てるならば、一時的には全世界をもうけるかも知れないけれども、神様からの永遠の命の望みを失うことは、大きな損失であり、ひいては現実の生活においても望みを失うことになります。それでは何の得るところがあるだろうかと言われるのです。たくさんのお金を溜めてみても、どれ程の幸福を感じられるでしょうか。むしろ大きな空しさをもって、「この上どうしたら良いのだ

ろうか」と悩むのではないでしょうか。命は幾らお金を払っても買うことが出来ません。

詩篇49篇に、「とこしえに生きながらえて、墓を見ないためにそのいのちをあがなうには、あまりに価高くて、それを満足に払うことができないからである」とあります。私たちがもし、神様から罪を許して頂くために、多くの犠牲をささげて、一つ々々罪を許されなければならないとしたら、どんなに莫大な費用がかかる事でしょうか。

何千億円の土地成金が、「よし、やってみよう」と言っても、それは出来ないことです。人間の一つ々々の罪のために、あるいは牛を供え、羊を供え、多くの供え物をささげて、「これでレビ記に書かれている通り許して下さい」とは、１度２度は出来ても遂げることは出来ません。罪の根は余りに大きく、それをあがなうには、イエス・キリストの十字架の血が絶対に必要です。

その結果、裁きの日に永遠の火に投げ込まれ、永遠に悔いなければなりません。これは取り返しのつかない事です。

◆「やがて神様の前に立たされた時に、それぞれに応じて報われる」と書いてあります。それは何かが出来たかどうかではなくて、神様からそのような者として選ばれ、召された感謝をもって、「こんな者をも、あなたの血によって清めて下さいますから、有り難うございます」と一歩でも半歩でも踏み出して行くならば、神様はそれを見て下さる方です。

詩篇 130篇には、「もろもろの不義に目をとめられるならば、主よ、だれが立つことができましょう」と書いてありますが、「神様のゆるしがある」とも書いてあります。私たちの柔らかい心を見て、それに報われる方です。決して不義を咎められる方ではありません。「あなたは、あの時にあんな事をしなかった。この時にもこんな事をしなかった。足りなかった、もっとしなければならなかった」と神様から咎められたら、誰も立つ事は出来ません。しかし神様は、私たちに対して多くの恵みの機会を備えて下さり、私たちが柔らかい心をもって出て行くならば、喜んで受け入れて報いて下さる方です。

ですから、いわゆる人間的な熱心や行い、あるいは出席率がどうとか、献金の

額がどうとか、奉仕は何をしたとか、そういう事は係わりの無いことであって、それらは結果として出て来ることです。柔らかい砕けた心がなく、うわべを飾る事はむしろ逆効果であります。たくさんの物を積み上げて、「神様、私は熱心でしょう」と言うならば、カインと同じになります。彼は神様から「出直しなさい」と言われ、それを拒んで最初の殺人を犯しました。

今は恵みの時ですから、「私たちのような者を顧みて下さるのですから、有り難うございました」とお言葉に従う道を選択してまいりたいと思います。「そうです、私はあなたを第1にして従わせて頂きとうございます。あなたの大きな報いを望んでまいります。どうぞ主よ、先輩聖徒たちのように私も従わせて頂きとうござうます」と姿勢を整えて行くならば、神様は確かに憐れみ深い方です。

私たちは選択の積み重ねをしながら生きています。神様から選ばれた者、熱心を注がれた者として、私たちがこの方を選び、神様の選びを堅くして頂く———その結果として、この大きな報いを与えられる者でありたいと思います。望んでいた通りになるのであり、今はその切り口として、（パウロのように）不撓不屈の素晴らしい生涯に入る訳です。パウロのように乏しい困難な生活に入らなければならないという意味ではありませんが、そうなったとしてもたじろがない———私共にはいつどういう事があるか分かりませんが、その中でなおパウロのような不撓不屈の生涯を送りたいものです。今まさに首を切られようとするパウロが、命の冠を望んで喜びに溢れている———（テモテ第２の手紙）———まことに素晴らしいと思います。

神様はこれらを通して、栄光の望みがこんなに偉大なものだと知らせて下さるのです。神様から選択を問われているこの時に、大胆に神様を選ぶ者となりたいと思います。「あなたは命を選ばなければならない」とおっしゃっています。この方を選んで、この方から選ばれる者でありたいと願います。ではご一緒にお祈りしましょう。　　　　　　　　　　　　（1990.1.3.10:00　聖会７）

第８回〈１９９０年1月3日、午後2時〉

神に対して富む為に

（聖書＝ヨハネの黙示録第３章１８節）

【最悪の教会に恵みを与えようと】　１１９

【裸の恥】　１２０

【すべては神の賜物】　１２１

【無代価で最も良きものを】　１２１

【乾いた一片のパンも】　１２２

【飲み飽けよ食い飽けよ】　１２２

【髄と油の持て成し】　１２２

【天国銀行の利子】　１２３

【預かった資産を増やす】　１２４

【天国の礎石に証印】　１２６

「そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買い、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買いなさい」

（黙示録3:18）

◆これは黙示録の７教会に対する書簡のうち、最後のものです。ラオデキヤ教会は最も悪い教会の代表として記されています。７つの教会は、良い順番に並んでいる訳ではなく、ほめられるばかりの教会、あるいは、ほめられる所と叱られる所とのある教会がある中で、このラオデキヤ教会はきつく叱られているばかりです。

ラオデキヤの町は、こんにちのトルコ共和国の中央部ですが、その当時非常に繁栄していたようです。この世的に繁栄すると、神様に逆らう町になりやすい訳で、自ら「富んだ、豊かだ、不自由がない」と言っていながら、実は「貧しく、惨めで、憐れむべく、盲目であり裸である」と指摘されています。これは私たちも注意すべき事であると教えられたのです。神様は、この欠けの多い教会に目をとめ、叱るだけではなくて、豊かな恵みの富を与えようとしておられるのです。

今年、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」とみ言葉を与えられました。このお言葉を聞くと、私たちは何か神様から取り上げられるような、自分の力がそがれるように感じやすいのですが、神様は、「あなたがたの何をも欲しているのではない。世界とその中に満ちるものはみな私のものであって、むしろ私があなたがたを豊かに養おうとしているのである」とおっしゃっておられる訳です。

ここでも、「富む者となるために」と言われています。実際には貧しい惨めな者であるから、それを富ませようと言われているのです。

「貧しい者」とおっしゃっていますが、そのために、「わたしから火で精錬された金を買いなさい」と言われました。

また、自分が裸であることが見えていないから、「白い衣を買って着なさい」と言われました。

また、目が見えないのだから、「見えるようになるために、目にぬる目薬を買

いなさい」と言われたのです。

ある本を読んでいましたら、当時のラオデキヤの町には、神様の言われたことが実際にあったらしいのです。当時のラオデキヤは大変繁栄した町で、その地方の金融の中心地であったそうです。そこで神様は、「わたしからまことの金を買いなさい」と言われた訳です。

「白い衣を買いなさい」とありましたが、その地方は黒毛の羊を多く産していたそうで、黒光りのした立派な毛織物が造られていたそうです。そこで、「まことの白い衣―――神様の前に義とされる衣を買って着るように」と言われた訳です。

もう一つ、目薬のことですが、その地方には、こんにちで言うと「薬科大学」があったようです。薬の研究が盛んで、殊に粉末の目薬が有名な輸出品だったそうです。そこで神様は、「あなたがたは真理が見えるように、まことの目薬をわたしから買いなさい」と勧められたのです。

神様の金は詩篇にあります。「地に設けた炉で練り、７たびきよめたしろがねのように」とあります。貴金属の純度は、99.999%などのように９の数字が幾つ並ぶかによって価値が違うそうです。神様の金は何回も精錬して滓を取り除いた非常に純度の高いもので、それは神様のみ言葉をさします。

「裸の恥をさらさないため白い衣を買い」とありますが、これは黙示録７章に「その衣を小羊の血で洗い、それを白くした」と言われています。

目薬については、詩篇19篇に、「主の戒めはまじりなくて、眼を明らかにすると言われていますから、聖書のお言葉のことです。

【裸の恥】

◆また「裸の恥をさらさないために」と言われています。「裸の恥」とは、罪人が一生懸命に隠そうとしますが、神様の前には全部見通されている―――これが最も醜い裸の恥です。

創世記３章に、罪を犯したアダムとエバが、「神様の前から逃げようとして、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた」とありますが、神様は枯れて縮れてしまったいちじくの代りに、皮の衣を着せられました。

霊の衣は、すなわち小羊の皮であって、小羊を殺して作った皮衣を着せて彼ら

を装われた訳です。

【すべては神の賜物】

◆神様は、上からの恵みをもって私たちを生かそうとしておられるのであって、私たちがお言葉に従順に従って行くと、神様は私たちのうちに豊かに満たして下さるばかりでなく、共に住んで、共に食事をして交って下さるというのです。これは神様の恵みの約束です。すべては与えられ、満たされるのであって、決して奪われるのではありません。

ある人は教会に来て、「信仰とは何と窮屈なものだろうか。私は苦しくてたまりません」と言う方がありますが、神様の御心は逆で、私たちに慰めを与え、霊肉共に豊かにして、イエス様との交わりの生涯に入れようとされるのです。

先程、「白衣はイエス様の血によって洗われた衣である」と申しましたが、精錬された金も、目薬も、白い衣も、みな神様が与えて下さるものであって、自分で努力して手に入れるものではありません。つまり、自分で努力して、聖書を研究し、どなたかのお話を聞いて勉強しなければならないと言うものではなく、上から与えられる賜物です。

「買いなさい」とありましたが、これは「ただで買いなさい」と言う意味です。「ただで買う」とはおかしな話しのようですが、その次第を読んでみましょう。

【無代価で最も良きものを】

◆イザヤ書55章 1/2節、「さあ、かわいている者はみな水にきたれ。来て買い求めて食べよ。あなたがたは来て、金を出さずに、ただでぶどう酒と乳とを買い求めよ。なぜ、あなたがたは、かてにもならぬもののために金を費し、飽きることもできぬもののために労するのか。わたしによく聞き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で自分を楽しませることができる」——これは無代価で与えられる福音を示しています。「飢え渇いている人は、わたしの所に来て、食べて飲みなさい」と言われるのです。しかも「金を出さずに、ただで———」と言われています。

先程「買え」と言われていた三つのものも、今ここにあるものも、ただで買う事が出来るのです。代価はすでに支払われています。イエス様が十字架にかかって下さった事によって、私たちは無代価で天国の恵みにあずかる事が出来るようにして頂きました。ですから「有り難うございます」と感謝して頂戴すれば、神

様はすべてのものを満たして下さいます。

ところがそのことは聞かずに、「かてにならぬもの」―――つまり食べても自分のプラスにならないもの、少し食べるとまた次を食べなければいられないと言う禁断症状になるようなものには、一生懸命にお金を出す。「だからそんな事をしないで、私に良く聞き従って、最も豊かな食物で自分を楽しませるように」と言われている訳です。

私たちが神様から養って頂くならば、やっと生きていると言うようなものではありません。「信仰だから、世の中のようにはいかない。このくらいで我慢しておきなさい」と言うことはないのであって、神様は最も豊かな食物―――この世の中でも「これは素晴らしい！」と言うものよりも、もっと素晴らしいもので楽しませて下さる方です。

◆私は食物を頂く時にいつも思うことは、感謝して頂くのと、不足を言いながら頂くのとは大違いだということです。「こんなに豊かな食物を頂いて、有り難うございます」と味わわせて頂くと、一つ々々が実に感謝ですし、それが身について行きます。体にずっしり応えるように、力になって行くのを覚えるのです。

箴言17章に、「平穏であって、ひとかたまりのパンのあるのは、争いがあって、食物の豊かな家にまさる」とあります。この信仰は、気の持ちようではなく、実際に肉体も喜び力が与えられます。神様の祝福は実に素晴らしいものであります。

◆この他にも、神様が与えて下さる恵みは、決して中途半端でないことが記されています。「信仰だから、自分でそんなふうに思って感謝しなければならないというものではありません。実際に飽かして下さるものです。雅歌５章には、「友らよ、食らえ、飲め、愛する人々よ、大いに飲め」と言われています。

◆詩篇63篇には、「わたしが床の上であなたを思いだし、夜のふけるままにあなたを深く思うとき、わたしの魂は髄とあぶらとをもってもてなされるように飽き足り、わたしの口は喜びのくちびるをもってあなたをほめたたえる」とあります。神様の恵みは最高のものです。しかもこれは、作者ダビデが逆境のどん底で詠んだ賛美です。

詩篇63篇 5/8節、朗読。この篇の表題に、「ユダの野にあったときによんだダ

【乾いた一片のパンも】【飲み飽けよ食い飽けよ】【髄と油の持て成し】

ビデの歌」とありますが、これはサウル王から追われ、命を狙われていた時のことです。山に野に隠れ、洞穴に寝て、悲惨のどん底にあった時に、仮床の上で、神様に対して祈り賛美をしたところが、彼の魂は最高の食物でもてなされるよりも、優った喜びをもって飽き足りたというのです。

これはパウロが、人間的に見れば最も惨めな、割りに合わないと見える生涯の中で、最高に喜んでいたのとよく似ています。

私自身のことを考えても、まことにその通りであって、物質的に計るならば、決して豊かでなくても、神様の前には実に素晴らしい恵みに満たされています。それは痩せ我慢ではありません。実際に良きものを味わわして頂きますし、水一杯であっても感謝して頂くという心の豊かさがあります。

先日、新聞の投書欄で見ましたが、ある人が子供に色々なものを食べさせようとすると、大変口が奢っているので、「あれはいや、これはいや」と勝手なことを言い、しかも食事を遊びにしているそうです。「こういう子供に躾教育など出来るだろうか。まことに嘆かわしいことである。どうしたらよいか分からない」と言う祖母か祖父のお話がありました。

それを読んで、私たちが幸福を感じる筈のところで、恐れや不幸を感じるとは何と惨めなことだろうかと思いました。

このような子供たちが将来どうなるだろうか、このままですむ筈がないと思います。世界中で飢餓に喘いでいる国が多い中で、日本がいつまでこんな事をしていられるだろうかという恐れを感じますが、神様を敬うならば、子供も大人も、この「髄とあぶらのもてなし」をもって霊肉共に飽き足りる事ができるのです。

◆そうした感謝を神様にささげて行くことは、私たちが「天に宝を積む」ことになると教えられたのです。今朝の集会で、「大いなる報いを望む」ことを教えられましたが、私たちが神様を望み、報いを望んでいく生涯は、その信仰がそのまま天国銀行に振り込まれるのだと気が付きました。マタイ６章には、「天に宝を積め」と言われています。

【天国銀行の利子】

最近、銀行の振り込み手数料が高いと批判が高まっていますが、天国銀行の振り込みは無料です。私たちが神様に感謝しますと、それがそのまま天国銀行に送

金されて、その結果、エペソ人への手紙にあるように、「満ち満ちる恵みをもって満たされる」―――神様が私たちの口座を備えて、それにどんどん積み蓄えて下さいますから、たくさんの利子がついて行く―――これは私たちにとって非常に素晴らしいことです。

やがて神様の前に立たされた時に、「善かつ忠なる僕、お前のための口座がこんなにたくさんになっているよ」と、様々な祈りに答えられ、多くの人が救われ、世の中が改まり、神様の前に多くの資産が積み蓄えられています。それを私たちが受け継ぐのです。

子供の貯金の口座に、親はたくさんにプラスをしてやります。私の弟は、母が亡くなったすぐあとで結婚いたしましたが、その時に、自分名義の通帳に母がお金を積んでいた事を知って、涙を流して喜んでいました。限りある愛と力しかない親でさえも子供にそういたしますが、神様はそれ以上にたくさん積み増して下さる方です。

ある教会で改築献金を募って、会堂を建て替えましたが、募金が始まるだいぶ前に指定献金がささげられていたそうです。しかしそれは全体の予算規模からすれば、ごく僅かでしたが、そのお金を核として雪だるま式に増え―――初めは確か10万とか15万と言う額だったと思いますが、最終的には 5,6千万規模の会堂が出来たというお話でした。

神様は、私たちがからし種一粒ほどの信仰でも、一言感謝をささげると、スッと電信為替で天国銀行に振り込まれ、それに神様が、「よし、こんなに感謝をしているのなら、もっと付け加えてあげよう」と積み増されますから、私たちはどんなに大きな天の資産を受け継ぐ事になるか分かりません。このことはペテロ第1の手紙1章に書いてあります。私たちはそういう身分にして頂いた事を感謝したいと思います。

◆もう一つは天国の資産を増やすという問題です。この事は、マタイ25章にあります。

マタイ25章 14/30節、朗読。 19/25節、「だいぶ時がたってから、これらの僕の主人が帰ってきて、彼らと計算をはじめた。すると5タラントを渡された者が

進み出て、ほかの５タラントをさし出して言った、『ご主人様、あなたはわたしに５タラントをお預けになりましたが、ごらんのとおり、ほかに５タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。２タラントの者も進み出て言った、『ご主人様、あなたはわたしに２タラントお預けになりましたが、ごらんのとおり、他に２タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。１タラントを渡された者も進み出て言った、『ご主人様、わたしはあなたが、まかない所から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり、行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がございます』」

これは有名なタラントの譬です。天国は、ある主人が旅に出る時に、その僕たちに自分の財産を預けるようなものであると言われます。それぞれの能力に応じて、５タラント、２タラント、１タラントを預け、それぞれ商売をして増やした訳です。しかし、１タラントを預かった人は、「もし間違って損をしたら大変だ、このまま持っておけば文句はないだろう」と地中に隠しておいて、そのまま主人に差し出したところ、主人から叱られて取り上げられ、すでに５タラントを10タラントに増やした人に加えられましたから、最初の５対２対１は、11対４対０になってしまいました。そして主人は１タラントを渡された人のことを、「この役立たずの僕を外の暗闇に放り出してしまえ。彼はそこで泣き叫んだり、歯がみしたりするであろう」と言ったというのです。

これは「私は１タラントの僕のようなものですから駄目です」と言う為に書かれたものではありません。私たちが僅かなもの――たとえ２タラントであったとしても、それを自分なりに生かして働かせる――必ずしも商売という意味ではありませんが――与えられた信仰をもって自分が歩んでいく――恵まれ、注がれた者として生きていますというのが活用です。すると先程ありましたように、天国銀行に振り込まれて神様から喜ばれます。神様の最も大きな報いは、

「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」というお言葉です。何を貰うよりも、神様から喜ばれ覚えられることは、私たちにとって最大の報いです。

ある人は、「子供の記念になるもの（たとえば誕生以来の多数の写真とか）を積み蓄えて、自分の生涯のあかしにしたい」と言われます。その他、学問的業績を上げようとする人など色々あると思います。しかし、人の評価は変りますし、長くなれば忘れられます。更に良いものが出て来ると霞んでしまいますが、神様が私たちを覚えて下さるのは、絶対に変りませんし、消え去ることがありません霞むこともありません。永遠に覚えられ、命の書にきちんと登録されます。

◆先日、法務局に行って土地台帳を見ました。これには土地のことがちゃんと書いてあります。これは永久に変りません。第３者が「いや、これは私の土地だったのだ」ということは言えないように法務省の印が捺してあります。しかし日本の国に大きな変化が起って、法制が全部変ってしまえば、これもどうなるか分かりません。

しかし神様が私たちを覚えて下さること、このお褒めの言葉、報奨、義の冠は決して変りません。命の書に登記され、神様が十字架の血をもって保証して下さるものですから、人が変えることが出来ません。

２テモテ２章には、「神のゆるがない土台はすえられていて、それに次の句が証印として、しるされている。『主は自分の者たちを知る』。また『主の名を呼ぶ者は、すべて不義から離れよ』」とあります。そのように私たちは動かない保証を与えられています。これは私たちの天国の財産です。私たちの天国の財産は

※「ただで買え」と言われる神様の富

※報いを望むことによって振替えられて行く富

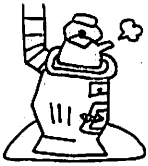
※与えられたものを生かし増やして行く富

によって、私たちは天の宝が豊かに満たされると教えられました。

ヨハネ黙示録３章18節にかえる。神様は私たちに対して、このような金を与え白い衣を着せ、目にぬる目薬を与えて、すべての真相を悟る者とし、また天に宝を積む事が出来るように、今日も心の戸を叩いて下さっていると教えられました

マタイ６章 19/21節。「あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである」

「天に宝をたくわえ、神に対して富む者となりなさい」と言うのが、神様のみ心であります。どうかこの時に当って、私たちは人の報い、この世の富、贅沢ではなくて、神様からほめられるところの天の宝を豊かにたくわえる者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　(1990.1.3.14:00　聖会８)



第９回〈1990年1月3日、午後7時〉

エゴを避けよ／永遠の悔いを残さぬように

（聖書＝テモテへの第１の手紙第６章１１／１２節）

【最悪の誘惑者】　１３１

【８分の６拍子、１小節】　１３２

【全員を合格させようと】　１３２

【金銭の性格】　１３３

【全世界を得て命を失う悲惨】　１３４

【縄梯子に手を触れて沈む】　１３５

【後悔が追い付かなかった金持】　１３６

【糧にならぬものを求めて突進】　１３７

【永遠の命には、見える物、
見えぬ物すべてを含む】　１３８

【心の目を凝らして】　１３８

「しかし、神の人よ。あなたはこれらの事を避けなさい。そして、義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい。信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである」(1テモテ6:11/12)

◆私たちが神様に従って僕として歩んで行く時に、いざなうものが色々あります。ここにはその中で、最も悪質なものについて記されています。9/10節に、「富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまな情欲に陥るのである。金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲張って金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした」とあります。

仕事をして賃金を得る、あるいは物を売りサービスを提供して報酬を得るのは当然であります。何とか良いものを安く提供して、自分の収入も増やそうと言うのも、当然の事でしょう。また折角得たものを無駄に使わずに、適切な管理をする事もなすべきことです。

ところが、非常にデリケートなことに、これを「願い求める」――何とかして増やしたい、一番になりたいとなりますと、「貪欲は偶像礼拝にほかならない」(コロサイ3章)ということになります。「これらのことのために、神の怒りが下るのである。あなたがたも、以前これらのうちに日を過ごしていた時には、これらのことをして歩いていた。しかし今は、これらいっさいの事を捨ててしまいなさい」と勧められています。

自分で事業を営んで行くには、大きな努力も要しますが、またうまみもあるものでしょう。しかし自分が全責任をもって「何とかしたい」と求めるために、貪りに陥るという危険な一面も持っている訳です。

ですからテモテに対して、「あなたは神の人として神様に仕えるのであるから、これらのことを避けなさい」と勧められています。微妙な所を避けるのですから、なかなかむつかしいものですが、神様のみ声に従って、それとの戦いを戦い抜いて、勝つようにと勧められているのです。

◆「あなたはこれらのことを避けなさい。そして、義と信心と信仰と愛と忍耐

【八分の六拍子、一小節】

と柔和とを追い求めなさい」とあります。神様が私たちに与えて下さる最も尊い恵みは、神様から義とされる事です。イエス様がこんな者の為に十字架にかかって下さって、罪を許して下さった、これが何よりも大きな賜物ですから、罪を許された者として敬虔に従って行く、そしてお言葉に対してあくまでも信頼を傾けて行く―――これが「義と信心（＝敬虔）と信仰」です。

また神様から愛された者として、どんな中を通っても、神様のみ心を信じて忍耐し、多くの人々に対しても、柔和と忍耐をもって接して行く―――これが「愛と信仰と柔和」です。

丁度、８分の６拍子―――８分音符が６個で一小節という曲は、「ツッタッタ、ツッタッタ」と拍子をとりますが、丁度そのような感じがいたします。「義・信心・信仰」「愛・忍耐・柔和」となっています。

そして信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、心のうちに絶えず働きかけ誘惑して来るもの―――私たちを引っ張ろうとする富の誘惑に負けないように、そして永遠の命を獲得するようにと勧められているのです。

「あなたはそのために召されて、多くの証人の前で立派なあかしをした」と言われています。神様は全部知っていらっしゃるのです。

「あなたがたはそのために召されている」と言われています。神様は私たちをふるいにかけて、「お前は駄目だ、お前も駄目。この中ではこの人だけが良かろう」と試みるのではなくて、私たちがことごとく信仰の戦いを戦いぬいて、永遠の命を獲得するようにと、その為に召して下さったのです。

【全員を合格させようと】

◆それは丁度、学校や企業の入社試験、入学試験などで、定員だけ採用するとあとはふるい落すようなものです。良いほうから取っていって、あとは全部落す訳です。競争率が何十倍などと言うと、一人の合格者を合格させるために何十人かは捨てられてしまいます。

医師の国家試験とか様々な資格試験、或いは自動車学校の試験などは、合格点が取れれば全員合格をする訳で、むしろ自動車学校などはたくさん合格者を出す事がその学校の誇りになります。

神様が、私たちを召して下さったのは、「良い人は合格させてやるが、駄目な

者はみな落としてしまおう」とする為ではなくて、むしろ駄目な者を選んで、これを引き上げ、神様らしい事を行われようとされるのです。

それであるのに、私たちたちがもし、「これらのことを避けなさい」と言われているものを避けない場合にはどうなるでしょうか。

◆マイナスのほうから幾つか教えられたいと思います。

伝道の書5章 10/17節、朗読。「金銭を愛する者は金銭をもって満足しない。富を好む者は富を得て満足しない。これもまた空である」とあります。テモテの手紙に、「金銭を愛する者」、あるいは「富むことを願い求める者」とありましたが、そのようにした者が、一生懸命にお金を求めて、ある程度手に入ったならば幸福になるかと言うと、そうではないと言われるのです。「金銭を好む者は金銭をもって満足しない」と言うのですから、これは矛盾した話のようです。求めたものを得たのですから満足する筈です。ところが満足がないというのです。どこまで行っても果てしがなく、むしろ欲望が増し、「足りない足りない、あの人はあんなに大儲けしたのに、私は儲からない。自分は不幸だ、呪われている」となって来ます。これは逆説です。

これは人間にとって空なることであります。財産が増すと、「あの人は財産家で、たくさん使用人がいて、あるいは部下がたくさんいて、大会社を経営して―――」などと思われますが、人がたくさんいて、大きな仕事をするということは、食らう者も増すということです。ぶら下がる人がたくさんいるということで、そうなると持ち主はお金が動くのを見るだけで自分には少しも益がないという事になります。「今月もこんなにたくさんお金が出て行った。来月はこの人たちに食べさせる為にどうしたらよいだろうか」とかえってそういう心配が増して来るという訳です。

しかし、雇われている人のほうは、食べることが多くても少なくても、「来月はまた何とかしてくれるさ」という訳で、任せて快く眠ることが出来ると書いてあります。

大きな仕事をしようと言う人は、幸福どころか眠る事ができません。たくさんのお金を運用しようとなりますと、夜中も海外市場に目を配っては1秒を争って

売買をする訳で、これでは眠るどころではありません。一晩中、お付き合いしていたら死んでしまいます。

そうなると、彼にとってはお金の多いことは少しも幸福でないのであって、13節にあるように、「富はこれをたくわえる持ち主に害を及ぼす」と言われている通りです。眠ることのできない程のお金に引き回されるのも、害には違いありませんが、もっと色々な害もあります。

お金が1人歩きして、増えてくるとまたどこかに持って行って運用しなければならない。運用すると、またそれに係わる色々な事が起って来ます。第1利子が付くと、またその利子をどこかに使わなければならない、どこへ持って行こうかという悩みが起ると言います。使い道に苦労するなどと聞くと、お金を持たない者にとっては夢のような話しですが、実際にそういうことがあるようです。あるいはお金が1人歩きをして、質の良くない事をしますと、刑務所の中に引き摺り込まれて、自由を奪われる事になります。

それは本人が悪いと言うよりも、お金の力と言うか、お金そのものが人を不幸に陥れるものであると思いました。お金の性質というものがこれで分かる訳です。

◆14節には、「またその富は不幸な出来事によってうせ行くことである」とあります。一生懸命にお金に頼って、身も心も入れ上げてしまったとき、それがプッと失せて行くと、人は魂が抜けてしまったように呆然としてしまいます。

企業倒産などがよくありますが、悪質な倒産を企てて夜逃げする人もありますが、しかし何もかも投げ出して、全くゼロになって社会からも捨てられてしまうと、すっかり悄気込んでしまいます。そうなると、どんな立派な子供がいたからと言っても、力にならないし、家族がいたからと言っても頼りにならないし、その労苦によって得たものは、手に携えることも出来ず、全く裸で来たように、裸で帰って行かなければなりません。そんな生涯に何の益があるだろうかと言われている訳です。

伝道の書は、そんな事にならないように、最後の結論として、「神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である」（12章）と言われている訳です。

この他にもありますが、中央の聖句（マタイ16章）のすぐあとに、「自分の命

を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう」とあります。「神様に従うという事は良いことだけれども、先ず自分のことを考えなければ———」と自分を第一にすると、「全世界を得るとも、自分の命を損したら何の得になろうか」という事になるのです。

世界中を買いまくって、「日本人は間もなくニューヨーク全部を買い取ってしまうだろう」と言われているようになっても、「自分の命を損したら何の得になるか」と言われています。もしそんな事になれば、世界中から日本は叩かれて、それこそどんな目に会うか分かりません。

そういう意味でも、富はわざわいを及ぼす訳ですが、たくさん持っていながら不幸を味わうと言うのは、非常に悔しく惨めなものです。いっそのこと何も無ければ、諦める事も出来ますが、有ってなお不幸というのは最も悲惨なことではないでしょうか。

【縄梯子に手を触れて沈む】

◆私は今でも戦争の時の一つの出来事を思い起します。海上戦斗ですから、敗者は海に投げ出されます。私もレイテ沖海戦の時に、乗艦が沈没して海に投げ出されました。すると味方の小さな駆逐艦が助けに来てくれた訳ですが、まだ敵機が上空にいますから、停止して助ける訳にはいきません。せいぜい徐行しながら縄梯子を下ろしたり、棒を差し出したりして掴まらせる訳ですが、大部分の人が疲れきって怪我をして泳いでいますから、目の前に縄梯子が来ると、「これで助かった」と安心するのでしょう、最後のひとかきをかいて縄梯子に手を伸ばすが力が足りません。あるいは艦が動いて行くので梯子に触っただけで掴む事が出来ない、すると再び水をかいて梯子を掴む力がないのです。上から見ていると、そのままスッと沈んで再び浮き上りませんでした。

それは丁度、お金を追い求めて、ある程度お金が出来たが、そこに何の幸福もなく、むしろ「笑う時にも心に悲しみがあり、喜びの果に憂いがある」（箴言14章）となった時には、もう沈むばかりです。何も無ければまだしも、目の前にあって、それに手が触れたと思いながら沈んで行って再び上らないというのは、まことに悲惨なものです。

私たちがもし、自分の命を救おうと思って失うならば、そういう事であって、

諦めても諦めきれない非常に悔しい恐ろしいものです。もう一つ失敗例を読んでみましょう。

◆ルカ16章 19/31節、朗読。これは、生前贅沢に遊び暮らしていた金持と、その家の前で残飯を食べていた乞食のようなラザロという二人の人が、死んだのちどうなったかという話です。こういう状況を書いたものはほかにありませんので、非常に気を付けて読んだ訳です。

金持が一生懸命に救を求めたのに対して、アブラハムは、「そちらとこちらの間には大きな淵が置いてあって、渡ろうと思っても越えられないようになっている」と言っています。神様の裁きは必ず行われ、決定が下ったものは変える事が出来ないということです。人間の世界では、最高裁判所の判決であっても、明白な証拠が出てくると、再審があって覆る事がありますが、神様の決定は永遠の決定であって、これを変えることはできませんから、彼らは行き来することが許されませんでした。

そこで金持が申しました、「では自分の家に行って、私の兄弟がこんな苦しい所に来ないよう、彼らに伝道してやって頂きたい」とお願いしましたが、「あそこには教会があり、伝道者がおり、聖書が語られているから、それに聞けばよろしい」と言われます。「いや、死人の中から甦った人が行ったら、きっと彼らは驚いて悔い改めるでしょう」と言いましたが、「そうではない。もし聖書に聞かない者は、死人の中から甦って行っても、それを決して信じはしないから駄目だ」と言って、とうとう彼は永遠の火の中から救われる事が出来ませんでした。

この金持は何を間違ったか、他の人に比べて贅沢をしたことが罪であったのか――必ずしもそうではありません。イエス様は、「貧しい者は世に絶えることがない」と言われていますから、富む者もあることは認めておられる訳です。しかし、自分が神様から預かったものを、あたかも自分のものであるかのように誤解して、これを私物化する――使命の為に預かっているものを、自分のものと思ってポケットに入れるように、彼はただ遊び暮らすことに努めた訳です。

その結果、彼は永遠の悔いを残しました。富むことを願い求め、金銭を愛し、贅沢を愛し、ただそれだけで過ごして行った彼は、永遠の悔いを残して、これを

取り返す事が出来なかった訳です。「地獄にはうじが尽きない」と書いてあります（イザヤ書、あるいはマルコによる福音書）。蛆が尽きず、火が尽きない所で、彼は燃えても灰になることができません。ジリジリと焼かれて――丁度モーセが柴のくだりで柴が燃え尽きないのはどうしてだろうかと訝かったように、神様は、地獄においても、火が人を燃やし尽くす事がないという恐ろしいことをなさいます。ですから彼は、永遠に悔い続けた訳です。

そこで、そういうことにならないように、「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくるがよい」（ルカ16:9）と言われています。これは色々な解釈があって問題になる所ですが、自分が地上の生活において預けられた財産、金銭、あるいは能力なり時間なりを用いて、自分がやがて天に迎えられる時の備えをするようにと言われている訳です。ですから、それをしなければどうなるかという事を上記のお話で教えておられる訳です。

◆私たちが神様からこういう事を教えられてみますと、人間は自分で不幸に陥るのが分かっている――自分では分からないかも知れませんが――不幸に陥るべき道に真っ直ぐ、しかもわざわざ犠牲を払って突進して行く――そのような愚かな事をしているのではないかと思います。

イザヤ55章に、「あなたがたは、なぜかてにもならぬもののために金を費し、飽きることもできぬもののために労するのか」と言われているように、多くの人々はこんにち、自分を苦痛に陥れ、後悔しても追いつかないような中に突進するために一生懸命に走っているようであります。

イエス様があるとき、人から追い出された悪霊に、豚の群に入る事を許されると、豚の大群がなだれをうって海に駆けくだり、水の中で溺れて死んだと記されています。最近でも、鼠の大群が海に飛び込んで集団自殺したことがあるそうですし、イルカの群が押し合いへし合いしながら陸地に競り上がって、そこで乾いて死んでしまうという事もあったと聞いています。

同じように、私たち人類は今、様々な変革を試みながら、右に左に生きる道を模索していますが、逆に振ってみてもそこに幸福がある訳ではありません。人類の歴史は、こうして変動を繰り返しているかも知れません。

【永遠の命には、見える物、見えぬ物すべてを含む】

◆ですから今、私たちがそのような時代にあって、いつまでたっても、同じ事の繰り返しに過ぎない空しい結末にならないように（伝道の書１章、参照）、「義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和」を追い求め、「信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得するように」と勧められているのです。

神様の報いは「永遠の命」です。はっきりした上からの、すべてにまさる命の賜物を頂いて、神様に望みを置くようにと言われている訳です。

１テモテ６章 17/19節、朗読。「この世で富んでいる者たちに、命じなさい。高慢にならず、たよりにならない富に望みをおかず、むしろ、わたしたちにすべての物を豊かに備えて楽しませてくださる神に、のぞみをおくように、また、良い行いをし、良いわざに富み、惜しみ無く施し、人に分け与えることを喜び、こうして、真のいのちを得るために、未来に備えてよい土台を自分のために築き上げるように、命じなさい」

「神様に望みをおきなさい」とありますが、神様の領域は心の問題だけではありません。ものの話は別ではないのです。神様は、事実すべてのものを豊かに備えて楽しませて下さる事の出来る方ですから、その方に望みを置き、また良い行いをし、良いわざに富み、惜しみなく施し、人に分け与えることを喜ぶ―――左側の標語に、「受けるよりは与える方が、さいわいである」とあるように、神様のみ心に従って良いわざを積み、未来に備えて真の命を得るための土台を築くようにと、勧められているのです。

【心の目を凝らして】

◆必要なものを求めるのと、それ以上に貪るのとは、なかなか微妙なところですが、慎重に心の目を開いて、このいざないを避け、むしろ信仰の戦いをりっぱに戦って、神様のみ心である永遠の命を満たして頂き、来るべき未来に備えて良い土台を築く者となりたいと思います。それが私共の戦いであり、神様が何よりも期待されるところです。

若い伝道者テモテに対する第１の手紙の締め括りのお言葉はこれです。私共もまた、こんにち自らを慎み、様々のいざないを避けて、神様を追い求め、豊かな永遠の命を満たして頂く者でありたいと願います。ではご一緒にお祈りしましょう。

（1990.1.3.19:00　聖会９）

第１０回〈1990年1月4日、午前10時〉

神がまず愛して下さった

（聖書＝マタイによる福音書第２２章３７／４０節）

【最後の週の論争】　１４１

【辞書をひく
（心・精神・思い・力・尽くす）】　１４２

【審判の言葉の間に無限愛】　１４３

【愛されるという負債】　１４４

【神様を愛するとは】　１４５

【事実がある事と感謝する事は別】　１４６

【自分の事だけ考えると行き詰まる】　１４７

【神様が力を発揮される確かな恵み】　１４７

【使命ある限り支えられる】　１４８

【帰天者の足を引っ張らないで】　１４９

【最早心配は無用】　１５０

「イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」(マタイ22:37/40)

◆イエス様は金曜日に十字架にかけられましたが、その5日まえの日曜日にエルサレムに入城され、最後の週を過ごされました。その週の初めに、宮きよめをされました。そのあと火曜日と思いますが、律法学者たちと様々の論争をされました。これもその中のひとこまですが、パリサイ人、サドカイ人、ヘロデ党の人たちは、イエス様に逆らおうという立場で一致していました。本来彼らはそれぞれ違った立場の人たちですが、「敵の敵は味方」という訳です。

その前には、パリサイとヘロデ党の者が一緒になって、「カイザルに税金を納めて良いでしょうか」という質問を持って来ました。するとイエス様は、彼らの悪意を知って、「偽善者たちよ、なぜわたしを試そうとするのか――これはだれの肖像、だれの記号か――カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」とお答えになりました。

次にサドカイの人たちが質問をしかけて来ました。彼らは、「復活はない」と主張する人たちでした。イスラエル民族の定め(申命記25章 5/6節)に、「兄弟が一緒に住んでいて、そのうちの1人が死んで子供のいない時には、残された妻は、夫の弟と結婚して、はじめに生れた男の子に、故人の名を継がせなければならない」というものがありました。

そこでサドカイ人たちは、架空の話を作って来ました。「私たちの所に7人の兄弟がありました。長男が妻を娶りましたが、子供がなくて死にました。弟は彼女と結婚しましたが子供がありません。7人の兄弟とも同じことになり、最後にその女も死にました。すると復活の時には、この女は誰の妻になるのでしょうか」というのです。「実際に死者の復活という事があれば、こんな不都合が生じるではありませんか――したがって復活はないのです」という訳です。

しかしイエス様は、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。甦りの時には、娶ったり、嫁いだりすることはない。彼らは天にいる御使のよう

なものである――あなたがたは聖書も神の力も知らない為に思い違いをしている」と答えられました。

それを聞いてパリサイ人が一緒に集まり、１人の律法学者を派遣して、イエス様を試そうとして、このような質問をしてきた訳です。

◆当時、律法には六百数十項目があったそうです。したがって律法学者たちの間では、その軽い重いという論争が盛んに行われていたようです。しかしイエス様は、そういう事には係わりなく、「神様を愛し、人を愛する事が、すべての基本であって、この２つの戒めに律法全体と預言者とが、かかっている」と仰せになりました。

ここに、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして――」とあります。またある所には、「力をつくし」ともあります。そこで「つくす」とは一体どういうことであるか、またその前に、「心、精神、思い、力」とは何であるか、辞書を引いた訳です。

「心」とは、「精神作用のもと」「知、情、意の総体」、あるいは「気持」と書いてあります。

「精神」とは、「心」「魂」「能動的な心の働き」とありました。

「思い」とは、「自分が思う心の働き」「何かに賭ける気持」とあります。

「力」とは、勿論筋肉のパワーもありますが、「気力」「精神力」と言う訳が出て来ます。

「つくす」と言うと、「ある限りを出す」「自分の持っているものを無くしてしまう」ということです。

要するに、「能動的」になること――「そういう気持になったらそうしよう」と言うことではなくて、好きになれなくても、何とかして好きになろうとする、あるいは「進んで第１とする」という事です。従って、「他のものを廃する」ということになります。「自分の全部の気力をある限り出す」――それを神様は求めておられるのです。神様は私たちに対して、一方的に犠牲を強いられる訳ではなくて、神様ご自身が、先ず私たちの為につくして下さったのです。

◆エレミヤ書31章 1/6節、朗読。これはエレミヤ書の中でも、非常に特異な部

分であると思います。エレミヤという預言者は、滅亡とか捕囚の審判を預言した人です。しかしこの前後は、捕囚から解放され、慰められるという希望の預言をしています。

「つるぎをのがれて生き残った民は、荒野で恵みを得る」とありますが、「つるぎをのがれる」と言うと、バビロンやアッスリヤの捕囚から逃れるという意味もありますが、イスラエル民族が出エジプト後、荒野で乏しい時に、一筋に神様に頼ったことが、実は幸いなことであったということもかけて言われていると思います。その中でイスラエル民族が安息を求めた時、神様は、「遠い天の果からでも召し集めて下さる」とおっしゃるのです（申命記30章1節から）。

イスラエルが心から悔い改めるならば、主は遠くから彼に現れる――放蕩息子を迎える父親が、走り出て息子を抱きしめ、言い訳も聞かずに、「早く最上の着物を持ってきなさい。御馳走を作って楽しもうではないか」と言ったように、神様は彼らを再び立てると言われているのです。「限りない愛をもってあなたを愛している」とあるのですから、神様が走り出て抱きしめるように、私たちを迎えて下さるというのです。

一昨日でしたか、午後の集会が終ったあと、少し早い時間に食事をしていますと、レンブラントの絵についてのテレビ番組があっていました。私は黙示録３章の、「扉を叩くイエス様」を主題にしたレンブラントの絵を思い出して、それが出るかと期待して暫く見ていましたが、それは出ないで、放蕩息子の絵が出てきました。私はその絵を初めて見ました。お父さんの表情、子供の惨めな有様――ぼろぼろの服、跪いている足の裏が見えますが、片方は裸足、片方は口が開いた靴を履いて、お父さんがその手で息子を抱きしめている、彼の目はあまり見えないようで、あらぬ方を見つめています。

そういう表情を見た時に私は、神様が私たちをどんなに愛して下さっているかを知りました。放蕩を重ねて来た息子に対して、言うことは限りなくあるでしょうが、それには何も触れず、ただただ喜び迎えているその姿を見た時に、私はすぐ詩篇 130篇を思い出しました。

「もろもろの不義に目をとめられるならば、だれが立つことができましょうか。

しかしあなたには、ゆるしがあるので、人に恐れかしこまれるでしょう」とあります。

神様がそんなにして、私たちを進んで愛して下さる御愛の大きさは、どんなに大きいものであるか―――それは、エレミヤの時代の事実であると同時に、こんにちの私たちに対する雛形であると学んだのです。

あの当時、捕囚からやっと解放されて、神様に対して何とかしてと柔らかい気持で求めるように、こんにち私たちが様々な罪の奴隷の中から解放されて、自らの非を悟り、「すべてはあなたから離れた事によるのです。ですからどうか、憐れんで下さい」と神様の前に謙虚に出て行くならば、どんなに大きなご愛を注がれるだろうかと教えられたのです。

冷たい人間でも、相手の人の事を真剣に考えると、どんなにでもして上げようと思います。しかし神様は人間とは違います。私たちに対してどれ程の御愛を注がれるか―――「限りなき愛」とおっしゃる意味が良く分かるような気がします。神様は、「言い尽くすことが出来ない」とおっしゃっている訳です。

ヨハネ福音書3章には、有名な「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった―――」というお言葉があります。その「賜わったほどに」という所です。神様はほかに表現のしようがありませんから、そのように言われている訳です。神様は私たちに対しても、そのように大きな御愛を注いで下さっていると教えられたのです。

私たちは、「神様を愛する」「つくす」などと言い、ほんのちょっと愛すれば、大変愛したように思いますが、神様は、「足りない」とは言われません。「お前はこんなところがあったではないか」とか、「昔はこんなだった」ともおっしゃらないで、無条件で私たちに手を伸べて下さる―――これは何と大きなことであろうかと思いました。私たちはそのような大きな神様の御愛にお答えするところから、すべてが始まると教えられました。

◆ローマ13章8/10節、「互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』など、そのほかに、どんな戒めがあっても、結局『自分を愛

するようにあなたの隣り人を愛せよ』というこの言葉に帰する。愛は隣り人に害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである」とあります。

先程マタイのほうには、「律法と預言者とが、かかっている」とありましたが、神様の言おうとされる所は、神様から愛されたように、神様を愛し、お答えするようにということです。出来ないながら、何とかしてと神様を愛する―――そして神様から愛されたように、隣り人を愛するように―――これが神様の言わんとされるところです。

ここには、「互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない」とあります。愛されることは、支払いきれない無限の負債であって、それによって私たちは愛することを知り、それによって私たちは、神様の前において律法を完成する者となります。

◆9節に、「―――そのほかに、どんな戒めがあっても―――」とあります。先ほど六百数十と申しましたが、十戒のあと、派生した様々な戒めを数えるとそのようになると言われます。こんにちも、ユダヤ教の人たちは、それを守ろうと努力している訳です。それに、各時代の解説などが付け加わることによって、いよいよ増えて行くということですが、たとえ何百、何千の戒めがあったとしても、結局、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」―――神様からそれほどまでに愛されたように、神の愛し給う方を愛していく―――そこにすべての事が完成されると言われているのです。

【神様を愛するとは】

「神様を愛する」とはどうすることかと言うと、ヨハネ14章に、「わたしの戒めを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である」とあります。つまり聖書のお言葉を、神様が私に与えて下さったお言葉であると信じて、心にこれを守る事が神様を愛することであって、その時に私たちは一層神様を知る事が出来る訳です。

人間関係でも、遠くから見ているだけではなかなか分りませんが、近付いて交わりを持つと、その人を知ることが出来ますから、ますます近付いて行くようになります。それと同じように、限りない御愛を注いで下さった方に対して、私たちがお答えして行くと、信仰から信仰へと進ませて下さるのです。

◆神様が私たちを愛して下さったという事実がある事と、私たちが感謝するかどうかは別問題です。実は私は結婚して丁度30年になります。今回聖会に出席されている、Ｋさん御夫妻に仲人をして頂きました。大変遠い所から、わざわざお出で頂いて、ご迷惑をおかけしました。ところがその後、しばしば心が痛むことがある訳です。と言うのは、その後私たちは、２組の方々の媒酌をさせて頂きました。１人は山口におられるＡさんご夫妻、もう１人は京都のＩさんご夫妻です。ところが、このお２組の方々は、事あるごとに私たちに対して感謝をされる訳です。するとその度に、「Ｋさんに申し訳ない」といつも刺されていました。

今朝、強く教えられましたのは、神様が私たちを愛して下さっているという事実があっても、こちらの気持がそこに行かない――具体的な行動をもって感謝しようとする気持がなければ、決して感謝は出来ないものだと思いました。

先程、色々な言葉について辞書を引いた事を申しましたが、そのとき、「能動的」という言葉がありました。自分はどっかり座っていて、神様が心を変えて熱くして下さったら、「じゃあ、神様に感謝しようか」とやっていたら、神様に従う事は出来ません。事実があっても、進んで感謝する気持がなければ、決して行動は出て来ないと反省させられたのです。

私たちはこんにち、「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」とおっしゃる神様に向かって、何としても進んでお答えする生涯に踏み出して行きたいと思います。そこで初めて神様を知ることができ、神様を愛する事が出来るのであって、「出来ないから」と言ってじっと退いていれば、いつまでも出来ません。

いつも思うのですが、小さい子供が、「歩けるようになったら歩こう」と言っていたら、絶対に歩けません。倒れても転んでも、とにかく勇敢にドンドン歩いて行くから、歩けるようになる訳で、私たちの信仰も、神様に向かって１歩２歩踏み出して行くことで、失敗があれば正して下さるし、出来なければ助けて下さるのですが、最初の気持がなければ、何事も始まらないとしみじみと教えられました。

◆マタイ22:34/40にかえる。「愛は惜しみなく与える」と言われるが、また同

時に、「愛は惜しみなく奪う」とも言われます。神様は私たちに対して、一切のものを与えて下さいましたが、私たちの全部をほしいと願っておられます。

ヨハネ福音書19章の十字架の場面で、イエス様は最後に、「わたしは渇く」と言われています。これは出血多量で水分がほしいと言われたのではなくて、私たちの魂が神様に返って欲しいと言うみ心をお話しになったのです。

私は、自分の一切を注ぎ出して、神様にお答えして行くという事は、私たちの生きるただ一つの道だと思うのです。他の道は結局は行き詰まるかも知れない。求めた事が満ち足りても、満足が出来ないかも知れません。

しかし左の標語に、「受けるよりは与える方が、さいわいである」とあります。私たちが自分の事だけ考えているならば、必ず行き詰まると思います。その生涯はどこまで行っても本当の感謝はないでしょう。しかし、自らを与えて行く——殊に神様に対して自分の一切をささげて行くことは、私たちにとって最も素晴らしい生き甲斐となります。

【自分の事だけ考えると行き詰まる】

神様に対して、「自分の命を失う者はそれを見いだす」とありましたが、私は自分の生涯を振り返ってしみじみ思います。その逆説はまことに素晴らしいものであるという事です。一切を投げ出して惜しくありませんと、神様に信頼して行くと、神様がご自分の全部を注いで責任を持って下さいます。また、将来について大きな希望を与えて下さいます。これは実に素晴らしいものです。

◆ひと口に希望と言っても、色々な程度のものがあります。私は大言壮語する訳ではありませんが、神様のほうが私たちに目をとめて、「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心を全うする者のために力をあらわされる」(歴代下16:9)と言われます。

その期待は、勿論、足元の戸畑の伝道も必要ですが、祖国についても、世界についても、あるいは、この時代を越えたのちの時代についても、神様は私たちに対して大きな期待をかけていらっしゃるのではないかと教えられました。そのような大きな望みを与えられて大変感謝しています。

それは、「自分の目の黒いうちに」とか言うものではありません。アブラハムは、信仰を持ってのちの時代の為に祈りました。こんにちまで約4000年になりま

【神様が力を発揮される確かな恵み】

すが、「アブラハムの受けた祝福がイエス・キリストによって異邦人に及び、わたしたちが信仰によって約束の御霊を受けるため」（ガラテヤ３章）とあります。私たちはいま先輩の祈りに答えられてこんにちある事ができる訳です。

ですから足元は勿論１歩々々着実に踏まなければなりませんが、同時に神様の前に大きな希望を持って、生かして頂いています。創世の初めに人間が造られ、「すべてのものを治めさせよう」と言われました。「治める」とは、自然を破壊したり、勝手に動物を殺したりする事ではなく、神様の前に手を挙げて祈り、それぞれのものに所を得させ、神様を崇めさせるように執り成すのが「治める」意味であります。まさに私たちは今、その使命を与えられている者です。決して創世記はおとぎ話ではありません。神様のお言葉は、時代と共に変るものでもありません。

それと同じように、いま私たちに対して与えられている約束に従って、信仰を持って祈って行く時、のちの時代についても大きな希望を抱かせて下さるのです。

◆私も時には疲れたり、どこかが痛かったりする事がありますが、しかしその時に、「これはどこかの具合が悪くなって来たかな」とは考えません。チクッと痛ければ、かえって「ああ、有り難うございます―――何かの異常が起りかけても、神様はサッとこれを癒して整えて下さる」と感謝するのです。私たちの肉体の中では、どんなに微妙な制御が行われているか分かりません。そのような神様の知恵と力をもって私を保って下さっていると感謝するのです。

また夜中に目覚めた時など、胸に手を当てて感謝をします。心臓の鼓動を感じると、非常に厳かな思いがします。「私はいま神様から生かされている」と実感するのです。また「今朝、こうして元気に起きる事が出来たのは、神様が『今日も生きよ』と使命を与えられているのだ」と感謝します。そして毎日々々を力を尽くして行きます。

「死ぬ」という事について。先日、クラス会から会報が送られて来ました。同期生の中に生命保険会社を退職した人がいて、お得意の計算をして、我々のクラスの毎年度の残存人員を予測した訳です。94歳になった時は６人残るという計算になっていました。

私はそれを見て、「ああ、これは大変だ。自分も段々尻すぼみになって行く」とは考えません。私にとって「死」はすでに無くなってしまったようなものです。創世記５章に、「エノクはメトセラを生んだ後、300年、神とともに歩み、男子と女子を生んだ―――エノクは神と共に歩み、神が彼を取られたので、いなくなった」とあります。

また「エリヤは、火の車と火の馬に守られて、つむじ風にのって天に昇っていった」と書いてあります。またモーセは、「死んだとき 120歳であったが、目もかすまず気力も衰えていなかった―――こんにちまでその墓を知る人はない」と言われています。

私はそのような人と比べて、自分がどうだという訳ではありませんが、神様が私の責任を持って支えて下さっていますから、使命が終った時には自分の出て来た所に帰る訳です。

神様の事を認めない人たちは、下の方のどこかから出て来て進化の頂点に立って、動物　としての生活を送って、やがてどこかへ落ちて行く―――「ああ悲しいかな」ということではありません。私たちは上から来て、使命の間、すべてのものを預けられて、それが終った時には再び出て来た所に帰って休ませて頂くのです。

◆ですから私は、今、皆様にお願いしておこうと思うのですが、もし病気になった場合、（痛いとか苦しとかはあるでしょうが）、「どうぞ神様、癒して下さい」と、あまりお祈りして頂くと困ると思うのです。それはたとえば、旅先から疲れてやっと自分の家に帰って休もうと言う時に、「ちょっと帰らないで」と言われたら困る訳です。

それ程に、私にとって「死」は何でもなくなってしまいました。季節の変り目に衣替えをするように、肉体を置いて神様のもとに帰ります。その時には、先程ありましたように、神様の大きな報いがあります。神様から忘れられることはなく、永遠に覚えられます。「善かつ忠なる僕、汝はわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」と備えられた所に休ませて頂く―――これは私にとって最も大きな報いであって、言葉で言い尽く

すことが出来ないものです。すべてのものは消え去って行きます。そのためにみな一生懸命に「何か自分の生きたあかしを残して行こう」と考えますが、しかしみな無くなってしまいます。

◆しかし神様の土台石には、「主は自分の者たちを知る」と刻んであるそうです(2テモテ２章）。それを思う時、私自身は消えて無くなってもかまいません。また誰から認められなくてもかまいませんが、神様は必ず報いて永遠の休みに入れて下さる――これは大変素晴らしいことだと思って感謝でいっぱいです。

すると、先程の「痛い」とか「疲れた」とかがちょっとありましても、すぐ力が与えられて、今は御覧の通りに支えられています。先日も、ある方から、「先生も決して若くはないのですよ」と言われましたが、私は元気であろうと、弱かろうと、或いは召されようと、私にとってはそれは最早心配の種ではありません。心配なさる方はあちらにおられる訳で、私にとって最善の事をして下さいます。私個人の為と言うよりも、神様の栄光の為に最善ををなさって下さるのです。それによって私は今、生かされている訳です。

今年、神様は私たちに対して、自ら尽くして、私たちに尽くすことを期待して下さいました。この事を心にとめて、神様の御愛にお答えする生涯に踏み出したいと願う者です。ご一緒にお祈りしましょう。　(1990.1.4.10:00　聖会10)

第１１回〈1990年1月4日、午後2時〉

個人的に招かれている

（聖書＝マタイによる福音書第１６章２４節）

【戸惑うことはない私に従ってきなさい】　153

【常に新しい事を行われる神】　154

【命の営みの素晴らしさ】　155

【イエス様はいらないと言っていた者が】　156

【十字架を負えば服従はやさしい】　157

【今、私を呼ばれている】　158

【死は勝利に飲まれてしまった】　160

【眠った者が先に引上げられる】　161

【自分を切り裂いて謙虚に従う】　162

【先頭に立たれるご熱心の神】　163

「それからイエスは弟子たちに言われた、『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい』」

（マタイ16:24）

◆弟子たちはイエス様から、「わたしのことをだれと言うのか」と問われた時に、ペテロは、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」とお答えしました。これは神様のみ心にかなった事であり、正しい信仰の土台ですから、「この信仰の上にわたしの教会を建てよう」とおっしゃいました。教会とは建物ではありません。神様を信じてお仕えする者の集りですし、教会の構成分子である私たち１人々々が、それぞれ小さな教会であって、この信仰の上に神様が建てて下さるものです。

自分が頑張って、教会に行き、聖書を良く覚え、讃美歌が上手になって、クリスチャンらしくお上品にでもなれば、それが神様のみ心にかなうかと言うと、そうではない訳です。神様が上から開いて下さる時に、初めてその土台が出来るのでありますから、ペテロは大変幸いであった訳です。

ところが、すぐそのあとにイエス様は、ご自分がいよいよ十字架にかかって、３日目に甦る事を話し始められますと、弟子たちはびっくりして、「そんな事はあっては困ります。杖とも柱とも頼ってきたイエス様が殺されてしまったら、私たちはどうなるでしょう。私たちは困ります。悲しいです。先生が好きです」という訳で、ペテロはイエス様をとどめました。

するとイエス様は、「サタン（悪魔）よ！お前は神の事を思わないで、人の事を思っている。わたしの邪魔をするものである」と厳しく叱られました。「わたしは父なる神様に従い、使命を果す為にこの地上に遣わされた者である。自分が生きるため、あるいは威張るため、仕えられるためではなくて、むしろ逆に人の世のどん底に下って、人に仕え、自分の命までも与える為に来たのであって、私をとどめてはならない」と叱られました。そして弟子たちに向かって、「私に従う者はかくあらねばならない」とお命じになった訳です。

それは「自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」という事でした。これは弟子たちにとって非常に大事なことでありましたし、私たち

にとっても信仰生活の大原則であります。

私たちはかつての生涯からすっかり変えられ、救われたから、これでよいと思いますが、私はそれだけでは十分でないと思ったのです。あるとき大きな救を受けた事も事実ですが、神様のお言葉は生きたお言葉です（先程も霊感賦で、「生けるパンなる主よ」と歌いました）。と言うことは、それを発せられる神様も生きた方です。決して死んだ方、博物館の中に収まっておられるような方ではなくて、今も生きて、私たちを支え、私たちに語りかけて下さっている方です。

◆つい30分ほど前ですが、私がこの集会の為にお祈りしていた時に、神様は私に強く迫ってこられました。それは、１つのお言葉を与えられて、お話ししようと思っていますと、何回か前の集会で同じお言葉があったことに気付きました。すると、私はすぐその事を考える訳です。あの時に、ああいうことを学んだ。聖書のここの所を引いて、こういうふうに教えられた。自分でもある程度メモのようなものを作っていますから、それを見てすぐそれに拘る訳です。

ところが神様は私に向かって、「それは駄目だ。私の要求はそうでは無いのだ。私はいつでも新しくあなたに語りかけているのだから、あなたも私に対していつも新しく答えてほしい」とおっしゃって、私が何がしか準備していた事を全部崩されました。

ですから私は、「申し訳ないことでした。神様、どうか今、新しく教えて下さい―――私が今ここで神様にお従いして、生きた信仰の道を一歩踏ませて頂きとうございます。この集会は、出来上がった原稿を読むような集会ではなくて、生ける方がお導きになりますように―――私はどのように従ったらよろしいでしょうか」と待ち望んでいました。そのときに、「自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と御言葉を与えられたのです。

「自分があのとき恵まれた―――大変良かった。もう一度お話ししようか」―――神様がそのように導かれる事もあるでしょうが、神様は、「それに頼ってはならない。あくまでもわたしが聖会の主人公であり、教会の頭であって、お前を生かし、自由に用いようとしているのだから、どんなに過去の良いものであっても、一応捨てなさい。そして自分の十字架を負うて従いなさい。お前がその古い

ものに拘って、私を拒んでいる罪を取り除いて頂きなさい」と私に十字架を示して下さいました。

「あのイエス・キリストが十字架にかかったのは、このお前の罪のためなのだ。悔い改めなさい」と迫られましたから、私は、「そうでした。あの十字架の現場に立って、私はどこにいたのだろうか。私の為に、私の身代りとしてイエス様が十字架にかかって死んで下さって、『父よ、彼らを許し給え。そはその成すところを知らざればなり』と執り成して下さいました。それだから私はバラバのように無罪放免されました」と悔い改めたのです。

私は今、神様の前に、決してあの時のことを考えないで、「いま神様は何を教えていらっしゃるでしょうか。どうぞ、生けるお言葉に従って、いま一歩を踏ませて頂きたい」と待ち望んでいる訳です。

信仰とは、儀式や形式———このようにしたらクリスチャンらしい、だからあの人は良いが私は駄目だ———そういう物差しではかるものでないと思うのです。信仰とは、神様が生きていらっしゃるのですから、そのお言葉にいつも新しく従って行く、するとその通りになって行くという事です。平面的ではなく立体的と言うか、静的ではなく動的と言うか、神様はいつでも新しい事を行って下さる方であると教えられました。

人間は、同じ境遇の中に長く生きていますと、視野が狭くなって、「これはこういうものだ」と思って小さく固まってしまいますが、神様のなさる事は非常に驚いたことで、しかもいつでも新しい事を行っていらっしゃるのです。

私たちの肉体の複雑な生命現象も勿論ですし、時間もそうだと思います。時計の針は12時間すると同じ所に来ますから、「また何時になった」と思います。「夜が明けた。また正月が来た」と思いますが、実は全部がただ一度だけの時であり、流れ過ぎれば絶対に帰らないものです。「今」の時は、一時間前の「今」とはまた違います。神様が私たちに与えて下さっている命はそういうものです。

◆私は、人体の素晴らしい機能の話などがありますと、興味を持って聞きます。2,3 日前に、何かの話で、肝臓機能の素晴らしさについて聞きました。人間の肝臓は最大の臓器と言ってもせいぜい 1-2kgぐらいの臓器ですが、その機能は大変

素晴らしいものだそうです。ある化学者が、これと同じ程度の働きをする工場を作るならば、どれぐらいのものになるかを設計してみたそうです。１つの肝臓が100日ぐらい働くのに相当する様々な化学処理をするものとしますと、工場の敷地が 300平方㌔㍍、 100兆円ぐらいのお金がかかるという事になりました。その上処分の出来ない猛毒廃棄物が3000㌧出来るそうで、実際には動かす事が出来ないであろうという話でした。

では実際の人間の体ではどうなっているかを調べて見ると、廃棄物を処理する仕組みがあって、それを胆臓に送って胆汁（消化液）として用いるそうです。それ程の事を、熱も加えず電気も使わない、音もしないでやり遂げてしまうのですから大したものです。

そういう話を聞いた時に、「人間は生れたから生きているのは当り前だ」などと絶対に言えないと思ったのです。肝臓ひとつだけでもそれ程ですから、他の臓器がそれぞれどんな働きをし、互いが結び付いた状態でコントロールされているか、実に素晴らしいものです。殊に脳の働きなどはとても私たちが知り尽くす事は出来ません。しかも毎日新しい事が行われており、外界の変化に対応して、最適に制御されているのです。

もし私たちの体が、全く出鱈目に（サイコロを転がしたように）、勝手に動いていたら、私たちは生きている事が出来ないと思います。しかし明らかに、神様（お一人）のご意志によって、私たちは今保たれているのです。怪我をすれば肉が盛り上がって治りますが、元の所まで上ればそれ以上には膨れません。実に不思議と言えば不思議で、神様の生けるわざは、何と驚くべきことだろうかと教えられました。

◆神様のわざはいつも新しい事が行われているのに、私たちはそれを当り前と思って、「神様は有ると思えば有るが、私は信じないよ」と言う人がありますが、大変な間違いだと思います。ここにあるお言葉は、神様が私たちに向かって呼び掛けておられるお言葉であって、「自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と、はっきりしたご意志を持った方が、私たちの罪を許す為にひとり子を十字架に付けて身代りとして下さいました。そして私たちを「許す」

とおっしゃっているのです。私たちの最大の罪は神様を神様として認めなかったことです。

私たちは、「そんな事はあるものか」と思いますが、人間に神様の事が分からないのは当り前です。私たちはあまりに小さな者であり、神様のみ思とそのみわざはあまりに偉大ですから。しかし神様に従って見ると、確かに変って来るのです。

私の生涯もそうでした。イエス様を信じなかった時、私は自分の罪をそれ程意識していませんでした。そして教会に行ったはじめは、「イエス様とは何の為にあるのだう」「神様に仕えるには、神様と私があればよい。第３者であるイエス・キリストって一体何だろうか」と申し訳ないことを考えていました。

しかし次第に神様を知って来ると、自分はズカズカと神様の前に出られるような人間ではない、どんなに正しい行いをしようとしても出来ないし、悪い事はやめようと思ってもやってしまう。そういう者であると知った時に、私は神様の前に恐れました。こんな汚い者は到底教会に行く事が出来ない。私は信仰をやめようかとも思ったほどです。しかしそんな私の為にイエス様が十字架にかかって、私の罪を許して下さったと知りましたから、私はすぐに教会に、「洗礼を受けさせて頂きたい。そんなに私を愛して下さる方があるなら、私もその方に生涯お仕えして行きたい」と申し出て、バプテスマの準備をして頂いた訳です。

こうして洗礼を受けた私は、それまでの重苦しい思いが全部解かれて、「空は晴れ渡り、悲しみはさらになし……」という歌のようになりました。「これだった――私の間違いのもとは、神様を神様として認めなかったことにあった」と分かりました。確かに私の生涯はすっかり変り、「神様は確かに生きていらっしゃる。聖書のお言葉は命のお言葉である」と悟らせて頂きました。

◆「自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」とはむつかしいことのようですが、非常にやさしいと思ったのです。その中心は「十字架」です。私たちが十字架を立てて、「神様、これで罪を許して下さい」と言った訳ではありません。私が十字架を立てるどころか何の事か全く知りませんでした。イエス・キリストはいらないと言っていたような無知な者でした。

しかし、神様がそんな私の為に十字架を立てて罪の許しの道を開いて下さいました。「地の果なるもろもろの人よ、われを仰ぎのぞめ、さらば救われん」とおっしゃるのですから、「はい、有り難うございます」とお受けすると、罪が許されて、自分を捨てることが出来ます。かつて突っ張っていた自分は、生きていません。すでに十字架の上につけられて殺されている者であって、イエス様の恵みによって今生かされている者であります。

そうすると、「わたしに従ってきなさい」とおっしゃるのも、イエス様が私たちの内に、「宿りかつ歩む」とおっしゃって下さるのも、素直に聞き従って行くと、内から導いて下さるのです。ですから「はい」と言うことを聞くと、全部が遂げられてきます。「私の為に、主が十字架にかかって死んで下さった。有り難うございます」となれば、私たちはみ心に従って生きる事が出来ます。

「俺が、俺が」とやっていた時には、自分中心ですから強くて、思う通りに出来て幸いな筈ですが、実は逆であって、大変な苦しみであり、一旦折れるとそれっきりになってしまいます。そういう者でしたが、今度、神様によって支えられ、生かされ、責任を持って頂くと、そういう事がありません。どんなに倒れそうになっても、「私のような者を救って下さるから有り難うございます。憐れんで下さい」と信頼して行くと、日毎に支えて下さるのです。

ですから、神様のお言葉は生きたお言葉であり、十字架は私たちの信仰生活の基礎です。教会に行くとどこでも十字架がついていますし、また聖徒パウロは、「自分が最も大切なこととして、あなたがたに伝えているのは、自分も受けたことである。またそれはイエス・キリストが私の罪のために十字架にかかって、死んで甦って下さったことである」と言いましたが、そのように私たちが、神様の前に、イエス様の十字架に信頼して行くと、信仰生涯が楽に開けて行くのです。

【今、私を呼ばれている】

神様のお言葉は決して大衆一般に語られているものではありません。どんなに大勢の人が集会を持ったとしても、神様のお言葉は個人に向って語られているものです。それと、「今語られている」ということです。

◆ヨハネ21章 15/25節、朗読。これはペテロの召命です。ペテロは、弟子たちの中で年長者でもありましたし、性格的にも、悪く言えばオッチョコチョイで、

すぐ飛び出しますから、失敗する時は派手であります。しかしこれは私たちにとって大変幸いな雛形となります。共にいた何人かの弟子たちにとってもそうであった訳です。「シモンよ」と言われた時には、ほかの弟子たちはみな自分に語られた言葉として聞くべきでありました。そのことを今こうして読んでいる私たちは、［ペテロ→即ち弟子たち→即ち私たち］、［昔の事→即ち今の事］として読まなければならないと教えられたのです。

ペテロは自分が３度呼ばれた時に、「どうしてそんな事をおっしゃるのだろうか。私があなたを愛しているのはお分かりではありませんか」と言いましたが、イエス様はペテロの将来についてお話しになりました。「あなたは将来、自分の行きたくない所に連れていかれる」と殉教を予告されました。

ペテロは、「従ってきなさい」と言われましたから、「はい」と言いましたが、うしろを見ると、イエス様の愛しておられる弟子（これはヨハネだそうです）がおりましたので、「先生、私には『従ってきなさい』とおっしゃいましたが、この人はどうなのですか」と聞くと、「たとい、この人に私が再び来るまで生き残っている事を望んだとしても、あなたには係わりのないことである。あなたは、わたしに従ってきなさい」と言われました。ペテロはその時は半信半疑でしたが、踏み出して行くうちに、彼らは復活から40日後に昇天を見送り、更にその10日後に、待ち望んでいた約束のペンテコステの聖霊に満たされて、彼らの「使徒行伝」（＝「聖霊行伝」）が始まった訳です。

私はこれらを見た時に、神様は私たちに向かい、個人的に呼ばれていると思ったのです。私たちは他人の事をすぐ考えます。自分の事は見えないで、人のことはすぐに批判をしたがります。また批判する事は得意であります。

自分は相手より 100倍悪くても、同じぐらいに見えるものです。自分のほうは 100倍悪いのはそれぞれ理由があって、「まあ、これは仕方がない」。ところが他人の事は、 100分の１であっても、大いに非難すべき理由があるという訳です。それくらい人間の目はあてにならないものであります。

しかし、主は私たちに対して、先ず「私に従ってきなさい」と求められます。「もしあなたが、わたしに従って光の中を歩くならば、自分の目にある大きな梁

を取り除く事が出来、はじめて他人の目にある塵を取り除く事も出来る」と言われている訳です。

主が私たちに対して今、呼び掛けらておられる———それは、聖書のお言葉をもって呼びかけられる、またはお祈りしている時に御言葉を与えられる、あるいは、集会において御言葉を与えられるという事もあるでしょう。あるいは、讃美歌を歌っているうちにその１節で呼び掛けられるということもあるかも知れません。私たちに静かに待ち望む姿勢があると、色々な機会を通して働いて下さるのです。

それは、昔のことでもなく、将来のことでもなく、「あなたは今、わたしに従ってきなさい」と無条件でスーッと従うことを求めておられる訳です。

もし私たちが、「いま私は従います」という生涯を連続して踏んで行くと、確かに、「死を味わわない生涯」に入れて下さるのではないでしょうか。この所とマタイ16章を照らし合せて、16章28節にあったのはヨハネのことではないか、ヨハネは黙示録において、イエス様が再臨される黙示を見たのだから、その事を言われたのではないか、と言われています。

しかし、私たちが絶えず、「今、私に呼び掛けられている」という生涯を歩むと、私たちはこの地上にありながら、再び死を見ない生涯に入れて下さる———ヨハネが遥かに黙示を望んだようにではなく、自分自身が死を乗り越えてしまって、神様の前に立つその日まで、私たちに少しの恐れも無くなってしまう———そのように教えられたのです。次に「死に勝つ」ことについて、１つ読みたいと思います。

【死は勝利に飲まれてしまった】

◆１コリント15章 50/58節、朗読。主が再びこられるとき、その時までにすでに眠っていた者は、甦って終りのラッパの響きと共に一瞬にして変えられると言われるのです。私たちは、物事を連続してしか考えられませんから、肉体が朽ち果て、それが甦ったとしても、どうなるのだろうかと考える訳ですが、神様は、ラッパの響きと共に、一瞬にしてその不連続な所を繋いで下さるのです。そして私たちは朽ちないものに甦らされ、変えられて天に迎えられます。その時に死は勝利に飲まれてしまって、死という節目はすっかり無くなってしまう———なぜ

かと言うと、死の中には、罪という棘があり、その棘の中には、律法という強い支柱が入っているからです。

しかしイエス様が私たちのすべての罪の為に十字架にかかって下さった事によって、罪の刑罰は全部イエス様の上に加えられてしまいました。そこで「今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」（ロマ８章）のです。これによって、イエス様を信じた私たちは「死」を少しも恐れなくなります。これは理屈ではなくて実際にそうです。

そのあとに、「だから、愛する兄弟たちよ、堅く立って動かされず———」とあります。世の中の言い伝えに従い、あるいは人の常識に従って「死ぬ」という事は、不吉なこと、不幸なことであり、こんなことが多く起ると、「呪われているのではないか」と考える———それをやめて、「いつも全力を注いで主のわざに励みなさい」と勧められています。

全力とは、頑張る意味ではなくて、イエス様のお言葉を信ずることにおいて力を尽くし、堅く立って動かないことで、その信頼に対しては必ず報われるのです。それこそ本当の勝利です。この世においてはすべての希望を飲み込んでしまうと言われる「死」に対して、私たちが勝利を得る事は、地上に最早何も恐れるものはないという事です。

これは世の中の常識からするとあまりに強い生き方で、これでよいのだろうかと考えた事がありますが、神様が私たちの一切を取り除いて勝利を与えて下さったのですから、どんなにでも強く、どんなにでも進んで行けばよろしいと思いました。神様はまた、「堅く立ちなさい」「いつも全力を注いで主のわざに励みなさい」と、右を見たり左を見たりしないで、神様に向って目を注ぐように勧められております。

◆１テサロニケ４章 13/18節、朗読。これは「死」の問題について、失望しかかっていた人に送られた手紙です。イエス様を信じて亡くなった人も、滅びてしまったのではないだろうか、という恐れを持っていた人がありました。またある人々は、「もう自分たちは死んでしまえばおしまいだから、思う存分勝手な事をしよう」と言う人も出て来たようです。そういう人々に慎みを勧めたお言葉です。

先に主にあって眠った人々は、主の再臨を生きたまま迎える人よりも先に甦って、そのあとで、生き残っている者が、彼らと共に雲に包まれて引き上げられる―――そういう約束です。イエス様が十字架にかかって下さった事によって、私たちは決して忘れられたり、腐り果てたりするものではありません。

イエス様が死人の中から甦られたように、私たちも甦らせられて、神様のもとに迎えられるのです。「こんなことは当分関係がない」とか、「そんな事が本当にあるだろうか。おとぎ話のようだ」と思いますが、神様の約束はまことであって、そこまで行けば分かることです。またそれがどんなに大きな望みであるか、その時に分かると思うのです。

◆マタイ16章24節にかえる。私たちは絶えず神様に対して謙虚にならなければならないと思います。動物園などで山羊の檻を作りますと、高い所へ高い所へと上がって行くと言います。人間の魂も同じで、どんどん高ぶって神様を忘れて行きます。これは申命記8章に断定的に言われていて、大変恐ろしい思いがしますが、「あなたがたは、食べ飽きて、麗しい家を建てて住み、これこれこういうふうになってくると、恐らくわたしを忘れるであろう」と言われています。

私たちの魂は、聖書のお言葉に対していつでも馴れて行きます。同じ聖会の中で、前に出てきたお言葉がもう一度与えられると、もう私は頑なになっている訳です。新鮮な感激がなくなって、「あの時にあんなふうになったから」と考えます。ですから私は神様の前に、いつでも謙虚にならせて頂きたいと願うのです。外科医は患者が痛がっても、ガーゼを引き離して、新鮮な肉に薬をつけます。それと同じように、私はいつでも神様の前に自分を切り替えて、新しく新しく聞き従わなければならないと思いました。

私たちは幼な子ですから、神様のお言葉が語られても、皆まで分かりません。しかし、神様のほうは全部分かっておられる訳です。

聖書に、「今生まれた乳飲み子のように、霊のまことの乳を慕いなさい」とありますが、先ず自分が神様の前にどんな者であるかを悟らねばなりません。お言葉には、「さあ、十字架を受け入れてほしい。受け入れさえすれば―――私はこんなに待っているのだ」と言う限りない愛のお気持が込められているのですから、

いつでも自分を切り裂いて、謙虚に従わなければならないと教えられたのです。

それを私たちにさせて下さるのも、十字架の働きです。「信仰によって信仰を持つ」というとおかしなようですが、イエス様を信ずるのも、イエス様が十字架にかかって、私たちの罪を許し、神様との間の妨げを取り払って下さったから出来ることです。

「聖書を理解するために、最も良い参考書は聖書である」と言われます。「お祈りを習うのに一番良い方法は、お祈りすることである」と言われるのも同じで、イエス様が切り裂かれて下さった事によって、私たちも自らを切り裂くことが出来るのです。

◆この午後も、神様は私たちを息もつかせずに取り扱って下さいますから、なかなか厳しいものです。私がぼんやりしていると、神様がちゃんと整えて下さって、「さあ、私と生きた交わりをしようではないか。私はお前を通して、事を行い、事を遂げるのだから、私の方を向きなさい。お前が私のほうを向かなかったらパイプが詰まってしまう」という訳です。

夜遅くなっても、神様は私をなかなか解放して下さらないことがあります。「それは違う！」と言われると、「はい、すみません。分かりませんから、どうぞ教えて下さい。『己の道をモーセに知らせ、己のしわざをイスラエルの子らに知らせ給えり』とありますから、どうぞあなたの遣わすとおっしゃる道を教えて下さい。『あなたはわが証人である』とおっしゃるから、あなたに私を知らせて下さい。私にあなたを体験させて、神様を現す事が出来るように、どうぞ整えて下さい」とお祈りしていますと、夜中になって急に逆転して、全く新しいことを教えられたりすることがよくあります。

前回の集会で、中間経過を一覧表にしましたが、あれは人間が計画を作ったのではなくて―――勿論、ある程度の目標と枠のようなものは与えられますが、進むにつれて中味が詰まって来ます。時には骨組みも変って来ることもありますが、そのように次々に進ませて頂いた結果であって、一切は神様の導きによるものです。

私共の生涯を人間の物差しで色々と考える時、私たちは恐れますが、主人公で

ある方が、「私に従ってきなさい」とおっしゃるのですから、私たちが「今！」「今！」といつも脱皮して行くならば、神様はどうして私たちの責任を持って下さらないでしょうか。神様は不真実ではありません。

今日も、整えられましたように、ここから新しく、「今、私に語られた命のお言葉」としてお受けして、神様の前に歩み続けたいと願います。では、ご一緒にお祈りしましょう。　(1990.1.4.14:00　聖会11)

第１２回〈1990年1月4日、午後7時〉

まず主にあたえる

（聖書＝使徒行伝第２０章３５節）

【主とその恵みの言に委ねる】　１６７
【主に信頼しているから安心】　１６７
【与える生涯を歩んだイエス様】　１６８
【主にあって施し散らして富む】　１６９
【投げ掛ける生涯の確かさ】　１６９
【年を取ったから従えない？】　１７０
【家族の救のキッカケ】　１７１
【最後の一日が全生涯にまさる！】　１７２
【孫から土産を貰ったら】　１７２
【地球が角砂糖ぐらい!?】　１７３
【だから進化と言うか】　１７４
【どれ程でも恵みに感じて お仕え出来るように】　１７４
【かつて尊んだものを汚いもののように】　１７５
【情報の価値を決めるのは誰？】　１７６
【先ず自分を主にささげる】　１７８

「受けるよりは与える方が、さいわいである」（使徒行伝20:35）

【主とその恵みの言に委ねる】

◆パウロの第３次伝道旅行の終りごろ、エペソの教会の近くの海岸に舟が着きましたので、そこから使を送って教会の長老たちを招き、彼らに訣別の言葉を述べたものです。

これを見ると、神様のみ心がすべてここに現されていると教えられました。「神に対する悔い改めと、主イエスに対する信仰とを強く勧めて来たのである」とありますが、私たちがなすべきことは、まさにこれであって、これが信仰のすべてです。

またパウロは、「わたしは自分の行程を走り終え、神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない」と言っていますが、神様が私たちに与えて下さっているのは、恵みの福音であって、神様がこれを私たちにことごとく与えられたからには、今度は私たちがお言葉に服従する番であります。服従しなければ、聖書のお言葉は決して働きません。

「今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある」（32節）とあります。「後顧の憂い」などと言いますが、聖徒パウロもこの教会の将来を心配すれば、限りないものがあったかも知れませんが、イエス様が教会の主であられる――決して個人が経営しているものではありません――からには、「その主と、その御言に一切をゆだねる」と言うのです。「この御言に、あなたがたが聞き従うならば、御言は命の言葉であるから、あなたがたの徳を立て、御国を継がせて下さる。そこには驚くべき資産が備えられている」――「この主とその恵みの言とに、ゆだねるから私は安心です」と言っている訳です。

【主に信頼しているから安心】

◆昔、ある年老いた姉妹が、たくさんの子供たちのために祈っておられました。色々な立場で、戦いの中にいますが、「それぞれの家庭が主に信頼しているから、私は安心です」と言われておりました。間もなく老姉は召されましたが、祈りに答えて、子供さんたちの中からたくさんの恵まれた人々が起りました。

確かに、人がどんなに立派な教訓を垂れても、個人的な感化を及ぼしても、限

りがありますが、主と、その恵みのみ言葉に従うことは、すべての源であって、生ける方が完成して下さいます。

人間のやる事は、一度だけパッと動かせばそれで終りになります。ロボットのスイッチを入れて、しばらく動くようなものですが、神様から命を与えられる時、すべてのものを生み出して行く事ができます。

◆この35節には、「受けるよりは与える方が、さいわいである」とあります。パウロはそのように生きて来ました。それはイエス様が実践されたものでした。「記憶していなさい」とは、「忘れないことではなくて、その通りに歩むように」という神様の御旨であります。

このお言葉は、福音書の中には出て来ませんから、どういう場合に話されたのか分かりませんが、イエス様のご生涯を見る時に、この通りであると思います。たとえば、ピリピ２章、あるいはマタイ20章を見ますと、イエス様はご自分が神の子（まことの王）として人々に迎えられるためではなく、むしろ人々に仕えるために、世の最低線に下られました。先日クリスマスが持たれましたが、旅館に部屋がないために、馬小屋の藁の中に生れられたのです。

今頃人間の子供でもそんなことはありませんが、神の子であるイエス様が、そのような所にお生れになって下さいました。それは私たちの為に命を捨てて下さることの象徴であった訳です。イエス様は私たちの為に黙々として死んで下さったと言うよりも、むしろ「父よ、彼らを許し給え。そはそのなすところを知らざればなり」と執り成し祈って下さいました。その結果、私たちが救われたのです。

イエス様は死に尽くして、墓に葬られ、黄泉に下られたと書いてあります。そこまで従い尽くされたイエス様を、父なる神様は墓の中から甦らせて天の高みに引上げられました。そしてすべての名にまさる名をお与えになり、いまは永遠の救主として、私共と常に共にいて下さるのです。

イエス様は、正しく裁きたまう方にいっさいをゆだねられました。それに対して神様は真実に裁かれました。イエス様は引き上げられました。それと同じように、私たちが「受けるよりは与える方が、さいわいなり」とのイエス様の足跡にならいますと、神様が同じように豊かに報いて下さるのです。

◆箴言11章 24/26節、「施し散らして、なお富を増す人があり、与えるべきものを惜しんで、かえって貧しくなる者がある。物惜しみしない者は富み、人を潤す者は自分も潤される」とあります。

【主にあって施し散らして富む】

箴言は知恵の言葉であって、短いお言葉の中に、素晴らしい神様の真理を秘められています。この「施し散らして、富を増す」とは、単に、「誰かに施してやったら、また良いことが返って来るかも知れない———」と言う事ではありません。聖書のお言葉ですから、神様のお言葉に従って、自分の身を委ねささげて行くと、それに対する神様の報いが窮めて大きいということです。

しかし、自分を惜しんで、「こればかりは神様にささげる事は出来ません。これが無くなったら、私は生きて行くことが出来ません」と惜しむならば、かえって貧しくなると言うのです。

「人を潤す者は自分も潤される」と言うのも、物貰いに来た人にたくさん物を与える———それが神様の祝福を受ける事になるかというと、必ずしもそうではありません。主の名によってなすことでなければ、神様とは無関係になってしまいます。（教会に、物ごいに来る人について———省略）。

物を只で上げるという事で人を救うことは出来ません。むしろその人を駄目にしてしまうことが多いのではないかと教えられます。ですから「施す」とか「物惜しみしない」というのは、神様に対して先ず私たちが自分の身をささげ、神様の名により、導きに従って行われる事は、たとえ形式がどのようであっても、豊かに報われるのです。そのような報いを望んだ人々が聖書にたくさん記してありますので読みたいと思います。

◆私たちはそんなに自分を捨てて、イエス様に頼ってしまう———全部を投げ掛けてしまったら、果して大丈夫だろうかと不安になりますが、その為にたくさんの手本が示されています。

【投げ掛ける生涯の確かさ】

ヘブル11章 23/40節、朗読。これは神様から喜ばれた信仰の義人たちの物語です。ただ今はモーセの所から読みましたが、その前にもたくさんの人が記されています。それぞれが1言で要約されていますが、この人々の登場する聖書の箇所を読むならば、膨大なものがあって、教えられる所もたくさんありますが、時間

が足りません。聖書にもそう書いてあります。

しかしこの人たちが、なぜそんな苦難の中を忍耐して、或いは自分の命さえも惜しまないで従う事ができたかと言うと、それは「受けるよりは与える方が、さいわいである」とおっしゃるイエス様の道に従って、正しい裁き主を信頼していたからであると思います。神様はその信頼に対して豊かに報い、「これこそ信仰の義人たちである」とあかしされました。彼らは証明はされましたが、まだ約束のものは受けていないと言うのです。それは私たちの為に更に良いものを備えて下さっているので、終りの裁きの日に、私たちが彼らと一緒に、彼ら以上の報いをもって報われるためであると記されています。

私たちがこんにち神様に信頼する事は、決して空しいものではありません。そこまで行くとよく分かるのですが、分かってからではもう間に合いません。「しまった」とやりなおすことは出来ません。この事は誰も証明してくれる訳でありませんが、聖書がこのようにして証明をして下さっています。

私たちがこの義人たちにならって、「受けるよりは与える方が、さいわいである」との生涯———自分の事だけ考えて生きていてもどうせ80年か 100年か、僅かな時間です———を送って神様の前に覚えられるならば、たとえその生涯は短いものであったとしても実に尊いものです。

【年を取ったから従えない？】

◆ある方は、「自分はもう年を取ったから、神様に従うことが出来ない」などと言われますが、モーセは80歳から神様に従いました。40歳まで彼はエジプトの王宮で過ごしました。40歳になって、自分の身分を悟り、奴隷（イスラエル民族）の中に身を投じて、人間的に彼らを救おうとして失敗をし、遠く砂漠に逃れました。そこで40年間、80歳になるまで舅の羊を飼って暮らしておりました。80歳になって召された彼は 120歳までの40年間を、実に尊い神の人としの使命に生きた訳です。

これによって彼は大きな誉れを受けました。彼が80歳の時に、もし神様に従わなかったら、あとの40年は無かったかも知れないのです。彼が従ったことによって、残りの40年が与えられ、まことに尊いものとして神様の前に覚えられました。私たちも、「神の人モーセ」として聖書を読む訳です。

ですから、「私のような者は駄目な人間です。もうこんな者は何の役にも立ちません」と思っても、人間の考える所と、神様の見られる所とは違います。「わが思いはあなたがたの思いよりも高く、わが道はあなたがたの道よりも高い」（イザヤ55章）とあります。人間は良いものを選んで磨き上げて、「こんな立派なものが出来た。さあ、幾らで買うか」となりますが、神様はわざわざ悪い者であり、無きに等しい者をあえて選んで、これを高く引上げられることによって、確かに神様によって変ったのだとはっきり見せられる訳です。

◆私自身の生涯がその通りでした。亡くなった父が、戦後、「太郎は変った！」と驚いて教会に行くようになりました。実は父は若い時からの信者でした。母は更にそれよりも先に救われておりました。（母の救い、父の救い、結婚などについて――省略）

私はそのような家庭に育って、小学校に上がるころ、東京の吉祥寺（今の武蔵野市）に住んでいました。そこで、教会の日曜学校に行っていました（中略）。戦後も暫く復員輸送業務に携わった私は、だいぶ時が経ってから福岡県に住むようになりました。そしてその頃から、「自分は何の為に生きているのか」と悩んだのです。たまたま体も悪くして、全く望みを失ってしまった時、母から、「教会に行きなさい」と言われて、教会を求めました。こうして私が救われ、父も母も信仰が復活して、それぞれが勝利のうちに召されました。

（父の胃癌、肝臓癌について――詳細、略）。最後の時、父は「この罪人が、イエス様の血によって、義なる者として受け入れられるから感謝します」と明確にあかしをして天に帰りました。肉体的には餓死のような状態であって、心臓だけは強く動いており、頭も明晰なままでしたから、非常に苦しんだ訳ですが、このあかしは私たちにとって今でも大きな慰めです。

母は、「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう」（マラキ3:3)とあかししました。

（弟の救いについて――省略）。

そのすべてのきっかけになったものは、私の救であって、神様がどん底状態にまで陥った私を救って、これが神様の手によるものであるとはっきりあかしされ

ましたから、このような大きなことが行われたのです。

◆神様は人間の考え得ないような不思議な事を行い、これを遂げられる方です。私たちはいま目に見るところによって、「私は駄目だ」とか、「こんなに年を取って衰えてしまった———」「今まで、こんな生涯を送ってきた、今更何を言っても始まらない」などと思うのですが、神様は最後の１日まで私たちを顧みて下さる方です。

士師記に記されている士師サムソンが、婦人問題で脱線し、敵に通じていたデリラに秘密を漏らしたために、神様との契約のしるしである髪の毛を剃り落とされ、力を失って捕らえられてしまいました。目をえぐられ、鎖に繋がれて臼を引くというまことに惨めな生涯に陥った訳です。

しかし少しづつ髪の毛が伸びて来たのを知ったサムソンは、「ああ、神様、この私を憐れんで頂きたい。私が罪を犯して肉欲の為に、あなたの誓いを破って、こんなことになってしまいましたが、今この髪の毛を伸ばして下さったように、もう一度憐れんで、この目の１つの為にでも、復讐させて下さい」と見世物にされていた公会堂の大黒柱を抱えて、力一杯に引き倒し、3000人の人と共に死んだと書いてあります。

彼は40年間ですかイスラエルを裁いて、しばしばペリシテを撃ちこらしましたから、随分たくさんの敵を滅ぼした訳ですが、その全部の働きよりも、最後の１日の働きのほうが大きかったと言われるのです。神様はどういう事をなさるか分かりません。

私たちの生涯も、最後の結論を見なければ、良し悪しを言う事は出来ないのであって、その結論は、正しく裁き給う方の手によって行われるものです。ですから私たちは先走りしをして裁いて、（自分の事もですが）「あの人は駄目だ」など決して言ってはならないと教えられました。

◆一切を投げ出して神様に与えていくならば、神様はそれに対してどんなに豊かに報われるか分かりません。お正月にお孫さんが帰って来られて、「おばあちゃん、これ上げよう」と何か貰ったらどうするでしょうか。このくらい貰ったから同じくらいのものを返そうとは、決して考えない筈です。もっともっとたくさ

【最後の一日が全生涯にまさる！】

【孫から土産を貰ったら】

んのものをプラスして返し、その好意を大いに喜ぶでしょう。

神様は、私たちが小さな決断をもって、「僅かなものですが、これをささげてお従いさせて下さい」と、もし心から身も心も献げていくならば、神様は決してそれだけではすまさない方です。何倍も何十倍も添えて私共に対して報いて下さる方であります。

ある教会で会堂を献げた話を聞きました。まだ何の話も無いころに、ある人が、「会堂建築のために」と献金を献げられました。その額は僅かなものでしたが、数年たって最後に完工した教会は５千数百万であった訳です。神様の祝福は、数万円を１千倍にも祝福して下さった訳です。

このことは献堂ばかりではありません。私たちが良き願いを持って、心から神様にささげて行くならば、喜んで受け入れられるばかりでなく、何十倍にも何百倍にもして私たちに報いて下さるのです。

（天国銀行の利子について、私の体験ーーー省略）

福音書に記された種蒔きのたとえの場合、「30倍、60倍、 100倍の実を結ぶ」と書いてありますが、農事暦などには、「１粒万倍日」という日があります。

私たちの身近な所にそうした何千倍という祝福があるのですから、霊的な祝福に、どうしてそれ以上のものがないと言えるでしょうか。神様はどのような事でもなし得る方です。

【地球が角砂糖ぐらい!?】

◆「宇宙の初めはどういうものであったか」という事を研究する人たちがいます。そういう話を聞くと、ある瞬間から宇宙が膨脹を続けているとして、その時間や大きさを逆算して行くと、次第に時間が（０からの隔たりが）小さくなり、０が数十個も付くようになって来るそうです。すると私たちが今知っている普通の法則は適用する事が出来ないと言います。そういう世界を「量子宇宙」と言うそうですが、そういう世界においては地球は角砂糖ほどになって、その時の密度は何億トンというようなことになると言います。あるいは、もっと大きいかも知れません。

そうなると私たちは、「そんなこと、とても考えられない」と思いますが、神様はなし得る方です。神様は無から有を造る方です。エネルギーの形が変ること

は無から有が生れる事とは違います。神様は「無から有」を造る事がお出来になる方であります。

【だから進化と言うか】

◆私はそのような話に関心をもっていますが、この世においては、「不思議だなあ」とか、「凄いなあ」というだけで、それを造って下さった神様に目をとめることがありません。

生物（人間も含む）の体は、その微細な世界を探って行くと、最も基礎になるものは４種類の塩基だそうです。それが遺伝情報によって目的に応じた蛋白質を造って体が出来て行くと言います。そのような情報は私たちの5-60兆にも及ぶ細胞の１つ々々に組込まれていると言われます。

するとある学者たちは、「これはすべての生物が進化によってが生れて来た証拠だ」と言いますが、私は、「こういうことがあるからこそ、神様がすべてのものをお造りになったことが分かる」と思うのです。

【どれ程でも恵みに感じてお仕え出来るように】

◆ここにある信仰の義人たちは、神様に対して自分の身を賭け、生涯信頼しました。神様はそれに対してお答えになりました。私たちは神様の報いがあまり極端なように考えますが、神様はどんな事でもお出来になる方です。そして私たちが信頼する時は、傾けただけ答えて下さる方です。人間は、「あまり極端なことは出来ない」と思いますが、神様は決してそうはおっしゃいません。

教会にも色々な定めがありますが、「皆さんが神様に対して、恵みに感じて（自由に）お仕えする事が出来るようにするのが一番よろしい」と言われます。私たちの教会では「月約献金」をしません。各自が、神様の前に、什一献金を守り、またおりに触れ、恵みに感じて、信仰のはかりに従って献げ物をします。ですから、「私はこんなに恵まれたから、 100万円献金しよう」と言っても、誰も、「それは多過ぎます」と言う人はありません。

ある時は多くのささげ物が出来ないでも、力を尽くすならば、神様はそれを最大のささげ物として喜んで下さいます。また出来る時には１億円でも２億円でも、感謝のささげ物をささげる－－－神様は決して少ない時に「足らない」とはおっしゃいませんし、多い時に「多過ぎる」ともおっしゃいません。多ければ多いなりに神様はその心を見て豊かに報い、その実を増やして下さる方です。

このヘブル人への手紙に記された多くの聖徒たちがそれぞれの立場で多彩な生涯を送っていますように、私たちも、それぞれの場合に、それぞれの立場で、そしてどんな人間的量であったとしても、それなりに自分を傾け尽くして信頼するならば、神様は決して私たちを辱め給わない方です。そのような神様の報いを知ると、私たちは力を尽くすのです。

◆先程パウロの話しが出ましたが、もうひとつパウロの生涯を読みましょう。

ピリピ３章2/14節、朗読。「もとより、肉の頼みなら、わたしにも無くはない。もし、だれかほかの人が肉を頼みとしていると言うなら、わたしはそれをもっと頼みとしている。わたしは８日目に割礼を受けた者、イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である。しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであり、律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである」

【かって尊んだものを汚いもののように】

パウロという人は人間的にも大変立派な人でした。ヘブル人の中のヘブル人、イスラエル民族です。また文化圏としてはギリシャ文化圏に育った人です。キリキヤのタルソで生れました。政治的に言いますとローマ市民権をもっていました。多くの人がお金を積んでその権利を買おうとしましたが、彼は生れながらのローマ市民でした。

ですから誰かが肉において誇ると言うなら、私は誰よりも多くのものがあると言うのです。知識においても彼は当代一流のガマリエル門下の秀才であったそうです。エリートであり知識人です。しかし、それは救のために少しも誇りにならない、むしろ彼は損と思うようになりました。なぜならば、イエス・キリストを知るという知識は、まことに素晴らしいものであって、私にあった一切のものは、

むしろ無いほうが良かった。そんなものがあって、少しでも心にひっかかっているならこれは損失である。そうでなくて、全くイエス・キリストの十字架によって、甦りの救にあずかるのであって、他の何ものでもないと、彼はそれらを臭いものを捨てるように全部捨ててしまったと言っているのです。

「苦しいことがあるが仕方がない。ここでひとつ勉強しよう」と言う人はありますが、パウロはむしろ進んで苦難にあずかって、死の様と等しくなり、イエス様が死なれた所で自分も死に、イエス様が甦られた所で自分も甦りにあずかりたい、というようになりました。それは彼が神様の報いの尊さ、偉大さを知ったからです。知ったから、なお彼は傾けて行きました。傾けるからまた神様の事を知る訳であります。「私は前のものに向って体を伸ばして、目標を目指し、神の賞与を得ようと走っている」と言うのです。身を伸ばして、足の方がついて行かないので、もどかしくてたまらない、というぐらいに身を伸ばして走って行きました。

パウロがその生涯において最後に記した書簡は、テモテ第２の手紙です。その４章で彼は、「今や、私のために義の冠が待っているばかりである」と言っています。その直後に、彼はローマで迫害のために首を切られましたが、彼の肉体とは係わりがなく、彼の魂は神様から受け入れられて、永遠の栄光にあずかった訳で、私たちは彼の生涯を見る時に、その望んでいる所が、スッと彼の上に成就して行く様を、はっきりと見る事が出来るのです。

◆パウロがそうであったように、価値を知った人は、一切を投げ出して買います。買ってみると、又これが素晴らしいものなのです。その事について読みます。

マタイ13章 44/46節、「天国は、畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、そしてその畑を買うのである。また天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである。高価な真珠１個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい、そしてこれを買うのである」とあります。

ここに２つの譬がありますが、いずれもその物の値打ちを知った人が、自分の一切を投げ出して買うということです。投げ出したら投げ出しただけの価値があ

る訳です。恐らくもっと高く売れたかも知れません。神様の前に喜んで受け入れられたかも知れません。パウロと同じように、宝の値打ちを知った人がこれを買います。

私は色々な本を捜す技術について関心を持っています。ですから様々な書評誌を見ます。また色々な所にルートをつけておいて、定期的に資料を送ってもらっています。某国の大使館から公報誌が来り、外国から来るものもあります。それを見てまた新しいものを捜しては、それを読んでみる訳です。

将来の夢ですが、コンピューター通信でデーターベースを引けるようになりたいなどと考えるのですが、なにしろお金がかかるのではないか、それと時間をあまり取られては困るなどと考えています。

情報というものは、どこにでもあるものですが、それに辿りつくまでが大変です。その道を見付けることが重要です。また情報の価値を決めるのは誰だろうかと思います。それは、受け取る人が決めることではないでしょうか。そして、情報は掴まえようと気を付けている人の手に入ります。たとえば、電車の車内に週刊誌の吊り広告が下がっています。多くの人が、関心を持ちそうな事が大きな活字で書かれていますから、小さい字はとかく見過ごしやすいのですが、何かを掴まえようと貪欲に読むと、１つ閃くものがあります。すると「あ、これを読もう」と思ってそれを見ます。すると週刊誌の値段、たとえば、 2-300円ではとうてい買う事の出来ない貴重な情報が手に入ります。

それは、こちらが求めようとしてアンテナを張り、そして「これだ！」と知った者がその値打ちを自分のものにする訳です。その様に私たちが、宝の隠された畑、或いは高価な真珠にたとえられる神様の賜物の値打ちを知って、それをあくまでも求めて行くなら、神様は、私たちを置いて、彼らを先になさる事はないと言うのですから、彼ら以上に大きな報いを与えられるのです。

ここにスライドプロジェクターがあって、こちら側から向いの白壁にスライドを写します。しかしその時に光線を遮りますと、ピントが少しぼけますが、スクリーンよりずっと明るい映像が写ります。どこで切っても出来ます。それと同じように、私たちに対する神様の大きな報いは、あそこに確かに備えられています

から、今この切り口と言うか、いま投影された姿は少しピントがボケていますが、やがてあの時はっきりとピントが合って、すべての事が明らかに見えてきます。

このことはコリント第1の手紙13章に、「今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう。わたしたちの知るところは、今は一部分に過ぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」とあります。

ですから私の生涯も、他の人から見るならば、少しも変りばえのしないようでありますが、神様が私に対して与えて下さた栄光の望みはまことに素晴らしいものであって、私はただただ、こんな者に注がれていることを感謝しているのです。

信仰というのは望みによって与えられるものです。私たちは望みよりも、目の前で手にしたお金のほうがよほど確かだと思いますが、実は逆で、目に見るもののほうが大した事はないのです。見るものはまた変ってしまいます。しかし私たちが、目に見えない方を望んで行くならば、そこには素晴らしいものがあります。「わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的で、見えないものは永遠に続く」とあります。永遠なんて、そんなぼんやりしたものは果してどうか分からないとは言えません。確かなものがそこにあるのです。

こんにち、信仰を持とうとする人の中に、「私は将来がどうも不安だ。こんな人間だから果して信仰が全う出来るかどうか分からない」と言う人があります。あるいはまた、「信仰って、そんなにはっきりしたものなんだろうか。『気の持ちよう』じゃないだろうか」と色々な事を言われますが、決してそうではありません。私たちが、神様に対して一切を投げかけて行くとき、神様は極めてはっきりと報いを与えて下さるものです。

◆最後にもう1つ、コリントの第2の手紙の8章を読みましょう。

2コリント8章 1/5節、朗読。「彼らは力に応じて、否、力以上に施しをした。すなわち、自ら進んで、聖徒たちへの奉仕に加わる恵みにあずかりたいと、わたしたちに熱心に願い出て、わたしたちの希望どおりにしたばかりか、自分自身をまず、神のみこころにしたがって、主にささげ、また、わたしたちにもささげた

のである」とあります。

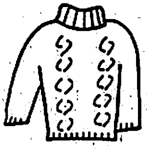
これはマケドニヤの諸教会の献金奉仕の話ですが、お金のことだけではないと思って頂きたいのです。これはマケドニヤ諸教会に与えられた素晴らしい神様の恵みを、パウロがコリントの教会に紹介しているものです。彼らは熱心に奉仕に加わりたいと願い出て、聖徒たちの希望どおりにしました。それは、「自分自身をまず、神のみこころにしたがって、主にささげた」のです。そして次に、「また、わたしたちにもささげたのである」とあります。

人間のするすべてのわざは、まず自分を主にささげる事から始まると思います。そしてその上で、或いは神様の秩序に従って動く事もあるでしょうし、或いは、何か援助活動をする事があるかも知れません。しかし「まず、主にささげること」がなければ、神様とは縁のない事になってしまいます。単なる施しであり、単なる「たかり」になってしまうかも知れません。

ですから私たちは、どんな奉仕をするにも、まずその前に、神様に対して身をささげて行くことが大切であると教えられたのです。

使徒行伝20章35節にかえる。「受けるよりは与えるほうが、さいわいである」———私たちは、かつては自分のことだけしか考えませんでした。神様を知らなかったのですから当然だったかも知れません。しかし、今や、神様を知り、そして私共の為に一切を投げ出して下さった方を知りましたから、この方にまずお答えして自分をささげる事によって、多くの問題について、自らを与えて行くことが出来るようになるのです。神様はよくそれを導いて下さる方です。

今晩、この主の前にまず自らをおささげして、「施し散らしてかえって富む人がある」とあるように、神様の豊かな報いをもって満たされる者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　　　(1990.1.4.19:00　聖会12)



第１３回〈1990年1月5日、午前10時〉

信仰に始まり信仰に至らせる

（聖書＝ローマ人への手紙第１章１６／１７節）

【聖書の中でもむつかしい？】　183
【そうとしか言えない】　183
【福音とは御子イエス・キリスト】　184
【ユダヤ人？ギリシャ人？】　186
【義を啓示する福音】　186
【神様の報いの窮極】　187
【影絵を裏側から見るように】　188
【神の恵みに入れと言われるからには】　189
【イエスの肉体という幕を裂いて】　190
【良心までも清める神の子の血】　190
【罪の土壌までも取り去って神に近付けられる】　191
【死を賭して濁流に踏み込むと】　192
【信じます、不信仰な私をお助け下さい】　193
【望み得ないのに望みつつ信じたアブラハム】　194
【神様に自分を投げ出す幸い】　195

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである」（ローマ1:16/17）

◆ローマ人への手紙はむつかしいと言われます。私は聖書の通読を勧められて、通読表にチエックしながら、10数回も読んだでしょうか。

その時に色々な事を感じましたが、先ず詩篇に入りますと、お祈りしたい事がたくさん書いてあります。またこのローマ人への手紙に入りますと壁にぶつかったように非常にむつかしいと思ったのです。それと最後のヨハネの黙示録がまたむつかしいと思いました。

◆黙示録の事ですが、ある人が伝道者に、「先生、黙示録って一体何を書いてあるのでしょうか。将来起ることと言われていますが、夢のようでさっぱり分かりません。封印が次々に開けて、最後の封印が開かれると７つのラッパが出て来る。ラッパが次々に吹かれて第７の御使がラッパを吹くと、７つの鉢が出て来る――限りがないように見えます」と質問したそうです。その伝道者が答えるには、「それは少しもむつかしい事ではありません。神様が必ず成るべき事をいま開いておられるのですから、それはそこに書いてあるその通りになるのですよ。別にむつかしく考えなくてよろしい」と言われたそうです。

黙示録についても、ローマ人への手紙についても、或いはその他の書物でも同じですが、これは神様が私たちに対して送って下さった親展書であって、私たちの事を良く知っていらっしゃる神様が「こう」としか言えない、また「これが一番良い言い方である」と練りに練って与えられたお言葉なのです。

それは自分が何かを発信する側になってみると良く分かります。例えば、当教会で行っているテレホンサービス「テレホン聖書」の例で言いますと、「こんにちは」というと１秒かかります。当教会の場合２分半のテープを使っていますが、始めと終りに短い挨拶を入れなければなりません。始めの場合は、「ハイ、戸畑教会のテレホン聖書です」など。最後には「お尋ねは別の電話『882-9266』までどうぞ」「資料をご希望の方はご連絡下さい」「このテープは月曜日に新しいも

のと代ります」「では次回のお電話をお待ちしております」「さようなら」などです。あまりぎりぎりに入れますと、音声が切れる事がありますから、余裕も必要です。そうすると実際のお話の分量はかなり短いものになります。

種明かしをしますと、最初に自分の教えられた事を、字数を考えずに、全部ワープロに打ち込んで並べます。すると随分長いものになりますから、それの枝葉を整理しながら切り詰めて行く訳です。

その時には、点をひとつ入れるか入れないか、「さて」と言うか言わないか、「これは」にするか「これが」にするか、なかなか文章力を試される訳です。勿論完璧には出来ませんが、とにかく自分なりに練る訳です。

神様が私たちに親展書を送って下さる場合にも、どれ程私たちの為に練っ下さるだろうかと思うのです。言いたい事がたくさんあっても、一部分はカットしてあるかも知れません。神様は時間が足りないのではないでしょうが、「言うに言われない」という問題もあります。

聖徒パウロはガラテヤの教会に対して、「あなたがたの所に行って、声を変えようと思う」と言っています。「強く言えば潰れてしまうか、反発するか。はっきり言わなければ分からない。どう言って良いか分からないので、私は声を変えようかと思う」と御霊の痛みを述べています。神様はそういう思いを持って、私たちにこの聖書を送って下さったのですから、私たちはこのまま良く読む事が一番です。「聖書をもって、聖書を解説する」のが良いと言われます。

私は少し大きめの引照付きの聖書を使っています。これは神様が付けて下さったものではなく、人間が単純に見比べただけのものですが、聖書の箇所を捜そうとする時には参考になる事があります。こうして次々に聖書を引いて行く事によって、神様の御旨を悟ることが出来ます。

◆このようにしてローマ人への手紙を読ませて頂く時に、パウロが、神様から受けた福音がどんなものであるかが分かります。神様は彼を通して、私たちに御旨を送って下さっているものです。

ある人々は、「聖書はいつ頃、誰が書いて、どんなふうになっているか」と調べますが、中間で誰の手を経ても、発信者のメッセージは着信者に対して届けら

れる訳です。

パウロの受けた喜びのおとずれは一体何ものであったか――― 2/4節に、「この福音は、神が、預言者たちにより、聖書の中で、あらかじめ約束されたものであって、御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである」とあります。

皆さんは「福音とは一体何ですか」と問われて何とお答えになるでしょうか。この世の中には、「この神様を拝んでいたらお金が儲かりますよ」という宗教もありますが、私たちの福音はそういう事なのでしょうか。或いは、初詣でのように、1年の始めに教会にお参りしたら、「1年間、守られて良い事がありますよ」と言うものでしょうか。そうではありません。福音とは「御子そのものである」と言われています。それは聖書の中で、あらかじめ約束され、また預言者の言葉に現れない前から、神様のお心の中にあったものです。

例えば、創世記にはノアの箱舟の記事がありますが、神様は空に虹をかけられました。これは神様がご自分のためにかけられたのです。

「人が心に思い図ることは幼い時から悪い」と記されています。その一方で、「わたしは最早、2度と人のゆえに地をのろわない」と言われています。これはおかしい事のようですが、これが両立する為に、神様がご自分のひとり子を十字架につけて下さる事が見えてくる訳です。

その後も、様々な預言者の口を通して福音があかしされておりますが、殊にイザヤ書を読むとはっきりいたします。

昨年の標語にありました、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」においても、イエス・キリストが福音であると言われるのです。

神様は、私たちにそのことを明らかに示される為に、1つの民族(イスラエル)を選び、1人の始祖(アブラハム)を選び、その子孫からイエス・キリストを生れさせられました。私たちの罪の為に十字架にかかり、死んで甦られたイエス・キリストを、御力をもって御子と定められました。それが私たちの主イエス・キ

リストであり、福音の源であり、福音そのものであると言われるのです。

パウロはその福音をたずさえて、ローマの信者たちの所に行きたいと願いましたが、計画通りには行けませんでした。未開拓の伝道地がたくさんあって、その為に妨げられたからです。「切に、あなたがたの所に行って福音を宣べ伝えたいと思っているが、その前にこうして手紙を送る」とこの手紙を送ったのです。

◆ローマ１章16節、「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である」―――「私は日本人だから、ユダヤ人、ギリシャ人とは関係がない」と思わなくてもよい訳です。聖書は私たちに対する雛形であって、ユダヤ人、ギリシャ人とは、人間を２種類に分けた譬です。「ユダヤ人」とはしるしを請う人たち、「ギリシャ人」とは知恵を求める人たちです。

私たちはどちらか―――或いは両方を持っているかも知れません。どんな人間であっても、「信じる者に、救を得させる神の力である」と言われるのです。つまり、「イエス様が私の為に十字架にかかって下さいました」と信じて受け入れる者を、神様が救って下さるとあかししている訳です。

◆ある人々は、「旧約聖書はユダヤ教の教典だから、私たちには関係がない」と言って、新約聖書だけしか読まないそうです。「イエス様が十字架にかかって下さったから、私たちは救われたのだ。感謝ではないか」という事だそうです。

しかし神様は、私たちに対して一面だけをおっしゃる方ではありません。旧約聖書を通して、私たちは神様がきびしい正義の神である事を知ります。旧約の最後（マラキ書）には、「わたしが神であるならば、わたしを敬う事実がどこにあるか」ときびしく叱られています。旧約聖書の述べる所の要点は、神様が主権者であるということです。その主権者が、み心に従って、私たちの為に救の道を開いて下さいました。そこで私たちはこの「義なる神・救主」の前に感謝して、「ああ、神様は何とありがたい事だろうか。この滅ぶべき者を憐れんであがないを立てて下さいました」と感謝する訳です。神様もまた、イエス様をお立てになる事によって、「義なる神であり、御愛の神、救主」であることを両立させられました。

もし「義」だけならば、人間は立って行く事が出来ません。また「愛」だけでしたら、罪は曖昧にされて、神様が神様でなくなってしまいます。イエス様が十字架につけられた事によって、神様の御愛と同時に、罪をないがしろにされない方であることを現されました。

恵みのほうはすでに分かっておりますから、「神の義は、その福音の中に啓示される」と言われている訳です。それによって私たちは、「信仰に始まり信仰に至らせられる」と、生きた信仰生活を全うする事が出来るとおっしゃる訳です。

◆昨晩教えらました、「先ず主に与えて受けるさいわい」、或いは「聖徒が望んだ大きな報い」について、その窮極の姿を読みたいと思います。

エペソ3章 14/21節、朗読。これは恵みの窮極に関する御霊の祈りです。神様は私たちに対して、何としても遂げたいという願いをもっておられ、その為に道を開いて下さいました。

14節の始めの「こういうわけで」と言うのは、前段までの結論、「イエス・キリストに対する信仰によって、確信をもって大胆に神様に近付く事が出来る」をさします。その上で御霊は、「私たちが神様の広さ、長さ、高さ、深さを理解することができるように、そして、人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように」と願っておられる訳です。

神様の事を知ろうとして、人間の側から求めて行くなら、行けば行くほど遠くなるかも知れないが、裏側から光を当てて、神様のほうから開いて下さるなら、すべての満ち満ちているものを知る事ができ、知るだけでなくて実際に自分のうちにそれが満たされるとおっしゃる、これは実に素晴らしいことです。

１人の人間を考えるとまことに小さな存在に過ぎませんが、その考えるところ、実行するところはまことに多彩なものがあります。またその体の中の営みは、ただ１つの臓器と同等の化学工場を作ろうとしても、百兆円ものお金がかかると言われます。

ですから知恵をもって万物を造り、今なお支配されている神様の中に、満ち満ちているものの大きさは、人が到底はかる事は出来ません。しかしその偉大な神

様の内にあるものを、私たちに満たそうとされているのです。

科学者は、真理を探求するなどと言いますが、ひとつの事を知ると、分からない事がたくさん出来ますから、人間は努力することによって、むしろ真理から遠ざかって行くのではないかと思います。

◆ところこが神様が私たちにご自分を開いて下さる場合は逆です。私はいつか日曜学校でお話しをした事がありましたが、それは丁度影絵を裏側から見るようなものはないかと思いました。影絵を表から見ると（影の）形だけが見えますが、そのものの実態は分かりません。しかし裏側に回るとその正体が明らかに見えます。動かしている人も分かります。

そのように、人間がこちら側から求めて神様を知ろうとすれば、形は見えても実態は決して知る事は出来ませんが、神様の側から光を照らして下さると、満ち満ちるすべてのものの実態を知るばかりか、実際に自分のうちに満たされるのです。これは実に素晴らしいことです。

ペテロ第２の手紙の始めには、「神と主イエスを知ることによって、いのちと信心（敬虔）とにかかわるすべてのものが満たされる」と書いてあります。またその結果、「神の性質にあずかる者となる」と書いてあります。

２ペテロ１章 2/4節、「神とわたしたちの主イエスとを知ることによって、恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。いのちと信心とにかかわるすべてのことは、主イエスの神聖な力によって、わたしたちに与えられている。それは、ご自身の栄光と徳とによって、わたしたちを召されたかたを知る知識によるのである。また、それらのものによって、尊く、大いなる約束が、わたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免がれ、神の性質にあずかる者となるためである」―――

神と主イエスを知ると、影絵を裏側から見るように、そこに何があるかをすべて知る事が出来ます。それはただ見えるだけでなくて、私たちのうちに実際にそれが加えられ、知恵が与えられるのです。３節の「信心」とは、昔の訳では「敬虔」とありました。「神様を慎み敬うことによって、聖書に約束されたすべての恵みが、わたしたちに与えられる」と言われるのです。

「ご自身（神様）の栄光と徳とによって」とありますが、「栄光」とは、神様のお心のうちに世の初めからあったご計画です。また「徳」は、実行、実歩と言うか、神様が実際にこれを遂げられたことを言います。

「私たちを召されたかたを知る知識による」とは、神様と主イエス様を知らせて頂く事によって、すべての事が私たちのうちに加えられると言われるのです。

◆そのあとには、もっと恐るべき事が書いてあります。４節に、「また、それらのものによって、尊く、大いなる約束が、私たちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免がれ、神の性質にあずかる者となるためである」です。これは驚いたことです。

冗談に、「あの人は神様のような人間だ」とか、「俺は神様じゃないんだから」などと言いますが、本当に「神の性質にあずかる」のです。神様が私たちにご自分を開き、上からの知恵と知識を満たして下さると、具体的に、神様のご性質にあずかる者となります。これは驚いたことです。

私は別に完成した者でも何でもありませんが、これは神様の約束ですから、私たちが信仰に徳を加えて（＝実行して）行くと、神様がそれをいよいよ豊かに堅いものにして下さいます。これは物凄い神様の恵みではないでしょうか。

そのような恵みですが、「ただ入れ、入れ」と言われても、私たちはどうする事も出来ません。入る為には、入り方も教えて貰わなければなりませんし、その道筋も教えて貰わなければなりません。

コンピューターとかワープロを買うと、大きな本が付いてきます。（聖書データーベースの話―――省略）。簡単なワープロについても、かなり厚い本が1,2冊ついて来ますが、コンピューターの場合はその何倍もたくさんついてまいります。実際は読まなくてよいものが多いのですが、機械に仕事をさせようと思えば、その手続きを教えて貰わなければどうする事も出来ません。

そのように神様が私たちに向かって、「さあ、あなたがたを窮極の恵みに入れて上げよう」とおっしゃっても、その道が分からず、入り方が分からなければどうにもなりません。しかし、幸いなことに神様は私たちに、道を開いて下さいました。先程のエペソ３章の前段にありましたように、「このようにして、あなた

がたは神様に近付く事が出来るのである」と言われた道筋があります。

【イエスの肉体という幕を裂いて】

◆ヘブル10章 19/25節、朗読。神様が開いて下さった道とは、イエス様の肉体という幕を通して開いて下さった道であると言われています。それは新しい生きた道です。この事は、十字架の場面（福音書）を読んでみると分かりますが、エルサレムの神殿の聖所の隔ての幕が、イエス様が「事終りぬ」と息を引き取られた時に、上から二つに裂けたと記されています。（旧約時代の会見の幕屋、礼拝規定などについて―――省略）。

私たちがもし丈の高いカーテンを裂くとすれば、必ず下から裂きます。十字架の処刑が行われた時に、上から裂かれたというのは、イエス様が血を流し、肉体を裂いて下さった事によって、私たちが至聖所にはばからず入り得る道が開かれたという事です。

これはその時に開かれた新しい道ですが、こんにちに生きる私たちにとっては絶えず新しく開かれる道です。私たちが、「イエス様は私の為に十字架にかかって下さった」と信頼する都度、神様が至聖所の幕を開いて下さって、イエス様の名によって、神様のみ側に近付く事が出来るように招いて下さいます。

ヘブル人への手紙には、「はばからずに彼のみもとに近付こうではないか」とあり、またある所には、「このような大祭司が私たちの為に、いつも生きて私たちを執り成そうとしておられるのだから、あなたがたが近付くならば、極端にまで救うことが出来る」とも書かれています。神様が開いて下さった、この新しい生きた道を通って入って行く事によって、霊においても肉においても、清められて神様に近付けて頂けるのです。

【良心までも清める神の子の血】

◆ヘブル９章 11/14節、朗読。旧約時代の聖所の定めについては、詳細な設計が出エジプト記に記されています。そこで何をするかと言うと、「会見の幕屋」という名前の通り、そこで神様にお仕えするのです。祭司が神様と民との間に立って、民の願いを持って行き、また神様のみ心を伺ってきて、これを取り次ぐ―――そのためには、大祭司が年に一度ささげる献げ物の他に、日常様々な儀式と供え物が定められていました。

レビ記には、燔祭、酬恩祭、愆祭、素祭、灌祭など色々と書いてありますが、

それぞれに意味があり、手続きがありました。その中に「清めの儀式」があって、山羊や雄牛の血を注ぐ———「自分は罪の為に殺されるべき者であるが、私の代りにこの獣が死にますから、どうぞこの血の故に私の罪を許して頂きたい」と手続きに従って祭司に祈りを求めると、罪が許されました。神様が「そうすれば許されるであろう」とおっしゃいましたから、許されたのです。また牛を焼いた灰を水に放つと灰汁が出来ます。このアクを洗剤として色々なものにかけて洗ったり、清めたりしました。

そこで、動物の血や、肉体を焼いた灰の汁が、もし人を清めたり、器物を清めたりすることが出来るならば、（今までのことは雛形です）神様の小羊であるイエス・キリストの血が、私たちを清めないであろうかと言われます。雛形であるものが上辺を清め、洗い事に用いられたとするならば、真理であるイエス様の血は私たちの肉体だけでなく、良心までも清めて、私たちのうちから死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者としないであろうか———必ず清める筈ではないかと言われるのです。

◆次は、ヨハネ第１の手紙です。１章の９節に、「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」とあります。

「罪を許す」というのは、そのために何かの償いをして、「これでごめんなさい」「よかろう」と言って決着がつくものですが、また同じ事をやるかも知れません。神様は私たちの罪を徹底的に許して清めて下さる時に、罪を犯す土壌を取り去って下いますから、再び罪を犯さなくなります。そのように私たちを清めて、中身まで清めて下さるのです。内部には悪い思いがあるけれども、一生懸命に押さえて置くというのではなくて、内部に無くなってしまえば、出て来ようにも来られません。そうすると、生ける神に仕える者となるのです。

「神様が煙たい」と言う人は、自分の中で「俺は」というものがありますから、なかなか神様に仕える事が出来ませんが、全く清くなると、生ける神様に向かって顔を上げる事が出来ます。そして絶えず神様との交わりを保り、光を受けて自分の顔が光輝くようになるのです。

モーセがシナイ山に登って十戒を頂いて下って来た時には、顔の皮が光って、民は恐れ、ベールをかけるように求めたと書いてあります。

ヨハネの福音書には、「わたしは道であり、真理であり、命であって、誰でもわたしによらなければ、父のみもとに行くことができない」と言われています。このイエス様によって開かれた新しい道によるならば、必ず神様の所に行く事が出来ると言われるのです。これは神様のお約束です。

◆もう一つはヨシュア記1章です。1/9節、朗読。これは先の指導者モーセが亡くなったあと立てられたヨシュアに対して、神様がおっしゃったことです。要するに、「あなたは今から前進をしなさい。強く、雄々しく進みなさい。わたしが共におるから恐れないでよろしい」とおっしゃったのです。

そこでヨシュアはお言葉に従って踏み出しました。ヨルダン川を渡って、こんにちのパレスチナに入った訳です。ヨルダン川を東側から西側に渡り、地中海までの間、縦約200キロ、横100キロぐらいの土地が、彼らに与えられた嗣業の土地であった訳です。一部の人たちはヨルダン川の東にも領地を得ました。

彼がそこに行くには、先ずヨルダン川を渡らなければなりませんから、彼は準備をして、いよいよ祭司たちが契約の箱を担いで、これに踏み込む事になった訳です。

ヨシュア記3章 14/17節、朗読。これは彼らが、神様のお言葉に従ってヨルダン川に踏み込む時の場面です。ヨルダン川には雨季があって、濁流が岸一面に溢れると言います。しかし神様は「渡って行きなさい」とおっしゃいました。ヨシュアたちはそこまで行って、踏み込もうとしますが、怖くてなかなか踏み込めない訳です。岸一杯まで溢れた濁流ですから、どこに浅瀬があるか分かりません。しかし彼らは信仰によって―――神様が行けとおっしゃったから必ず道を開いて下さると、水際に足を浸しました。非常に微妙な表現ですが、「足が水ぎわにひたると同時に―――上から流れくだる水がとどまって」と書いてあります。

彼らの足が水際にひたると同時に水が引いたのですから、実際は濡れなかった訳です。そして川の中に乾いた道が出来て、民は急いで向う側に渡りました。数キロ先にはエリコの町が見える所であった訳です。

神様が「信仰から出て、信仰に進ませる」とおっしゃるのは、このことだと思ったのです。「道があったら行きましょう。浅い所があったら、そこを踏めば大丈夫」というのは信仰ではないのであって、道が無い所ですが、神様が「行け」とおっしゃるから彼らは踏み込んだ訳です。それは命懸けだったと思います。果してどうなるか分かりませんが、ザブッと踏み込もうとしたらスッと水が引いて、上流の水は切れとどまり川の底が見えました。そこを渡った訳です。

ある人は、「そのとき上流で地すべりか何かが起ったのではないか」などと言いますが、神様はどんなことでもお出来になる方です。紅海を渡らせる時、激しい東風で海の水を吹き別けて紅海の底に道を造られた方です。とにかくそうして彼らは事実、全員が川を渡って、やがてその土地に入り、これを占領して行く訳です。

私がそれを読んだ時に、「信仰に始まり、信仰に至らせる」とは、こちらが1歩踏み出すことによって道が開かれるのであって、「開かれたら行こう」と言うのは、信仰ではないと思いました。聖書に「見たものをどうして望むか」と書いてあります。「見ないものを望むならば忍耐をもって待とうではないか。それが信仰である」と言われています。

◆これが最も はっきりした信仰の歩みですが、他にも幾つかの例がありますので、読んでみましょう。

マルコ9章 21/24節、朗読。これは癲癇の子供を持ったお父さんが、イエス様の所へ「治して頂きたい」と求めて来た時のことです。子供がイエス様のお姿を見ると、今までになく激しく引き付けて転げまわりました。

そこでイエス様が、「いつごろから、こうなったのか」と問われますと、「はい、もう小さい時からでございます。もしできましたら、私たちを憐れんで助けて下さい」と言いました。これは日本人が普通に言う言い方です。あまり強引なことを言っては失礼になるので、「もし、出来ましたらよろしく」という訳です。ところがイエス様は「それはいけない」とおっしゃいました。「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」とおっしゃいましたから、父親はすぐ叫びました。「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」、自分

の子供のことであり、いま一層ひどい極限現状ですから、とやかく言う間がありませんでした。彼は飛び込むように「信じます」と言いましたが、自分の理性では信じられません。しかしイエス様がおっしゃいましたから、「イエス様はお救いになる事が出来る方です」と飛び込みました。すると子供は、一層激しく引き付けて動かなくなりました。そこで、「これは大変だ。さすがのイエス様もこんな酷い病人は治せなかったのか」と思っていますと、イエス様が手を取って起され、その子は立ち上がって健康になってしまいました。

弟子たちも勿論びっくりしました。見ていた人も、「なるほど、この方は確かに神の子でいらっしゃる」と信じました。私たちもこれを読んでそう思いますが父親の態度にも学ぶ所が多いのではないかと思います。「信じられません。信じられないものをどうしますか―――上辺だけ信じるなんて言ったら、偽りになるじゃありませんか」、ある人はそんな事を考えます。「どうして礼拝に出ないかと言われて、「信じる事ができないのに、礼拝に出たら偽りだから出ない」と言う人がありましたが、緊急の場合にそんなことは言っておられない訳です。父親は飛び込んだことによって、その子を完全に癒して頂きました。

◆アブラハムはやはり私たちの信仰の手本として現されています（ロマ４章）「彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた」と書いてあります。車を運転する方は、「すえぎり」というのをご存知だと思いますが、ハンドルのパワーが弱い車の場合は、停止したままではハンドルが切れませんでした。ごく少しでも動きながらならば、ハンドルが切れる訳です。

そのようにアブラハムは、「望むべくもあらぬ時に」―――自分で信ずる事が出来ない、出来ないけども神様はおっしゃる、おっしゃるけど「そんなことは有り得ない」と思う―――そういうやり取りをしていましたが、最後に、「神様は死人を生かし、無から有を呼び出される方である」と飛び込みました。（物が生れるという事は、お互の関係が代ることであり、エネルギーが形を変えることであって、無から有を造る事とは違います）。

その時神様は、アブラハムの信仰を喜んでお受けになりましたから、彼は 100歳（夫人は90歳）でイサクが生れました。イサクはヤコブを生み、ヤコブは12人

の族長たちを生み、彼らは数代にわたるエジプト時代に数百万の民になりました。今は世界中に数億のクリスチャンがいると言われます。その数はともかくとして、私たちがこんにち、空の星のように多くなった源は、アブラハムが信じることの出来ないところを望みつつ信じたことであります。信じる事が出来ないところをジリッと進む、神様がそれを助けて、信仰から出て、信仰に進ませて下さいましたから、彼はグッと信仰をもって飛び込んだのでした。

私たちが、こんにち道を開かれ、「行け」と言われる場合、行く事は行きますが、ちょっと行っては考えて、「これは駄目だから止めて引き返そう」とやっていますと、いつまでたっても進めません。無謀とは違いますが、「神様のお言葉だからその通り信じる」という1歩、自分で体重をかけて行きますと、神様が次々に道を開いて、「信仰にはじまり、信仰に至らせて」下さるのです。

その最後の結果は、先程ありました窮極です。またエペソにありました、「神に満ちているすべてのものをもって満たし、神の性質にあずからせて下さる」という事になります。

◆私は今年、この聖会を通して教えられたことは、「受けるよりは与えるほうが、さいわいである」ということです。私たちが神様に対して一切を投げ出して行く。先ず神様に一切を与えて行く。そして具体的に踏んで行くと、次の道が開けて来るのです。自動ドアの前に立てばドアが開きます。次のドアの前に行けばまた開けます。腕組みして「開いたら入って行こう。側に行って、もし開かなかったら恥ずかしいから行くまい」としていれば、決して入る事は出来ません。

ですから、今年、神様がこうして道を開いて招いて下さっているのですから、私たちはいま1歩、自分の体重をかけて踏んで行きたいと思います。そして「約束の豊かな、満ち満ちるものをもって満たす」とおっしゃる生涯を自分で体験したいと思います。私はそのように切に願っております。

ロマ1章17節にかえる。「神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである」―――それが神様に喜ばれる正しい人であると言われています。私たちは何をしたら、神様に喜ばれるかと色々と考えますが、神様の方でははっきりこうおっし

ゃるのですから、この通り生きることが、神様に受け入れられる道です。ではご一緒にお祈りしましょう。 (1990.1.5.10:00　聖会13)

第１４回〈1990年1月5日、午後2時〉

執り成し祈りのもとにある者

（聖書＝サムエル記上第１２章２３節）

【祈る事をやめて罪を犯すまじ】　１９９
【御霊の執り成しのもとにある身分】　２００
【私は妬む神だが】　２０１
【背く者を忍び呻く神】　２０２
【祈りの母子】　２０３
【大きな望みと責任】　２０４
【この祈りが人の命に直結】　２０５
【柘植先生の自覚された使命】　２０５
【おのが救を全うせよ】　２０６
【大火も一本のマッチから】　２０７
【最初の一歩を踏み込む人が義人】　２０８
【命を惜しんでは祈れない】　２１０
【十字架による新生】　２１０
【知らない所で祈りが積まれていた！】　２１０

「また、わたしは、あなたがたのために祈ることをやめて主に罪を犯すことは、けっしてしないであろう。わたしはまた良い、正しい道を、あなたがたに教えるであろう」（サムエル上12:23）

◆預言者サムエルの時に、最初の王サウルが立てられて、いよいよイスラエルは王国時代に入る訳です。しかしサウルは霊性が低く、神様に従う事が出来ない人であって、民の言葉に従い、神様のお言葉を捨てて罪を犯し、たちまち捨てられてしまいました。

その次に立てられたのはダビデ王で、その子が栄華を究めたソロモンです。更にその子レハベアムの時に、王国は分裂し、12部族のうち10部族はヤラベアム1世によって北（イスラエル）王国を造りました。彼らは金の子牛を造って拝むなど、神様に甚だしく背く王たちが起り、血筋は数回にわたって途絶え（分裂後）約 240年で滅亡しました。

南（ユダ）王朝も決して良い事はありませんが、中には数人の良い（神様の御旨にかなう）王様も現れ、（分裂後）20人の王によって、約 390年の王朝が続きます。神様がご自分の約束を遂げるため、ダビデの故に憐れみをもって1つの灯をともし続けられた訳です。そしてその子孫からイエス様がお生れになりました。

そのサウル王が立てられた時に、神様は王を求めた民に対してきびしい警告を与えられました。そもそも彼らが王を求めたのは、預言者サムエルの子供たちがあまり良くなかった訳です。それで、「よその国と同じように、王様を立てて治めて貰いたい、戦争に行く時は王様に従って行きたい」ということで、「我々は王様がほしいのです」と言って求めましたから、神様もその声を聞いて（サムエルに）王を立てる事を命じられました。

サムエルが待ち望んでいる時に、神様は不思議な導きによって、ベニヤミン部族の中から、サウルと言う大変体格の良い人（群衆の中に立つと肩から上が聳え立って見えたという立派な体格の人でした）が王として選ばれました。

しかし、「王様が主ではなくて、わたしが主である。王様がもし、わたしに従うなら良いが、従わなければ、あなたがたはたちまち滅ぼされるであろう」と宣言されて、サムエルの祈りに答えて、時季外れの雷と雨を下して、イスラエルの

民に自分たちの罪を見せられた訳です。

こうして王様が立てられたのですが、「イスラエルの民は神様と神の人サムエルを非常に恐れた」と書いてあります。民は、「分かりました。私たちはこの事について罪を犯しました。しかしおっしゃるように、王様も私たちも共々に神様に仕えます」と誓って、サムエルに祈りを求めた時、彼は、「よろしい。わたしはあなたがたの為に祈ることをやめて、神様に罪を犯す事は決してしません」と答えたのです。サムエルはその後も死ぬまでイスラエルを巡回して指導しました

◆かつて神様は、イスラエルに対して非常に厳しい事ををおっしゃいました。「全員死刑である。モーセよ、お前の子孫から新しい民を起こそう」と言われた事もありました。またそれより前ノアの時には、ノアと３人の子と、その妻たち合計８人以外の者をことごとく水で滅ぼされました。しかし今、神様はその大いなる名の故に、背く者をも憐れみをもって捨てない方で、神の人を立てて執り成し祈らせておられるのです。

私たちが今ここに置かれている陰に、御霊（聖徒）が私たちの為にどんなに執り成しをし、支えて下さっているかわかりません。

この御集会の前に、私はお祈りしていたとき、神様から教えられたことは、「あなたは今、支えられているのだ。聖会がこうして守り支えられている陰に、どんなに神様の執り成しと憐れみがあるか分からない。どんなに忍耐をされているか分からない」―――なっていない点がたくさんありますから、もし責められるならば、とても神様の前に立つ事は出来ません。神様は本来、そのようなきびしい方であります。

しかしそれを大いなる名の故に、イエス様を立てて、私たちの為にあがないを成し遂げて下さいました。こうしてご自分の民として下さった故に、祈ることをやめて捨てないとおっしゃるのです。神様のみ心は私たちを捨てる事ではなくて憐れみをもって生かすことであるとしみじみと教えられました。神様がご自分のみ思いをそのまま行われるならば、私たちはどうなるであろうかと教えられたのです。

◆ホセア６章 1/6節、朗読。「さあ、わたしたちは主に帰ろう。主はわたした

ちをかき裂かれたが、またいやし、わたしたちを打たれたが、また包んでくださるからだ。主は、ふつかの後、わたしたちを生かし、三日目にわたしたちを立たせられる。わたしたちはみ前で生きる。わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることを求めよう。主はあしたの光のように必ず現れいで、冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤される」

神様はイスラエルの民を、「かき裂いて癒される、打ち叩いて包まれる、ふつかの後、生かし、３日目に立たせられる」とあります。人間同士で叩いておいて包んだり、引っ掻いておいて薬をつけたりしたら、「この人は少しおかしいのではないか」と言われるかも知れません。神様はあたかも人間の精神分裂症であるかのように、ある時には引っ掻いておいて癒し、打ち叩いておいて包んで下さる、捨てておいて又残りの者を召し集められる———イスラエルの歴史はこれであって、神様は捨てようとされても、捨て切る事が出来ないのでまた包まれるのです。

神様は私たちに対して「妬む神」であると言われます。捨てようと思うが、捨て切る事が出来ない神であります。「妬む」というと、人間の悪い性質のように思いますが、神様がご自分で「わたしは妬む神である」と名乗っておられるのです。これは十戒の中にもすでに記されておりますし、その後の出エジプト記にもあります。申命記には、「妬む神、焼き尽くす火である」と書いてあります。愛すれば愛するほど、遠ざかって行く者に対して、どうしてよいか分からないと言われるのです。

この世で社会面を賑わわす事件がよく起りますが、それは自分の愛している人が背いて他の人の所に行く———すると大変なことになって、刺したり刺されたり、悲惨な事件が起ります。人間が愛する者から裏切られるという事は耐え切れないことです。

神様が私たちのためにご自分のひとり子を十字架につけて、自分が死ぬよりも辛い思いをして下さったのに、それを、「そんなこと、私はそんな者じゃございません」と言ったり、あるいは「有り難うございます」と一度は言っても、あとは馴れて背いて行く———そういう様を見て、神様はどんなに私たちに対して焼けるような思いを持っていらっしゃるでしょうか。

もし存分に引っ掻いて、打ち叩かれるなら、私たちはいくら命があっても足りません。しかしそれも出来ません。創世のはじめ、「甚だ良かりき」と私たちを造って下さった方は、捨て切る事は出来ませんから、ある時には、叩いては包みかき裂いては癒す、４節に、「わたしはあなたに何をしようか。ユダよ、わたしはあなたに何をしようか。あなたがたの愛はあしたの雲のごとく、また、たちまち消える露のようなものである――どうする事も出来ない」と言っておられるのです。

空の雲は風船か凧が流れて行くのとは違います。ある所が忽ち消えて別の所が出来て行きます。単純に動いているのではない訳です。私たちの愛はそれ程変りやすいと言われるのです。また「たちまち消える露のように」と書いてあります陽が昇ると朝露はいつの間にか無くなってしまいます。私たちの愛がそういう状態ですから、神様は、「どうしたらよいだろうか。何とかしなければならない、口の言葉をもって殺した」とおっしゃるのですが、捨て切る事が出来ないから、もし私たちが柔らかい心をもって、「ああ神様、こんな者でしたがごめんなさいと出るならば、神様はどんな大動物の燔祭よりも喜んで受けいれて下さるとおっしゃるのです。私たちは今こういう忍耐と祈り執り成しのもとに置かれているのだとしみじみ教えられました。

◆その事について先程いくつか読んでみました。ホセア書を見ますと、ホセアの妻は淫行の女で夫を離れてよそに行っては子供を産んで来る――そういう人をなお自分で買い取る――身を落としている者を身請けして来る訳です。それによって彼は、「愛する者が背いて行くのを捨てる事が出来ない――神様の御愛」を体験し預言をした訳です。

ヘブル人への手紙12章に、「あなたがたは、弱り果てて意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである」と言われています。また、「主の訓練を軽んじてはいけない。主に責められるとき、弱り果ててはならない」とも言われています。このイエス様の忍苦のお姿は実は神様のお姿であると教えられました。

出エジプト記には、イスラエルの民が奴隷の中で呻いたと書いてあります。神

様はこの呻きを聞き、「モーセを遣わして、これをエジプトから引き出させる」とおっしゃいました。私はその所を読んで、「このイスラエルの民の呻きは、神様の呻きであった」と思いました。

「私たちが病気の時、そのしとね（布団）を敷き代えられる」と詩篇に書いてあります。また、「私たちの悩みの時には、主もまた共に悩み給う」ともあります。神様は私たちに対して、「私は神であるぞ。お前たちは虫けらのようなものだ。従わなかったら承知しない」と言われる方ではなく、私たちと同じように苦しみ、同じように呻いて、私たちの為に何とかしてその中で、どうしたらよいかと忍耐をして下さっている———そういう方であるとしみじみ教えられたのです。

◆先程ありましたサムエルも祈りの人でした。彼の母ハンナはシロの神殿（祭司エリ）で祈っていました。長く祈って、悲しみの為に彼女は小声でブツブツ言っていましたから、少し老碌したエリ先生は、「お酒はいい加減で覚ませ」と言ったところ、「そうではありません。私はこうして苦しみの為に———呪われていないのに、『お前は呪われて子供が生れない』と言われて悲しくてたまらないので祈っていたのです。神様が私に男の子を下さいましたら、私は一生これをささげます」と誓いました。その祈りに答えられて不妊の女であったハンナにサムエルが与えられました。これを乳離れすると間もなく献身させました。それがサムエルの生い立ちです。祈りの人であったハンナから生れたサムエルもまた祈りの人であって、生涯イスラエルの為に執り成しをやめませんでした。

その他にもたくさんの祈りの人があります。新約聖書ではたとえば、コロサイ人への手紙に出て来るエパフラスという人、これは祈りの人であったと書いてあります。またその他にも多くの聖徒たちが祈りの人としてイエス様に従いました。

私たちがこんにち神様から、「わたしに従ってきなさい」と言われます。イエス様は神様のみ心を受け、背く者を忍耐をもって忍び、あくまでも執り成し祈って下さっています。その祈りと執り成しのもとにある私たちが、イエス様の足跡に従い、忍ばれたように、多くの人々の為に忍んで行く———これが私たちの使命であると教えられました。

◆歴代下16章９節、「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心

を全うする者のために力をあらわされる」―――南北王朝時代の南王国のアサ王は、初めは良かったのですが、治世の36年になると、北イスラエル王国から攻められたので、スリヤの王に贈物を送って、「うしろから脅してほしい。われわれはイスラエルから攻められて困っている」と依頼しました。スリヤの王は出てイスラエルを攻撃したので、イスラエルはユダを攻める事をやめました。

これは一見外交戦略が成功したように見えましたが、神様の僕ハナニは、「あなたはスリヤの王様により頼んで、神様にどうしてより頼まなかったか。スリヤ王も実はあなたの手によって滅さなければならなかったのに、こういうことになったから、あなたは機会を逃してしまったではないか―――25年前、エチオピヤとリビヤの大軍が攻めて来た時には、神様により頼んで大勝利を得たではないかこの度はその事を忘れては愚かなことをした。だからあなたにはこの後、戦争が臨む」ときびしく警告しました。するとアサの魂はすでに大きく傾いていましたから、その先見者を敬わず、「何を！俺は王様だぞ！」と言って、獄屋に入れてしまいました。そのあとアサはたちまち傾いてしまいました。

この時に神様がおっしゃったお言葉は、私たちにとって非常に大きな望みを与えるものです。９節に、「主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心を全うする者のために力をあらわされる」とあります。あの時のアサは失敗しましたが、今は「自分に向かって心を全うする者が１人があれば、その為に力をあらわす」と約束されています。

私たちがお祈りする時に、よくこのお言葉を頼りながら祈ります。神様は探しておられる―――１人でもよい、あるいは２人でもよい、どんなに小人数であったとしても、神様に向かって心を全うするなら、ご自分の力を現されるのです。「何人以上の人がいないと、私は聞かない」ということではない訳です。

どこかのスタジアムに集まって大集会をする、「何百人決心者が出来ました」などという集会方式もありますが、隠れた所でひとりの人が神様に心を全うして「あなたは必ずこの事がお出来になります。私がお祈りすると言うよりも、神様が私たちの為に『祈ることを止めて罪を犯すことは努めてせざるべし』と、忍耐と執り成しをなさって下さっています。そのお祈りのもとにある私たちですから

大丈夫です。どうぞ、あなたのみ心に従って、あなたが救って下さい」と心を全うすると、神様は力ある業を行って下さいます。

ですから、この事を読むと望みが出来ます。望みと言うより恐ろしいように感じるのです。神様の手を動かす訳ですから。「世界とその中に満ちるものは、わたしのものである」とおっしゃいます。神様は、「歴史を支配し、時代を区分し、国々の境界を定めて、多くの人々に命と息とを与えて下さっている」のですから、私の祈りに答えて力を現されたらどういう事になるだろうかと思います。ひとこと祈るのも、これは大変なことです。また、祈らないということも大変な事です。

【この祈りが人の命に直結】

◆昔、潜水夫たちは空気ポンプから空気を供給されながら水に潜りました。船の上で手押しポンプをつくのは、潜水者の身内の人に限られていたということです。今このひとつきがなかったら、下の人は窒息してしまうということですから、たとえ自分がどうなってもつき続ける――そういうことから身内の人をあてたということです。

私はあるとき教えらえたのですが、私が今ここで祈って神様の前に祝福を届けなかったら、あの方は窒息してしまうかも知れないと感じたのです。あの方は確かに神様の手によって憐れまれ、内臓は動いて生きているが、それはあくまで神様の手によって動かされている事ですから、私がもし祈ることをやめたら、大きな罪を犯すのではないだろうかと思ったのです。いたずらに恐れる訳ではありませんが、それくらい私は責任を感じて恐れたのです。

神様は、私たちに対して実際にそのような大きな期待をしておられるのです。神様自身がそうですから、イエス様は私たちにも同じようなご用をさせて下さるのではないかと教えられました。イエス様は、「父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまた、あなたがたをつかわす」とおっしゃいました。

【柘植先生の自覚された使命】

◆私たちの先輩に、基督伝道隊の柘植不二人先生がおられます。大正12年に伝道隊を組織されました。これがいま私たちの教会の肩書になっています。その柘植先生は、大正14年から15年にかけて大病をされましたが、神様のくしきみわざによってすっかり癒され、翌昭和2年の3月に亡くなるまで、短い間に非常に大きな働きをなさいました。その大病とは、胃癌の末期症状だったようで、肉体的

な苦しみの上に、罪に責められたそうです。つまり、柘植先生は神様から使命を与えられていたのに、結果的にそれをおろそかにしたという事で大変苦しまれたのです。その使命とは、ここにあるように、①自分が神様から求められる神の人となること、そして、②そのような１人を起して頂くこと——それが自分の使命であると信じておられたにも係わらず、実際にはなかなかそう行かなかった訳です。

各地で大きな伝道をされると、たくさんの人が救われて、その地方に、「是非教会を造って頂きたい」との要望が起ります。柘植先生自身がそれを全部回る事は出来ませんから、「どなたか代りに遣わして下さい」ということになって、献身期間も短く、不十分と思われる人たちを派遣した為に、のちに問題が起って来たそうです。そのために先生は大変頭を悩まされたという事でした。

そして、使命を誤るというこの大きな罪を犯したからには、到底許して頂く事が出来ない、私は絶望であると、恐れおののいておられる時に、ヨハネ第１の手紙２章にある、「恵みの法廷」の幻を見せられたそうです。裁判長は父なる神様であり、弁護して下さる方は、私の為に死んで下さったイエス様であり、自分はと見れば小さな幼な子でした。それを見た時に、「これなら許されるに違いないと信仰を持つことが出来ました。そして、「子よ、心安かれ、汝の罪、ゆるされたり」と言うマタイ８章のお言葉を頂いて、「主よ、信じます」と信頼した時に「信仰を持って立ちなさい」とお言葉を与えられて、「はい」と立ったところが癌種が溶け落ちたそうです。そしてすっかり癒されて、ほぼ１年間、大変大きな御用をされました。昭和２年の新年聖会は大変な盛会であって、その記録は今でも残っています。

私はその事を聞いた時に、柘植先生が自ら「神の人」となることを求められた姿勢は正しいものだったと思ったのです。

◆この聖会の為の準備は、昨年の春過ぎから少しづつ始まった訳です。（京大形カードによる情報整理、集会記録整理について——省略）。夏の終り頃にはカードをもとにしたラベルが 3-400枚も出来ましたので、ＫＪ法（詳細、省略）によって整理をしました。11月頃まで追加して整理をしながらそれを見ています

と、神様が私にどういう事を教えておられるかが分かって来ます。

そこで教えられたことは、ひと口で言いますと、「他人のことよりも、自分の救をまず第1にせよ」ということでした。ピリピ人への手紙2章には、「おのが救を全うせよ」と書いてあります。人のためと考えるよりも、先ず自分が神様の救にはっきりあずかっていなければ、どうして立つ事が出来るかという事であって、柘植先生が神様の前に教えられたこともそうであったと思います。「自らが神の人となる」ということでした。大先生と言われ、外地にまで進出して大きな御用をされましたが、だからと言って、どんどん出て行くだけではなくて、神様の前に先ず自分の救を全うする———自分が神の人となって、神様と直通でいつも満たされていなければならないと、はっきり自覚されていました。素晴らしいと思います。

◆私もまたそのように教えられて来ました。柘植先生と同様に、「私がその1人となり、また、その1人を起して頂く」のが使命であると教えられました。たくさんの人でなくてもよろしい、神様に対して心を全うする人が起って、その人が火付け役になるならば大火が起ります。どんな大きな火事も、火種はマッチ1本です。

【大火も一本のマッチから】

神様の業にはパウロ1人が必要であり、またモーセ1人、アブラハム1人が必要でした。神様は、大きな集団で何かを一斉にやらせるのではないのであって、心を全うするその1人に対して、ご自分の力を現され、それが燃え広がっていく訳です。

ですから私たちに対する神様の求めも、神様に対して心を全うするその1人となって欲しいし、又その1人が起されるように祈ってほしい言うことです。そのまた大もとは何かと言うと、神様が私たちに対して、「祈ることをやめて、罪を犯すことは、きわめてせざるべし」という御霊の執り成しをして下さっていることです。

私たちが執り成されたように、執り成す者となり、またその1人を起して頂く———それが私たちの使命ではないかと思います。神様は特別な立場の人のことを言われている訳ではありません。今年、神様は私たちを召して、「もし、わた

しに従ってきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」とおっしゃいました。神様は私たちをご自分の僕とし、神の人として全うしようと、この道に従う事を求めておられるのです。

「従う」とはどうする事だろうかと思います。イエス様が十字架に付けられたように、イエス様と共に死ぬならば、共に生きる一一一すると私たちはどこに行って、どうなるのだろうか、と考えますが、具体的な行動においては、「祈る」ことが使命ではないかと思います。

神様は忍び尽くされ、イエス様も忍び通されました。私共の先輩パウロも忍びました。ですから私たちもまた、その跡に従って忍んで行く。自分が忍ばれたように、多くの人々の為に忍び、自分について信仰を持ってもらったように、多くの人の為に信仰を持って行く一一一それが私たちの使命ではないかと教えられたのです。

その鍵はあくまでも十字架です。「自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と言われていますから、自分の熱心でお祈りして聞かれようとしても聞かれません。お祈りは決して大きな声、長い時間、徹夜でお祈りしたから聞かれるのではなくて、あくまでもイエス様が私の為に十字架にかかって下さって、その御名の故に聞いて下さるのであります。決して私たちは間違いをしてはならないと教えられたのです。

◆祈りの義人について読みましょう。ヤコブ5章 13/18節、朗読。「義人の祈は、大いに力があり、効果のあるものである。エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、3年6か月のあいだ、地上に雨が降らなかった。それから、ふたたび祈ったところ、天は雨を降らせ、地はその実をみのらせた」

これは旧約聖書、列王紀上17章から19章あたりに書いてあるエリヤの物語です エリヤは当時のアハブ王の前に立って、「わたしの言葉が再びない間は、地は雨が降らない」と宣言しました。またカルメル山における宗教戦争を通して、「エリヤの神こそがまことの神」と、イスラエルの民が神様を崇めましたから、大雨の近いことを知って、「大雨の音がする。さあ、雨にとどめられないうちに早く

王宮に帰りなさい」と彼は王様を帰して、カルメル山の上でお祈りしました。レバノンの海岸線に地中海に突き出た小さな突起がありますが、あそこがカルメル山です。西の方に向かって、「膝の間に首を入れた」とありますから、一生懸命にお祈りした訳です。しもべに「まだか、まだ何も見えないか」としきりに見に行かせますが、暫くして「手で押さえたら隠れるぐらいの小さい雲が出ています」と言います。「それだ」と自分は急いで帰ったところが、たちまち大雨が降って来て３年半の干ばつは終りました。

エリヤはどうしてそんな力あるお祈りをしたのかと言うと、エリヤ個人が祈りの人だった訳ではありません。彼は、「私たちと同じ情を持った人間であった」と書いてあります。非常に弱い一面がありました。王妃イゼベルのひとことで、命からがら逃げて遠いホレブの山の洞穴に隠れ、「神様、死んだほうがいいです」と言っていました。そんな彼が、神様のお言葉に従った時に、非常に強くなり、その預言する所はことごとく成就しました。それは申命記に書いてある神様の約束のお言葉によってお祈りしたからです。

私たちの「義」というのは、自分が熱心で正しいから、信仰年限が長いから、或いはお祈りが上手だからではなくて、イエス様は「義人は信仰によって生くべし」と言われました。出来上がった立派な人と言う意味ではなくて、「信仰に始まり信仰に至らせる」と言われるのですから、最初の１歩を踏み込んで行く人が、神様の前に義人であって、その人の祈りは神様が必ず聞いて下さるという事です。

今年、「十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」とおっしゃった神様は、私たちに十字架を示して、「あなたの為にこの事をした」「あなたの十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」とおっしゃるので、「そうです。イエス様が私の為に十字架にかかって死んで下さいました。だから私は今、義人として、ここから信仰の１歩を踏み出させて頂きます」という人は、義人であって、その祈りは大きな力があり、効果があるものです。神様は私たちがもし祈るならば、３年６か月の雨どころかもっと大きな事をなさる方であると思います。今の時代を、神様を恐れ敬う時代に変える事も、神様はお出来になります。

◆しかしそうして、心を全うして神様に従うという事は、自分の命を惜しみ、

どっかりと安全な所に座って、手だけ出して、「ちょっと神様、こんなふうにして下さい」という事ではありません。

やはり自分の身を神様の前に投げ出して、「自分に死ぬ」「自分はどうなってもよろしい。神様のみ心が行われるならば」という自分を無にする覚悟がなければ、神様の手を動かす事は出来ないと私は教えられたのです。

◆こんにちこの世の中の色々な情勢を聞くと、「昨年は大変な年だった」とか「90年代はもっと恐るべき変動が起るのではないだろうか。我々の国はどうしたらよいか」とか、たくさんの意見があるようです。「この拝金主義は一体どうなるだろう」「こんな時代になってこれから一体どうなるのか」という訳です。「拡大一点張りの生き方を改めて―――こうしなければ、ああしなければ」と言われますが、それがたやすく出来れば何も問題はない訳です。

私はそれらを見る時、「結局これでは駄目だな」と思いました。人間の生き方が変るには、イエス・キリストの十字架によって内から新しく造り変えられ、神様によって生かされるという所に帰らなければならないと思ったのです。

そのために、私が十字架にかかって死んでも、何の意味もない訳ですが、「たとえ私が十字架にかかろうと、どうなろうと構いません。私をみ心のままにお用いになってあなたの御旨が行われるように」と祈っている訳です。

こんな事を言うと、何か大変ギスギスしたようで、そんな極端な事は出来ませんとお考えになるかも知れませんが、神様は決して、「極端なことをせよ」と言われるのではありません。いま私たちが神様の執り成しと忍耐のもとにあることを覚えるならば、私たちもまた多くの人々の為に、忍耐を持って祈っていく事が使命ではないかと教えられたのです。

◆サムエル上12章にかえる。23節、「また、わたしは、あなたがたのために祈ることをやめて主に罪を犯すことは、けっしてしないであろう」―――この神の人の心は神様ご自身のみ心であり、また今、御霊が私たちに対して執り成して下さっているところです。ですから、私たちもまた許されたように許し、愛されたように愛し、忍耐されたように忍耐して行く事が使命であると思います。

だいぶ前のことですが、神奈川県H市の教会で連合聖会があった時のことです

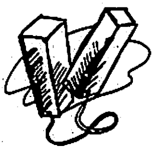
ある婦人が私の所に来られて、「伊規須さんってあなたですか。お顔は知りませんでしたが、ずっとお祈りしていました」と言われました。その方はHさんと言って、F老先生に仕えておられた方でした、「毎朝、F先生と私が祷告簿の中にあったあなたのお名前を見てお祈りしていました。そして伊規須さんってどういう人かと思っていましたが、あなたですか」と言われました。私はその時に、「自分は1人で生きて来たように思っていたが、こんな方々の尊い執り成しによって支えられていたのか」と非常に驚きました。そして自分が祈られたように、祈らなければならない———陰にあって祈り続けなければならないと教えられたのです。

もう1つだけ読んでお祈りしたいと思います。ローマ8章 26/28節、朗読。「御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。そして、人の心を探り知るかたは、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである。神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」

私たちは生きていることを当然と思いますが、御霊は私たちの内から外から、あるいは右からも左からも絶えず私たちの為に執り成して、何とかして私たちの上に神様のみ心が遂げられるようにと働いて下さっています。そして万事を益と変えて下さるのです。

それならば、寝ておけば良いのか———決してそうではありません。私たちはあくまでもその方によって執り成されているのですから、私たちもまたお答えをして、足跡にならい執り成して行かなければならないとしみじみ教えられました。

サムエル上12章23節、「また、わたしは、あなたがたのために祈ることをやめて主に罪を犯すことは、けっしてしないであろう」———では、ご一緒にお祈りしましょう。　　(1990.1.5.14:00　聖会14)



第１５回〈1990年1月5日、午後7時〉

私と契約を結んだわが聖徒

（聖書＝詩篇第５０篇５節）

【砕けた心の感謝を喜ばれる】　２１５

【神の救とは命の恵み】　２１５

【神は感謝の上に座られる】　２１５

【霊肉の危険から守られる】　２１６

【小羊の血とあかしの言】　２１６

＝＝あかし会＝＝　２１６

「いけにえをもってわたしと契約を結んだわが聖徒をわたしのもとに集めよ」

（詩篇50:5）

【砕けた心の感謝を喜ばれる】

◆神様は私たちに対して、「いけにえをもってわたしと契約を結んだわが聖徒」と呼んで下さいました。「いけにえ」と言うと、犠牲にささげる動物ですが、８節に、「あなたの燔祭はいつも私の前にある」とおっしゃるのですから、神様の真のお求めは動物そのものではない訳です。そういうものをささげて貰わないと、私はお腹が減って困ると言われる訳ではありません。

神様の求めは「感謝」です。14節には、「感謝のいけにえを神にささげよ。あなたの誓いをいと高き者に果せ」とおっしゃる、23節には「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」とあります。

神様の前に最も喜ばれるものは、ものではなくて、砕けた悔いた心、柔らかい心です。51篇には、「砕けた悔いた心」と言われていますし、新約聖書には、やもめの献げたレプタ二つが、どんなお金持のたくさんの金貨よりも、多くの献げ物であると言われています。

ですから今日、私たちがあかしを神様の前に献げるとき、大きな立派なあかしである必要はないのであって、私たちが自分なりに、「神様からこのように恵まれました」という感謝を献げるならば、何よりも神様に喜ばれ、「わたしと契約を結んだわが聖徒」と受け入れて下さるのです。

【神の救とは命の恵み】

◆23節には、「自分のおこないを慎む者にはわたしは神の救を示す」とあります。私たちが神様から喜ばれて、その救を示されるのは、その時だけのことではありません。感謝は次々に命を生み出して行くものであって、神の救とは、常に更新されて行く、新しい命であると教えられました。

【神は感謝の上に座られる】

◆神様に感謝を献げると（神様の）臨在をいつも近く感じる事が出来ます。詩篇22篇３節に、「しかしイスラエルのさんびの上に座しておられるあなたは聖なるおかたです」とあります。小さな感謝であっても、私たちが真実をもって神様にささげる時、神様がその上に座して下さるのです。

私は日曜学校で、座布団の絵を描いて話しをしたところ、小さい子供が、「座布団の上に神様が座られるのですか」と言いましたが、確かにそうであって、私

たちが賛美・感謝をささげて行くと、神様は喜んでその上に座って下さるのです。いと清く、いと尊いお方が、私共の賛美を顧みて共におって下さる事は、まことに感謝なことです。

集会の前に賛美を幾つかしますが、一つには、私たちがそれまでの事から離れて神様に集中するためであり、もう一つは賛美する事によって、神様がそこに臨在して下さる――「 2,3人の者がわたしの名によって集う時に、わたしもそのうちにある」と神様がそこに座って下さるのです。

【霊肉の危険から守られる】

◆詩篇50篇23節、「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる。自分のおこないを慎む者にはわたしは神の救を示す」――救は一度だけのものではないと先程申しましたが、私たちが賛美をしていく時に、すべての災いから守られます。臨在はものを癒し、ものを生かします。悪の近寄ることを許されません。サムエルはエベネゼルの石を立てて感謝しましたが、ペリシテはそれを越えて侵攻することが出来ませんでした。私たちが今晩、感謝のささげものをささげる時、神様は親しく臨んで下さるばかりではなく、私共の将来の安全のために、(退くことのない)石塚として下さいます。これは大変感謝なことです。

【小羊の血とあかしの言】

◆黙示録には、「小羊の血と自分のあかしの言葉によって勝つ」と書いてあります。悪魔に勝つのは、小羊の血により、御霊の剣である命の言葉により、感謝・あかしの言葉によります。これによって私たちは再び負けない勝利を与えられる、これは生きた救であり、増殖する救であると教えられました。今晩も率直に感謝して、神様から喜ばれるように一歩進みたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。

◆================あかし================

《ＡＡＡ姉》

◇神様が今、私に向かって、個人的に語っておられると言う事に強く心を打たれました。私はこんな弱い者と思いますが、その私に向かって今語って下さっている―――ですから今後歩いて行く日々、そのように受け取って、一足一足踏みしめて行こうと決心致しました。

◇聖会中のお言葉としては―――――――――――

※「尽くす」ということ―――尽くしたら何も無くなってしまうと言うこと

※イエス様に倣って歩くと言うこと―――イエス様の七重の謙遜と言う所で学びました。これは私の力ではできない事ですが、神様に倣おうとする時、神様が倣わせて下さるのだから、歩いて行こうと思いました

※「用いられる」と言うお言葉―――力が弱くて祈る事もよく出来ないような私ですけど、その私に向かって呼び掛け、用いて下さるとおっしゃるのだから、この方に対して祈り、聞き従いながら歩いて行きたいと思いました。何と言う大きなお恵みだろうかと思います。

◇こんな弱い者と思っても、その私に呼び掛けて下さるのだから、祈って行かなければと思います。熱心努力と言う意味ではなく、祈らずにはおられません。「祈る事をやめて罪を犯す事は決してしない」とあった通りです。もう踏み出したのですから、神様が力を与えて歩ませて下さると感謝しました。

《ＢＢＢ姉》

◇真中の標語「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と言うお言葉が胸に迫って、本当に泣けました。私は口下手でしゃべる事も出来ませんが、この教会で本当に恵まれております。以前は戸畑の土地が嫌いで、主人が満期になったら、いつここを逃げ出そうかと、そんな事ばかり考えておりましたが、今は歩いて10分足らずの所に教会を与えられて、本当に毎日感謝で過ごしております。

◇去る元旦に親戚が集まりました時、皆が、私が変ったと言うのです。「今まであなたは愚痴ばかりこぼしていたけど、今年は愚痴が一つも無いね」と言われました。自分では気が付きませんでしたが、やはり少しは神様を知らせて頂いて、愚痴がなくなったのかなと思いました。本当に嬉しくなりました。感謝でございます。その分、先生に愚痴をこぼして、ご迷惑を掛けていると思います。今年もよろしくお願い致します。

《ＣＣＣ姉》

◇Ｋさんはここに戸畑教会の土台を築いて下さった方と思って感謝していまし

た。こうして私がこの教会で救いに与かりましたので感謝申しあげております。

◇今年は聖会中ずっと神様の御臨在に浸らせて頂いて、本当に感謝でございました。言葉に言い表せないほど、一つ一つ教えて頂いたのですけど、「自分の十字架を負うて私に従ってきなさい」と言うお言葉―――これは私が教会に参りまして、間も無く仕事に入り、色々な戦いの中で、いつも第一番に心に入って来ていたみ言葉でした。

◇信仰と言うものは、本当に生きているものだと教えられました。もう一度ここで新しく、自分を捨て、自分の十字架を負うて、従うべきであると教えられました。

◇神様が尽くして下さったと教えて頂きましたし、「受けるよりは与える方が幸いなり」と言うみ言葉も、実際に教えられました。

◇今年の正月は、主人に何事もなかったので、５日間ずっと出させて頂きました。

◇次男が今年は初めて家で年越しして、親孝行してくれました。聖会にも出席してくれたので感謝でした。いつもと違って、帰宅してから友達と電話連絡するような状態でした。嫁が本当によく尽くしてくれるので、彼もこんなになったのではないかと、神様のお摂理に感謝しています。新しい年もまた歩ませて頂きたいと願います、よろしくお願い致します。

《ＤＤＤ姉》

◇「私のほかに何者をも神としてはならない」と言うお言葉は分かり切っていると思っていましたが、毎日の生活の中で、自分に問い掛けて見ると、実に自分勝手な歩みをしていた事を示されました。「父が私を愛されたように私もあなたがたを愛したのである。私の愛のうちにいなさい」というお言葉で、神様が私たちの為に払って下さった犠牲を知れば、当然み旨に従って歩む筈だと言う話がありました。「私がついつい自分の好きなように信仰生活をするのは、そこだ」と思いました。天国は、高価な真珠を見付けた人が、持ち物を売り払ってそれを買う―――畑に宝を見付けたら、隠しておいて財産を売り払って畑を買う―――この話はよく分かっているつもりでしたが、実は何も知らなかったと気が付き、み

たまがそれを知らせて下さるように願いました。

◇私は毎年、「新年聖会が終ったら、とにかく休まないと、次の出だしが出来ない」と思い込んでいました。ところが今年はKさんご夫妻が見える事になり、３日間の八幡に続いて、戸畑の聖会にも出られると聞きました。「しかし、私は多分ダウンするから、タクシーを利用して貰おう」と思い、段取りしましたが、遠慮なさるので、「これはやはり私がさせて頂きたい」との願いが起り、祈って来ましたら、御覧の通りです。今までは戸畑教会に出たいと願った事もありませんでしたが、神様は私の魂の為にこんな良いプレゼントを下さいました。本当に感謝しています。有難うございました。

《ＥＥＥ姉》

◇初めにお救いを受けた時の事を思い、今の自分を振り返ると、イエス様のご愛に飛び込むことを忘れている時が随分あると、申し訳なく思います。ヘブル13章12節、「わたしたちも彼の辱めを身に負い、営所の外に出てみもとに行こうではないか」と教えられ、これは厳しい事だと目が開かれました。私が止められないことは、無駄なテレビを見る事なのです。自分が今しなければいけない事をほっといても誘惑に負けてしまうのです。まずそこの所を勝利させて頂く――いい加減な気持ちでは改められないと思うのですが、主が開いて下さった新しい道にお従いさせて頂こうと決心しました。

◇「踏まなければ何も自分のものになりませんよ」と言われ、そうそうと思ってこちらに来ましたら、「尽くす」と言うことですね、主が尽くして下さったのだから私共も尽くさなければいけないと思いました。それからまた、「自分を捨て自分の十字架を負うてわたしに従って来なさい」――従うと言う事について、懇ろに教えて頂きました。

◇最後に、執り成しの祈りについてお教え頂きました。これに心をこめてさせて頂くのが、今最も大切な務めであると思いました。余った時間と言っては申し訳ありませんが、ちゃんとした時間帯において、させて頂こうと思います。

◇はじめ私は「聖会のはしご」なんて言っておりましたが、私にとって必要欠くべからざるこの５日間でした。

◇日常生活の中で、主は小さな願い―――たとえば失せ物を捜すこと―――でもちゃんと答えて下さる―――こんな者も選んで立てて下さったゆえに、ご愛を傾けて見ていて下さる―――私共が主をお呼び申しあげるのは勝手な時ばかりですが、そこにいつでもいて下さると言う事は、何と勿体ないことかと思います。望みが一杯です。本当に有難うございました。

《ＦＦＦ兄》

◇実質的には30年ぶりです。現役の時は出張して来ても、すぐ帰っておりました。ところが今度は礼拝、聖会と出られて感謝しています。病院に集中管理室と言うのがありますが、私はひょっとしたら信仰的重症患者で、神様がそこにほうりこんで、徹底的に治療して下さった、そんな事を覚え感謝しております。

◇こちらへ参りまして早速、元部下だった人や友達に電話しましたところ、みな実に変って、弱っていました。人は変り町も変ったけど、「イエス・キリストは昨日も今日もいつまでも変る事がない」と思い、感謝しました。

◇私はこちらへ来る前から、「私を立てまい、大事にしまい。大事にするのは神様だ。私を無にしよう」と決心していました。すると前田で冒頭に、「我のほか何ものをも神としてはならない」と言うみ言葉を与えられ、「私は息子を偶像にしたり、趣味を偶像にしたりしていないか」と反省させられました。

◇こちらで第一番に胸を打たれたのは、イエス様が「われ渇く」とおっしゃった事です。私は今までうっかりして、ほとんど意識しなかったのを、先生のメッセージで教えられました。その一言で、イエス様のご愛に対する自分の冷酷さが胸に応え「よし、これからの歩みは、ここの所を中心に行こう」と、新しい思いを抱かせられました。己を無にすると言う事は神様を愛する事でしょう。「今までの冷酷さをどうか砕いて、許して下さい」と願いました。

◇もう一つ、私はギデオン協会（の聖書配布）の仕事を 5-6年前からやっております。家内もあとから加わりました。そこで私の聖書の読み方は、分かる事が先行しておった訳です。従って「こんな難しい聖書を中学生や高校生に渡しても分かるだろうか」と思うと意欲が減退して来ます。一生懸命にやってはいるのですが、「本当に欲しい人だけにあげたらどうかな」という疑問がずーっとありま

した。しかしここで「聖書は聖書によって解釈する」と教えられました。「そうだ、最後まで、とにかく神様にお任せしてお渡ししよう」と、こう教えられて感謝しました。どうも有難うございました。

《GGG兄》

◇２回だけの出席でしたが、生き返る思いがしました。今年も一日一日を主にあって過ごして行きたいと思います。有難うございました。

《HHH兄》

◇昨年は父母も守られ、新しい年を迎える事が出来ました。感謝です。今年は子供が生まれる予定で忙しい年になりそうです。その中で、今年の新年聖会の標語を心にとめて過ごして行きたいと思います。いつもお祈りして頂いて、有難うございます。

《III兄》

◇初めての聖会出席で緊張したのか、体がもてずに失礼致します。一週間も休みが取れたのは不思議な事です。年末に足を痛めた為に思いがけず休む事が出来ました。皆さんによくして頂いて感謝です。お世話になりました。

《JJJ姉》

◇新しい業を行って下さる方のお話を、聞き足りないと言うのが、本音です。聖会で教えられた事はいろいろありますが、今年もそれを軸として、神様の前に自分はどんな者であるのか、問いながら進んで行きたいと思います。私も勝利の旗を振りたいと思っています。主人が霊感賦を歌っていたのが感謝です。

《KKK姉》

◇この５月で満65歳になります。真中のみ言葉「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うてわたしに従ってきなさい」で大変恵まれました。来年は（新年聖会に）全部出席したいので、今年から宣言したいと思います。

《LLL姉》

◇「あなたがたの為に祈る事を止めて、主に罪を犯す事は決してしないであろう」―――と今日のお言葉で大変恵まれました。ちらっと不信仰を起し易かった

のですが、また恵んで頂きまして有難うございます。

《MMM姉》

◇あなたこそ活ける神の子キリストですと信ずる信仰によって、歩み出させて頂きました。イエス様は生き給う方で、み言葉は生き働いて下さるので、お言葉に信頼して行きたいと願っております。あとから詳しく証しを書いて送ります。(後日、郵送分)私のような者のすべてを許し、無条件で愛して下さる一方的なご愛と、神様の栄光の為に生かされている事を思い襟を正しました。十字架のご愛に少しでもお応え出来る日々であるよう、願っております。神様のみ思いに心が向く時、新しくされる事を教えられました。あなたこそ活ける神の子キリストですとの信仰に立たせて頂き、歩み出します。十字架の血を仰ぎ望みつつ進み行かせて頂きたいと願っております。

《牧師》

◇早い時期に聖会の為に「逆説」と言う表題を与えられました。しかし私自身に対しては、「己が救いを全うせよ」と教えられておりました。

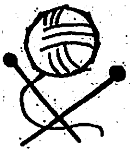
◇大晦日の聖日礼拝は私にとって第0回の聖会であった訳です。「しもべは聞きます。主よ、お話し下さい」ーーー進んで耳を傾けなければ語って頂けない、気付かなければ過ぎ去ってしまうーーーこのような点を整えられました。

◇聖会の進行中は、常にこれが最後かも知れないと言う気持で臨みました。心構えと言うより実際そうでした。求め、学び、整えられつつ進みました。具体的な進行をなさったのは全く神様でした。

◇集会の回数について。過ぎ越しの祭は7日間行われました。柘植先生もある時は7日間の集会をなさったと聞いておりますから、5日が長いとは思いません。機会が多ければ、都合のある人もどれかに出席出来る訳で、私が疲れようが擦り減ろうが構わないと思っていました。しかし、神様はここまで支え満たして下さいました。困難な人が出席できてよかったと思います。

◇今晩、証を伺って、私共の知らなかった所で、神様が新しい事をなさって下さった事を知って感謝致しました。神様は確かに活ける方であります。(以上)

(1990.1.5.19:00 聖会15)



※基督伝道隊　戸畑教会について

【沿革】基督伝道隊は、英国人宣教師 B.F. バックストン師の信仰の流れを汲むもので、1923年柘植不知人師によって設立されました。
　その後、福岡→八幡→戸畑と発展し、1986年 4月、当教会が設立されました。

====【定期集会】====
◆　日曜学校　　日曜日 8時半
（第二日曜学校）日曜日15時
◆　日曜礼拝　　日曜日10時
◆　伝道会　　　日曜日19時半
◆　第一祈禱会　水曜日10時
◆　第二祈禱会　水曜日19時半
◆　金曜会　　　金曜日10時
◆　早天祈禱会　火～土曜日 6時
◇テレホン聖書（終日）881-1059ﾃﾝｺﾞｸ

====【不定期集会】====
◆新年聖会
・1990年は 1月 1－5 日
・毎日10時，14時，19時
◆クリスマス礼拝
◆復活節礼拝など

◆聖餐式　◆洗礼式
◆結婚式　◆幼児祝福式
◆葬式　ほか

============【出　版　物】=============
※私の仕える主は生きておられる（A5判）
　(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)
　1982年以降の礼拝の中から一部を選び、ほぼ全文を収録
※戸畑教会新年聖会記録（A5判）
　1987年版、1988年版、1989年版、1990年版
　全集会のほぼ全文を文章化したもの
※私の使徒行伝（B6判）
　(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)
　1986年以降の各種集会の説教概要集 3-6ヶ月に一回発行
※テレホン聖書メッセージ集（A6判）
　85/86 年版、86/87 年版、87/88 年版、88/89 年版
　１年52-3回分の放送原稿から挨拶などを除いたものです
　一回は150 秒弱のショートメッセージです
　～～～～上記の各出版物を御希望の方は御連絡下さい～～～～

※当教会は、エホバの証人（ものみの塔）、モルモン教会、統一協会（世界基督教統一神霊協会）とは一切関係がありません。

【友好教会】　北九州市／基督伝道隊本部／八幡前田教会
福岡市／基督伝道隊福岡大濠公園教会　その他／出張伝道地

伊規須　太郎（いきす・たろう）
1926年（大正15年）福岡に生まれる
基督伝道隊戸畑教会　牧師

１９９０年新年聖会記録

1990年 3月31日発行

著　者　　伊規須　太郎
発行所　　基督伝道隊戸畑教会出版部
〒804 北九州市戸畑区小芝2-1-13
Tel　093(882)9266
「テレホン聖書」093(881)1059テンゴク

（使用機：JW90HX他）